

# 京都府遺跡調査概報

## 第 38 冊

1. 高田山古墳群
2. 塩谷古墳群
3. 長岡宮跡第 228 次
4. 長岡京跡左京第 222 次
5. 第二京阪道路関係遺跡  
(内里八丁遺跡・新田遺跡)
6. 木津川河床遺跡

1990

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

昭和56年4月に開所した財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターも、はや9年目を迎えました。この間、公共事業は年々増大し、それに伴って、発掘調査は、単に件数の増加にとどまらず、年ごとに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するために、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。こうした発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』その他の各種印刷物を逐次刊行し、関係者の利用に供するとともに、「小さな展覧会」・「研修会」を開催して、一般の普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成元年度に実施した発掘調査のうち、京都府中丹土地改良事務所・京都府園部地方振興局・京都府乙訓土木事務所・日本国有鉄道清算事業団近畿支社・建設省近畿地方建設局・京都府土木建築部の依頼を受けて行った、高田山古墳群・塩谷古墳群・長岡宮跡第228次・長岡京跡左京第222次・第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡)・木津川河床遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が、学術研究の資料として、また埋蔵文化財を理解する上で、何がしか役立つところがあれば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・丹波町教育委員会・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・八幡市教育委員会などの関係諸機関ならびに、調査に直接参加・協力いただいた多くの方がたに厚くお礼申し上げます。

平成 2 年 3 月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

## 凡 例

1. 本冊に収めた概要は

1. 高田山古墳群    2. 塩谷古墳群    3. 長岡宮跡第228次    4. 長岡京跡  
左京第222次    5. 第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡)    6. 木  
津川河床遺跡

を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地・調査期間・経費負担者及び概要の執筆は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 高田山古墳群	福知山市庵我字中	平元. 10. 18 } 平元. 12. 12	京都府中丹土地改良事務所	小池 寛
2. 塩谷古墳群	船井郡丹波町字曾根小字塩谷33	平元. 5. 22 } 平元. 9. 7	京都府南丹土地改良事務所	伊野 近富
3. 長岡宮跡第228次	向日市寺戸町西野辺1-10・11	平元. 7. 3 } 平元. 7. 27	京都府乙訓土木事務所	石尾 政信
4. 長岡京跡左京第222次	向日市森本町上町田	平元. 6. 12 } 平元. 8. 11	日本国有鉄道清算事業団近畿支社	中川 和哉
5. 第二京阪道路関係遺跡	八幡市内里	平元. 2. 1 } 平元. 3. 8 (中断) } 平元. 5. 18 } 平 2. 2. 27	建設省近畿地方建設局	三好 博喜 荒川 史
6. 木津川河床遺跡	八幡市八幡焼木等	平元. 5. 17 } 平元. 9. 12	京都府土木建築部	竹井 治雄

3. 本冊の編集には、調査第1課資料係が当たった。

## 目 次

1. 高田山古墳群発掘調査概要	1
2. 塩谷古墳群平成元年度発掘調査概要	11
3. 長岡宮跡第228次発掘調査概要	31
4. 長岡京跡左京第222次発掘調査概要	35
5. 第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡) 昭和63年度・平成元年度発掘調査概要	47
6. 木津川河床遺跡平成元年度発掘調査概要	59



# 挿 図 目 次

## 1. 高田山古墳群

第 1 図	調査地位置図および周辺遺跡分布図	1
第 2 図	高田山古墳群地形図	2
第 3 図	遺構平面図	3
第 4 図	3号墳主体部2実測図	4
第 5 図	3号墳主体部3実測図	4
第 6 図	4号墳主体部1実測図	5
第 7 図	土壙墓1実測図	6
第 8 図	出土遺物実測図(1)	6
第 9 図	出土遺物実測図(2)	7

## 2. 塩谷古墳群

第 10 図	調査地位置図	12
第 11 図	有舌尖頭器	13
第 12 図	地形測量図	14
第 13 図	2～4号墳墳丘土層断面図	15
第 14 図	2号墳主体部実測図	17
第 15 図	4号墳主体部実測図	18
第 16 図	5号墳墳丘断面図	19
第 17 図	5号墳墳丘輪郭図	20
第 18 図	5号墳主体部実測図	21
第 19 図	出土遺物実測図(1)	23
第 20 図	出土遺物実測図(2)	24
第 21 図	塩谷古墳群の丘陵断面図	29

## 3. 長岡宮跡第228次

第 22 図	調査地位置図	31
第 23 図	調査地平面図	32
第 24 図	第2トレンチ東壁断面図	33

## 4. 長岡京跡左京第222次

第 25 図	調査地位置図	35
--------	--------	----

第 26 図	トレンチ東壁拡張区セクション図	36
第 27 図	調査トレンチ平面図	37
第 28 図	SD22203平面図	38
第 29 図	近世土坑群平面実測図	39
第 30 図	SD22201出土遺物実測図	40
第 31 図	遺構出土須恵器	41
第 32 図	SD22201出土軒丸瓦実測図	42
第 33 図	中・近世土器実測図	42
第 34 図	SD22201出土土器計測図	43

#### 5. 第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡)

第 35 図	調査地周辺遺跡分布図	48
第 36 図	年度別調査地位置図	49
第 37 図	昭和63年度内里八丁遺跡トレンチ配置図	50
第 38 図	昭和63年度内里八丁遺跡土層柱状図	51
第 39 図	昭和63年度内里八丁遺跡出土遺物実測図	51
第 40 図	平成元年度内里八丁遺跡トレンチ配置図	52
第 41 図	内里八丁遺跡6・9トレンチ実測図	53
第 42 図	内里八丁遺跡11トレンチ実測図	53
第 43 図	内里八丁遺跡遺物実測図	54
第 44 図	新田遺跡トレンチ配置図	55
第 45 図	新田遺跡遺物実測図	57

#### 6. 木津川河床遺跡

第 46 図	調査地位置図	59
第 47 図	トレンチ配置図	60
第 48 図	遺構実測図	62
第 49 図	竪穴式住居跡1・2・3	64
第 50 図	竪穴式住居跡4・5	64
第 51 図	竪穴式住居跡6・7・8	65
第 52 図	出土遺物実測図(1)	67
第 53 図	出土遺物実測図(2)	68
第 54 図	北壁断面実測図	69

## 図 版 目 次

### 1. 高田山古墳群

- 図版第1 (1)調査地遠景 (2)調査地全景
- 図版第2 (1)調査前全景(南西から) (2)調査地全景(南から)
- 図版第3 (1)3号墳主体部2・3完掘状況(西から)  
(2)土壙墓1完掘状況(東から)
- 図版第4 (1)4号墳主体部1完掘状況(西から)  
(2)4号墳主体部1土器出土状況
- 図版第5 出土遺物

### 2. 塩谷古墳群

- 図版第6 (1)調査地全景(北東から) (2)調査地全景(南から)
- 図版第7 (1)2号墳全景(南から) (2)同第1主体部(南から)  
(3)同鉄鍬(南から)
- 図版第8 (1)1～3号墳調査風景(南から) (2)2・3号墳全景(南から)  
(3)3号墳出土有舌尖頭器(東から)
- 図版第9 (1)4号墳全景(南から) (2)同主体部出土壺(東から)  
(3)同主体部(南から)
- 図版第10 (1)5号墳全景(南から) (2)同人物埴輪(東から)  
(3)主体部出土須恵器(北から)
- 図版第11 (1)5号墳東部の埴輪(東から) (2)同南東部造り出し(南から)  
(3)同部分上部と埴輪(北西から) (4)同部分出土の埴輪(南東から)
- 図版第12 (1)2・3号墳間の濠(西から) (2)3・4号墳間の濠(西から)  
(3)現地説明会風景 (4)2～5号墳全景(北から)
- 図版第13 人物埴輪
- 図版第14 (1)鉄製品 (2)鉄製品
- 図版第15 出土遺物(須恵器・円筒埴輪)

### 3. 長岡宮跡第228次

- 図版第16 (1)調査前風景(北から) (2)第1トレンチ全景(南方から)
- 図版第17 (1)第2トレンチ全景(西から) (2)第2トレンチ東壁断面

#### 4. 長岡京跡左京第222次

- |       |                  |                       |
|-------|------------------|-----------------------|
| 図版第18 | (1)発掘調査前(南から)    | (2)中近世遺構(南から)         |
| 図版第19 | (1)トレンチ北部近景(西から) | (2)トレンチ完掘状況(南から)      |
| 図版第20 | (1)SD22201遺物出土状況 | (2)SA22204のPit内遺物出土状況 |
| 図版第21 | 出土遺物             |                       |

#### 5. 第二京阪道路関係遺跡

##### (1) 内里八丁遺跡

- |       |                      |                       |
|-------|----------------------|-----------------------|
| 図版第22 | (1)昭和63年度調査前全景(北西から) |                       |
|       | (2)1 トレンチ全景(南から)     |                       |
| 図版第23 | (1)6 トレンチ作業風景(東から)   | (2)8 トレンチ断面(東から)      |
| 図版第24 | (1)平成元年度調査前風景(南から)   | (2)4 トレンチ全景(南から)      |
| 図版第25 | (1)SH1101全景(西から)     | (2)SH1101遺物出土状態(南西から) |

##### (2) 新田遺跡

- |       |                  |                  |
|-------|------------------|------------------|
| 図版第26 | (1)調査前全景(北から)    | (2)調査後全景(北から)    |
| 図版第27 | (1)5 トレンチ全景(南から) | (2)7 トレンチ全景(西から) |

#### 6. 木津川河床遺跡

- |       |              |                |
|-------|--------------|----------------|
| 図版第28 | (1)トレンチ全景    | (2)竪穴式住居跡1・2・3 |
| 図版第29 | (1)竪穴式住居跡4・5 | (2)竪穴式住居跡6・7・8 |
| 図版第30 | (1)素掘り溝群     | (2)土壇群         |
| 図版第31 | (1)柱穴群       | (2)噴砂(断面)      |
| 図版第32 | 出土遺物         |                |

## 付 表 目 次

### 1. 高田山古墳群

- 付表1 主要古墳編年表…………… 9

### 2. 塩谷古墳群

- 付表2 塩谷古墳群一覧表……………28

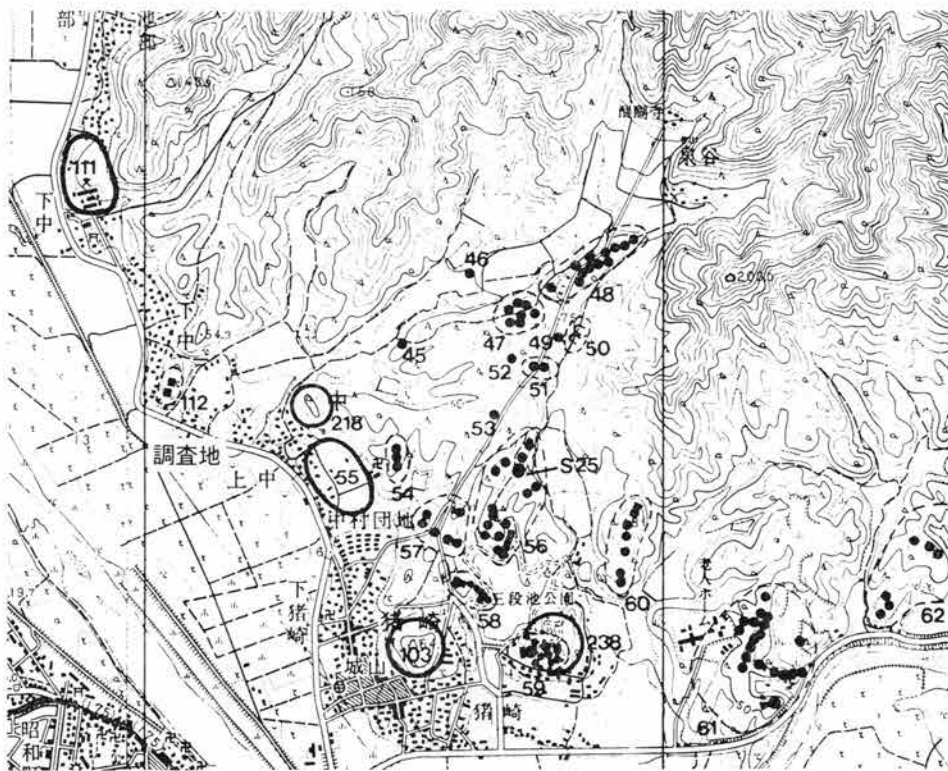


# 1. 高田山古墳群発掘調査概要

## 1. はじめに

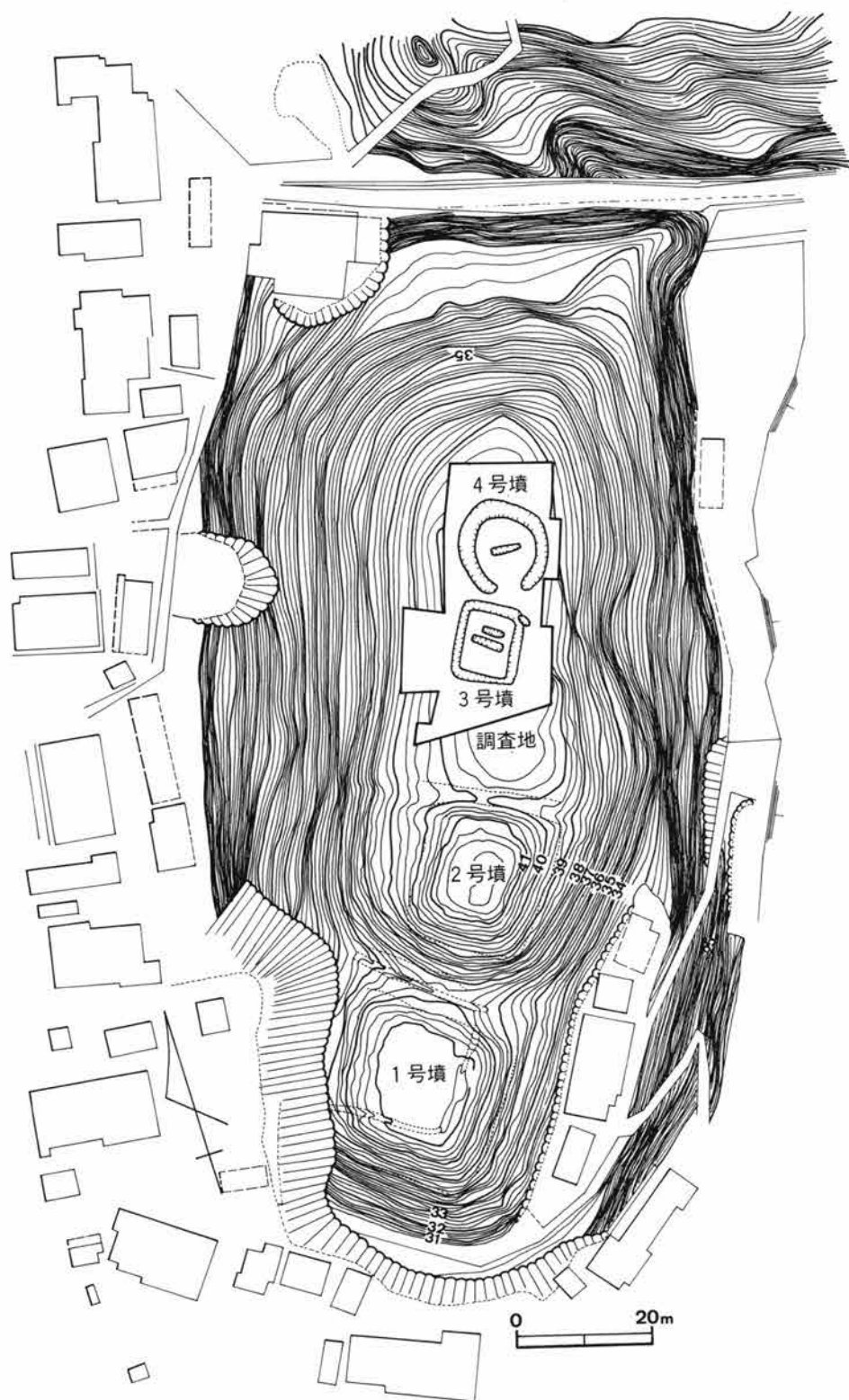
高田山古墳群の発掘調査は、京都府中丹土地改良事務所が計画している府営広域農道建設に伴う事前調査で、同所の依頼を受けて実施した。発掘調査は、平成元年10月18日から同2年1月12日までの期間行い、平成元年12月12日に現地説明会を行った。参加者は、約60名である。

今回の調査地は、一辺25mの方墳である高田山1・2号墳の北側の平坦地にあたる。調査開始時の測量調査によって、1・2号墳と同様な古墳の存在は予想されなかったが、わずかな凹凸を確認し、須恵器を表面採集した。そのため、試掘トレンチによって遺構・遺物の広がりを確認した後、新たに検出した3・4号墳の調査を行った。調査面積は、試掘

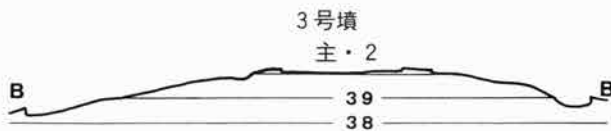
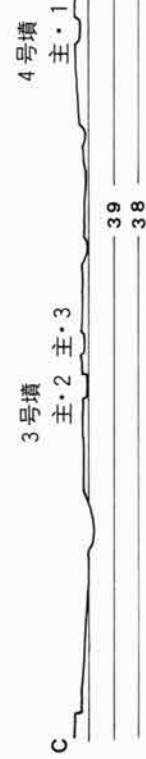
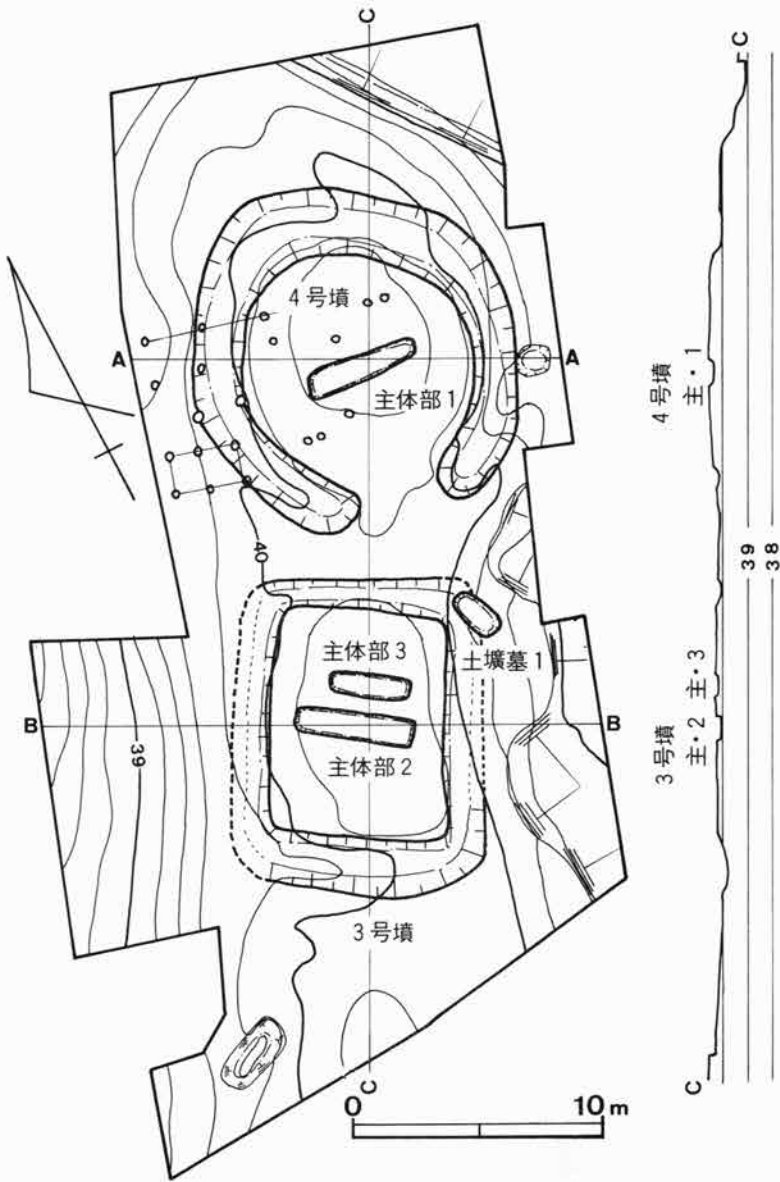


第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図(1/25,000)

112. 高田山古墳群, 47. 西谷古墳群, 48. 泉谷古墳群, 50. 賀茂野須恵器窯跡, 54. 池ノ谷古墳群  
55. 老川遺跡, 56. 池の奥古墳群, 57. 牛坂古墳群, 59. 稲葉山古墳群, 60. 広所古墳群  
61. 東山古墳群, 103. 猪崎城跡, 111. 庵我遺跡



第2図 高田山古墳群地形図



第3図 遺構平面図



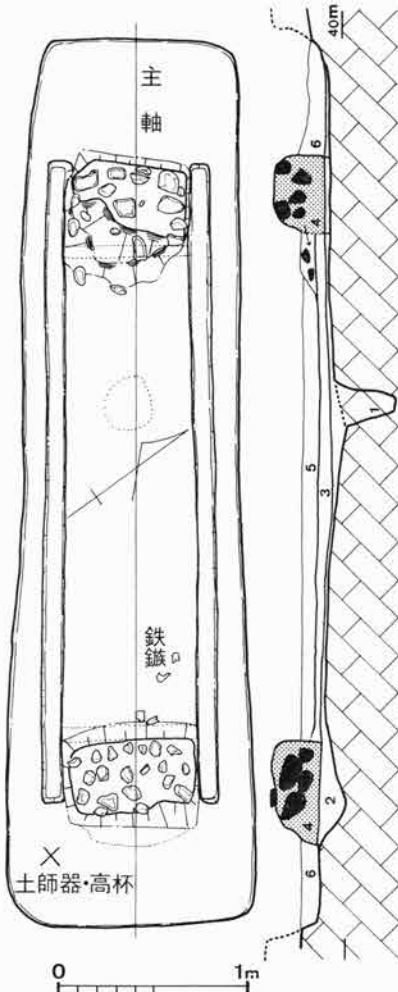
調査地を含め約720m<sup>2</sup>である(図版第2-(1))。

発掘調査は、調査第2課調査第2係長水谷寿克、同調査員小池 寛が担当し、本概要の執筆は小池が担当した。調査を行うにあたり福知山市教育委員会をはじめとして多くの関係諸機関から協力を得た。また、現地調査には、地元有志の方々の協力を得た。<sup>(注1)</sup>記して感謝の意を表したい。なお、発掘調査に係る経費は、すべて京都府中丹土地改良事務所が負担された。

## 2. 調査概要

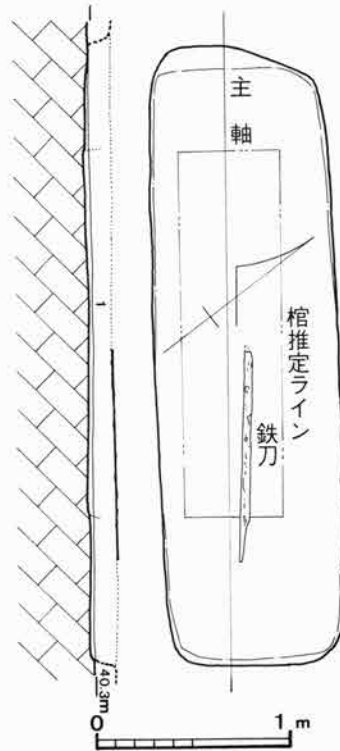
### (1) 遺 構

高田山古墳群は、京都府福知山市庵我字中に所在する。当該丘陵から福知山市内周辺を広く見渡すことができ、古墳を築造する条件は良好である(第1図)。



第4図 3号墳主体部2実測図

1. 黒褐色土, 2. 暗茶褐色土, 3. 黒褐色土  
4. 黄褐色粘土と礫, 5. 黒褐色粘質土, 6. 5より暗い



第5図 3号墳主体部3実測図

1. 黒褐色土

周辺には、池の奥古墳群をはじめ泉谷古墳群・東山古墳群などの後期古墳群が所在しており、過去の発掘調査によってそれらの実態が徐々に明らかにされつつある。

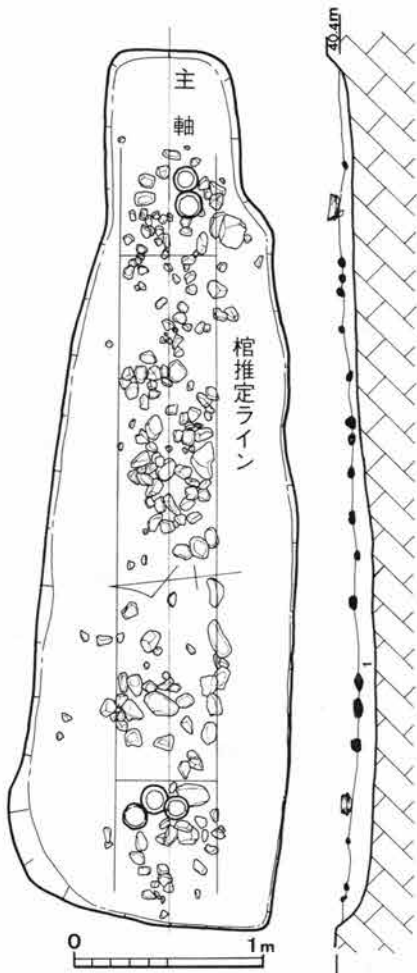
高田山1・2号墳は、1980年に山城考古学研究会によって測量調査が行われ、<sup>(註2)</sup> 1号墳は一辺25mの方墳、2号墳は南北22m・東西19mの方墳であることが判明した。いずれも墳丘高2.5mを測り、残存状態は良好である。築造時期については、弥生時代に盛行する方形台状墓的要素を残している点から、5世紀前半を前後する時期と考えられているが、表採資料などが確認されていないので、確定できていないのが現状である。今回の調査によって関連する遺構の検出が期待されたところでも<sup>(註3)</sup>ある(第2図・図版第1-(1))。

今回の調査地は、1・2号墳の北側に広がる平坦地にあたり、尾根の主軸線上で3・4

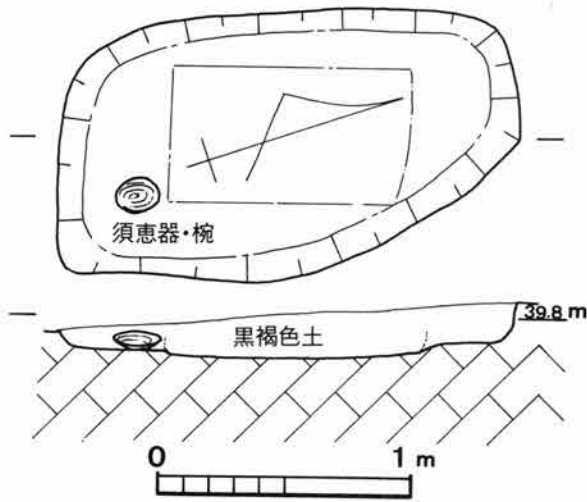
号墳を検出し、隣接した部分で平安時代の土壙墓、時期不明のピットを検出した。なお、わずかに残存する墳丘内から弥生時代に比定できる土器資料が出土しており、墳墓築造以前になんらかの土地利用が行われたと考えられる(第3図・図版第1-(2)・2-(2))。

**3号墳** 墳丘の大半が削平されているため墳丘高については不明であるが、周溝最下部間で計測すれば南北11m・東西9mの規模をもつ方墳である。周溝の外側肩部は、概して南北部分の残存状態は良好であるが、東西部分は、谷地形による崩落などによってほとんど残存していない。墳丘中央部では埋葬主体部を2基検出した。

**主体部2**(第4図・図版第3-(1))の掘形は1.15m×4.7mの規模を有し、棺は0.65m×2.6mである。棺の形式は通有に見られる「H」形の組合式木棺であるが、両木口には幅0.65m・高さ0.28mの範囲に拳大の礫と黄褐色粘土をていねいに充填し、木口板が倒れ込まないように工夫されている。東側木口部の棺外から土師器・高杯(第8図9・10)が2点出土している。棺床は、黒褐色粘質土と黒



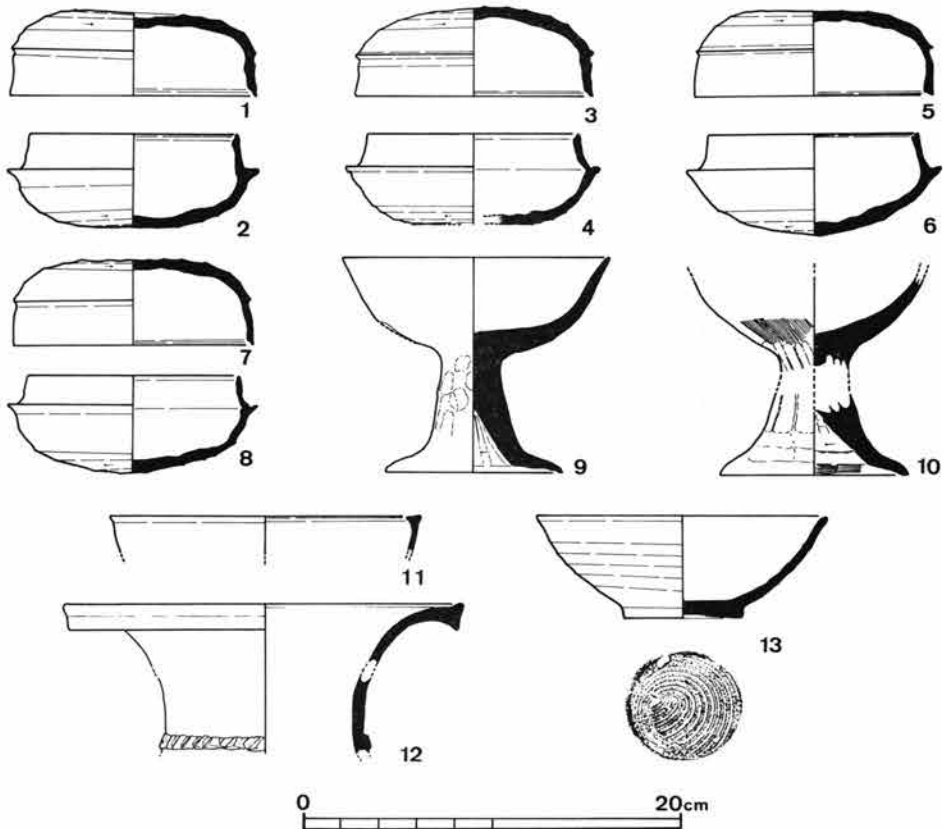
第6図 4号墳主体部1実測図  
1. 黒褐色土



第7図 土壙墓1実測図

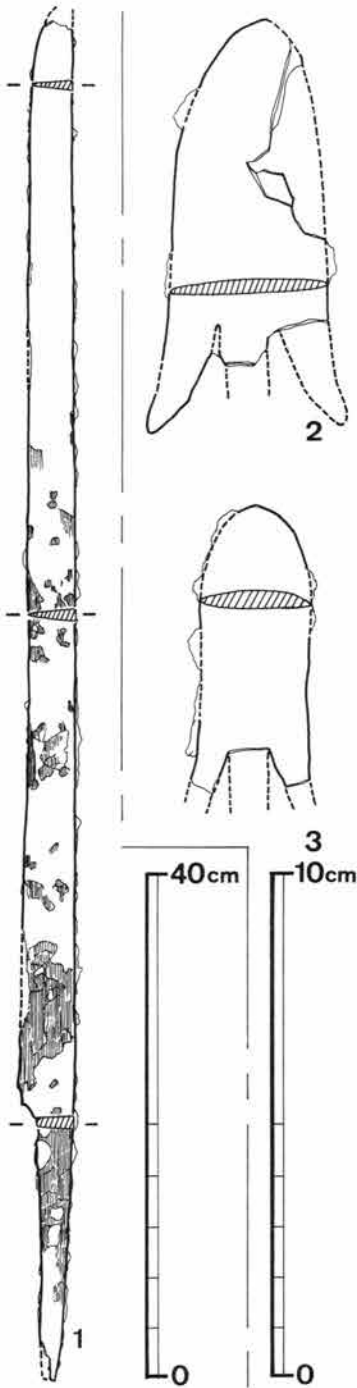
褐色土を敷いて平坦にしている。また、棺床下の地山面にはピットが掘り込まれており、排水を目的としたものと考えられる。棺内東端床面直上で鉄鏃2点(第9図2・3)が出土しているが、他の副葬品は確認できなかった。

主体部3(第5図・図版第3-(1))の掘形は1m×3.2m、棺は0.5m×1.9mの規模を有している。墓壙の大半が削平さ



第8図 出土遺物実測図(1)

1・2・5～8.主体部1, 3・4・11・12.包含層, 9・10.主体部2, 13.土壙墓1



第9図 出土遺物実測図(2)  
1.主体部3, 2.主体部2

れているため、埋土の状況や棺の形式を確認することはできなかったが、主体部中央部分の地山面がわずかに落ち込み、その範囲を棺の規模と推定した。床面直上に堆積する黒褐色土上面では、長さ107cmの直刀(第9図-1・図版第5-1)が出土している。

両主体部の新旧関係は、規模も大きく中央に位置する主体部2が先行し、その後、主体部3が掘り込まれたと考えられる。なお、わずかに残存する墳丘盛土内から弥生時代の土器(第8図11・12)が出土しており、墳墓築造以前になんらかの土地利用があったものと考えられる。主体部2のほぼ中央部分には、直径30cm・深さ30cmの円形ピットが墓壙成立以前に掘り込まれており、弥生時代に掘り込まれた可能性も指摘できる。

4号墳(第3図) 3号墳の北側に隣接して築造された直径11mの円墳である。後世の削平を受けて墳丘の大半は消失しているが、埋葬主体部と周溝は残存している。周溝は完結せず、南方部分に幅3mの陸橋状掘り残し部分を設けている。この部分は、墳丘中心点から測れば真南北方向に設けられており、築造当初から磁北方向を意識して掘り残したと考えられる。周溝内からは土師器・須恵器が出土しているが、破片資料が多く埋葬行為に関係するものではなく、墳丘削平時に周溝内に混入したと考えられる。

墳丘中央部では磁北に直交する主軸線をもつ主体部1(第6図・図版第4-(1))を検出した。掘形は0.7m×4.96mが基本的な規模であるが、掘形幅についてはその大半が攪乱を受け、築造時の状態を保っていない。棺は0.53m×2.76mの規模をもっている。棺床には拳大の礫を敷いているが、後世の攪乱によって粗雑な配置になっている。棺の側板は、主軸線に平行して並べられた礫列によって確認できるが、

木口板部については、礫群が点在することと須恵器の出土位置から想定した。

棺内から副葬品は検出できなかったが、両木口部棺外から須恵器を各々3点検出した(図版第4-(2))。東側部分では杯身と杯蓋があわさった状態で出土し、西側では杯身・杯蓋の口縁部を上位に配置した状態で出土している。

**土壙墓1**(第7図・図版第3-(2)) 3号墳の北東部周溝内に掘り込まれた土壙墓であり、墓壙主軸線はほぼ磁北と一致している。墓壙の規模は、南北2m×東西1.2mで、基本的な深さは、北方で18cm・南方で8cmである。墓壙中央部には、南北0.92m×東西0.52mの範囲にわたって地山を3cm前後掘り下げた痕跡があり、形式については不明ではあるが、木棺を想定できる。その木棺想定範囲の南方では、地山直上で須恵器・椀(第8図13)が1点出土している。なお、今回の調査地内では同時期の遺構は確認しておらず、周辺地域に所在する遺跡との関係で考えねばならない。

**ピット群**(第3図) 4号墳の西方を中心に広がっており、掘立柱建物跡や柵列を検出している。出土遺物がなく時期設定はできない。

## (2) 出土遺物

### 土器類(第8図・図版第5)

**須恵器・杯蓋** 出土した杯蓋は4点であるが、天井部の形態が平らな1・5と丸い3・7の二種類に分類することができる。肩部の稜は、1は鈍いが3・5・7は比較的鋭く仕上っている。口縁部は、外方へわずかに開く1・2と、わずかに内湾する5・7に分類できる。口唇部は基本的に内傾している。口径は、1が12.9cm, 3が12.4cm, 5が12.5cm, 7が12.5cmである。

**須恵器・杯身** 底部外面の形態が平らな2・4と丸い6・8に分類できる。受け部の形態は、水平にのびる2・4と、上外方にのびる6・8に分類できる。立ち上がりは、ほぼ垂直で、口唇部は内傾している。口径は2が10.8cm, 4・6が11cm, 8が11.1cmである。

**土師器・高杯** 平らな杯底部から内湾し、外方へ直線的にのびる口縁部をもつ。また、脚部は外方に開き屈曲して端部に至る。調整は、脚部外面に指頭圧痕が残り、杯部外面にはハケメが残る。9の口径が14cm・脚径が9.2cm・器高が11.4cmである。

**弥生土器・鉢** 11は口縁部に1cmの面をもつ。口径16.4cm。

**弥生土器・壺** 12は頸部から外反する口縁部をもつ。口縁端部は肥厚し面をもつ。頸部には指頭圧痕突帯がめぐる。口径21.2cm。

**須恵器・椀** 13は平らな底部から内湾し口縁部に至る。底部には糸切り痕が観察できる。口径15.3cm, 器高5.35cmである。

図化できた資料以外に、近世陶磁器片がピット群周辺で出土した。また、東播系の摺鉢片が出土している。

#### 鉄製品(第9図)

刀 1は、全長107cm・刀身長85.2cmを測る。全体に翰木質が残存している。

鎌 双方とも逆刺の付く平根式の鉄鎌で、残存長は2が8cm、3が5.5cmである。

### 3. 小 結

今回の調査では、すでに知られている1・2号墳の北側平坦地で、新たに方墳である3号墳と、円墳である4号墳を確認することができた。築造時期は、4号墳の主体部1から出土した須恵器群が一括資料として認識できる状況にあり、陶器編年TK23ないしTK47

(注4)前後に比定できる。一方、3号墳の主体部2には、須恵器の副葬が見られず、その点に留意すれば、少なくとも4号墳よりは先行して築造された可能性が高い。なお、3号墳の主体部2から出土している土師器・高杯は、土師器の編年的研究が進展していない現時点では、時期設定の根拠には適していないと言える。そのため、今後の研究の進展を待って再検討を行いたい。なお、付表1に掲載した高田山古墳群2基は、1・2号墳を示しており、新発見の3・4号墳は、それから垂下する線でおおむね表現した。今後正確に築造時期を設定し、表現方法を確定したい。

高田山1・2号墳は、一辺25m・墳丘高2.5mを測る高塚として認識されてきたが、今回検出した3・4号墳は11mを基本

付表1 主要古墳編年表

時 期	綾部市・福知山市の主要古墳		他地域の主要古墳
	綾 部 市	福 知 山 市	河内・大和・山城等
300	成山	豊富谷丘陵	椿井大塚山 元稲荷
400	久田山 葛浦塚 聖塚	高田山 又クモ塚 中坂	メスリ山 津堂城山 久津川車塚 ウワナベ
500	沢3号 私市円山 以久田野 田坂野	妙見	大仙陵
600	奉安塚 長尾 高龍塚	牧正	今城塚 見瀬丸山

とする方墳および円墳であり、墳丘の大半が削平されているものの、低墳丘であった可能性が高い。両者の古墳を墳丘規模から比較すれば相違点も多く、その要因として築造時期の大幅な違いによるものと解釈することができる。

周辺地域の古墳を概観すれば、弥生時代の方形台状墓の系譜を引く方墳が、基本的に5世紀前半から中葉で築造されなくなる傾向がある。一方、5世紀後半の早い時期には、綾部市私市円山古墳が築造され、それまでの伝統的な方墳は、小型化ないし消失する傾向にある。おそらく、3・4号墳もその影響を受けて、小型化が進んだと考えられる。<sup>(注5)</sup>

3号墳で検出した主体部2(第4図)の構造は、周辺地域に限って見れば、池の奥3・6・7号墳などに類例を求めることができる。これらは、時期的には出土した須恵器から6世紀中葉ないし後半と報告されており、主体部2の成立時期とは時期差を認めざるを得ない。可能性としては、TK23およびTK47前後以前に成立した構造が池の奥古墳群成立時期まで踏襲されたと考えられる。今後、その中間に位置付けられる古墳の主体部の構造が明らかになれば、構造の変遷が解明できるであろう。

古墳時代以前の土器には、弥生時代中期の壺・鉢などがある。今回の調査では、それらの遺物を一括して取り上げる状況になかったが、なんらかの土地利用があったと考えられる。また、平安時代の土壙墓は、周辺の歴史的環境と深く関連するものであろう。

(小池 寛)

注1 調査参加者

橋本 稔・塩見百太郎・塩見健次郎・塩見忠男・塩見美夫・坂東 正・塩見信男・塩見順吉・塩見すえ子・塩見鈴子・佐野ゑい・塩見かをる・塩見あや子・塩見とき枝・塩見千世子・塩見美寿子・塩見貞子・塩田あや野・塩見志げの

注2 益田日吉「高田山古墳群」(『丹波の古墳』1—由良川流域の古墳—山城考古学研究会)1983.12

注3 小池 寛「高田山古墳群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第35号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1990.4

注4 田辺昭三「陶邑古窯址群1」(『研究論集』第10号 平安学園考古学クラブ)1966

注5 小池 寛「綾部市・八田川上流域における古墳の変遷—綾部市・奥大石古墳群を中心にして—」(『京都府埋蔵文化財情報』第34号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1989.12

## 2. 塩谷古墳群平成元年度発掘調査概要

### 1. はじめに

本報告は、平成元年度に京都府北部の船井郡丹波町曾根で調査された塩谷古墳群についてのものである。発掘調査の発端は、この丘陵の土砂を削平して同町内にある谷山池の堤防を整備するという計画がなされたためである。このため、当調査研究センターは京都府園部地方振興局の依頼を受けて、5月22日から9月7日まで現地調査を実施した。但し、事業計画が2か年にわたっていることから、今年度は12基ある古墳のうち、まず北側に分布する8基を調査し、残りの4基については来年度改めて調査<sup>(補注)</sup>を行うこととした。

なお、現地調査は2～5号墳を当調査研究センター調査第2課調査第2係長水谷寿克と同主任調査員伊野近富が担当し、1・7・8・11号墳と一部の試掘調査を、京都府教育委員会文化財保護課技師森下 衛氏が担当した。本報告は前者の成果を公表するものであるが、古墳群の正確な意味づけのために、一部後者の成果も加えている。発掘調査面積は双方併せて約1,600m<sup>2</sup>である。

調査中は丹波町教育委員会・曾根生産森林組合を始め、関係諸機関に大変お世話になった。また、調査補助員や整理員、作業員には真夏の酷暑の中、多大な労苦をかけた。記して感謝し<sup>(注1)</sup>たい。なお、発掘調査にかかる費用は全額京都府(京都府南丹土地改良事務所)が負担した。

### 2. 位置と環境

遺跡の所在地は、船井郡丹波町字曾根小字塩谷33番地である。

調査地は、丹波山地に形成された標高150～170mの高原地帯の一角を占める丹波町の中央部に位置している。高原の中心である蒲生や豊田とは小丘陵によって隔絶しており、東西にのびる小盆地となっている。塩谷古墳群は、南の山塊より派生した幅約150m(上端の平坦面は幅約20m)の小丘陵の稜線とやや東斜面寄りに築造されている。両側の水田との比高差は約20mである。調査前は山林であった。

周辺の歴史的概況について述べると、明確に人跡がたどれるのは弥生時代中期からで、美月遺跡や蒲生遺跡が知られている。古墳時代の集落跡は不明だが、蒲生遺跡で後期頃の須恵器が出土している。古墳は横穴式石室墳を主体とし、丹波町内で約60基確認されている。最近、地元の人々によって分布調査が進み、70～80基程度はあったらしいとのことである<sup>(注2)</sup>。その中で、前方後円墳は大字富田にあるカナヤ1号墳(全長34.5m)と、豊田にある





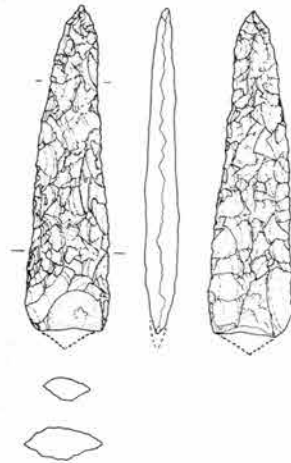
第10図 調査地位置図 (1/25,000)

1. 塩谷古墳群 2. 深志野古墳群 3. 宮の浦古墳群 4. 森狐塚古墳 5. 森遺跡 6. 山田古墳群
7. 塩田谷遺跡 8. 須知遺跡 9. 上野城跡 10. 豊田城跡 11. 豊田車塚古墳 12. 藤浪古墳
13. 美月遺跡 14. 浦生遺跡 15. 浦生野古墳群 16. 家ノ奥古墳群 17. 実勢古墳群 18. 古墳

豊田車塚(きものもり)古墳(全長31.5m)の2墳のみである。いずれも発掘調査が行われておらず、詳細は不明であるが、立地が台地上である点や、後者では須恵器が出土したとのことから、おおよそ6世紀に属するのであろう。

塩谷古墳群を中心とし、そこから眺望できるのは宮の浦古墳群7基と深志野古墳群8基で、いずれも横穴式石室墳である。これに対して当古墳群は木棺直葬墳で、その前段階であることが判明した。なお、調査中3号墳墳丘から有舌尖頭器が出土した。サヌカイト製で、基部が若干欠損しているほかは遺存状態はよい。縄文時代草創期頃に比定でき、約1万年前のものである。

奈良時代には、当古墳群より西約1kmに数基の須恵器窯跡がある。また、平城京で発見された木簡には「丹波<sup>(注3)</sup>国船井郡曾尼里秦人吾口米」と書かれており、層位から8世紀前半と推定されている。曾尼は曾根で、8世紀前半に渡来人である秦人が居住しており、米を貢納したことがわかる。平安時代では、古墳群の北600mのところに現在何鹿神社があるが、これは『延喜式』の「出石鹿嶋部神社」であり、往時と同地点ではないにしろ、周辺が有力地であったことを傍証している。近世には山陰街道が通っており、交通の要衝地であったことが知られる。



第11図 有舌尖頭器(S=1/2)

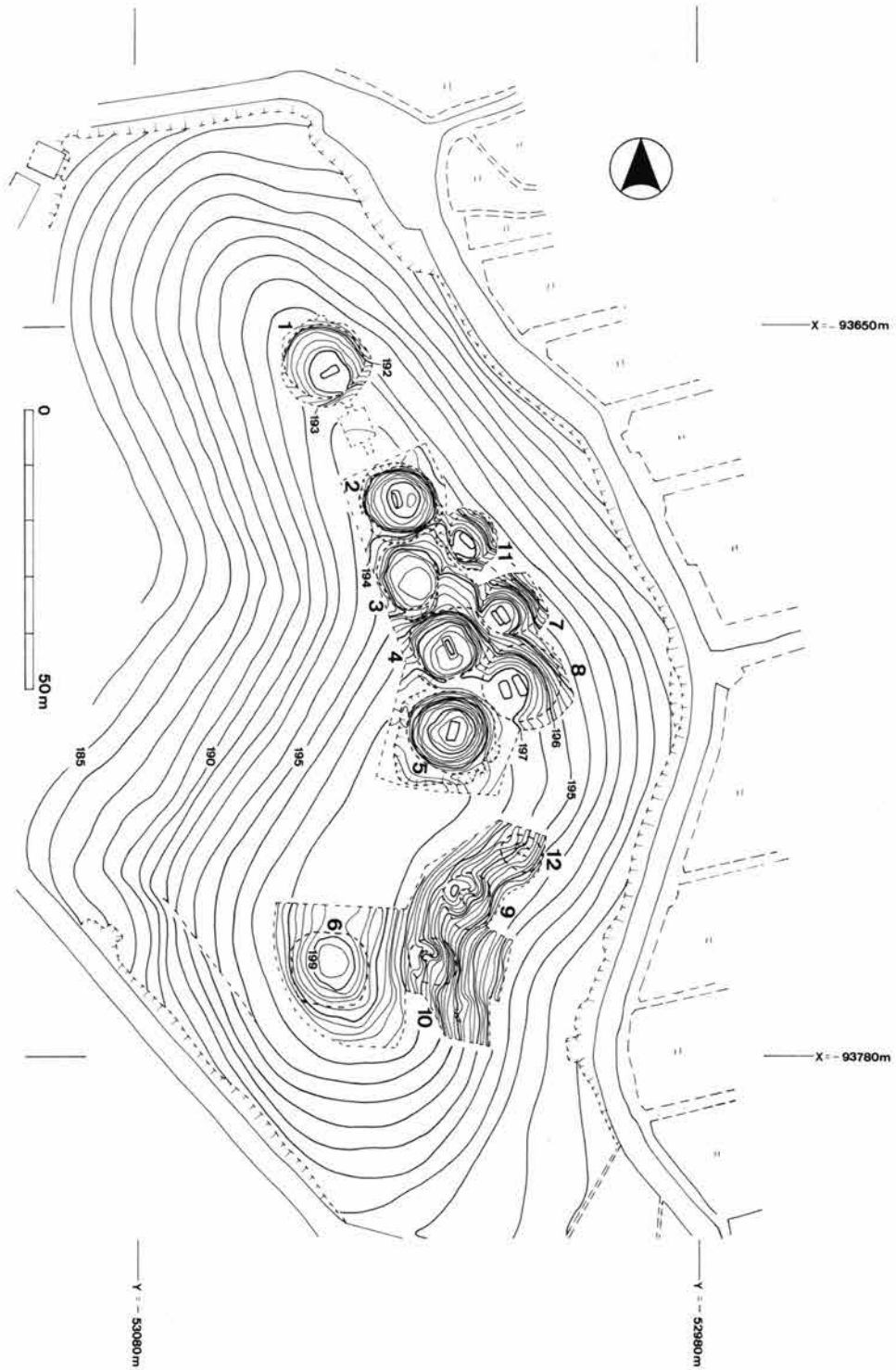
### 3. 調査概要

当古墳群は、『京都府遺跡地図』には掲載されてはいなかったが、開発計画が出されたため京都府文化財保護課が事前踏査をして、古墳として確認されたものである。

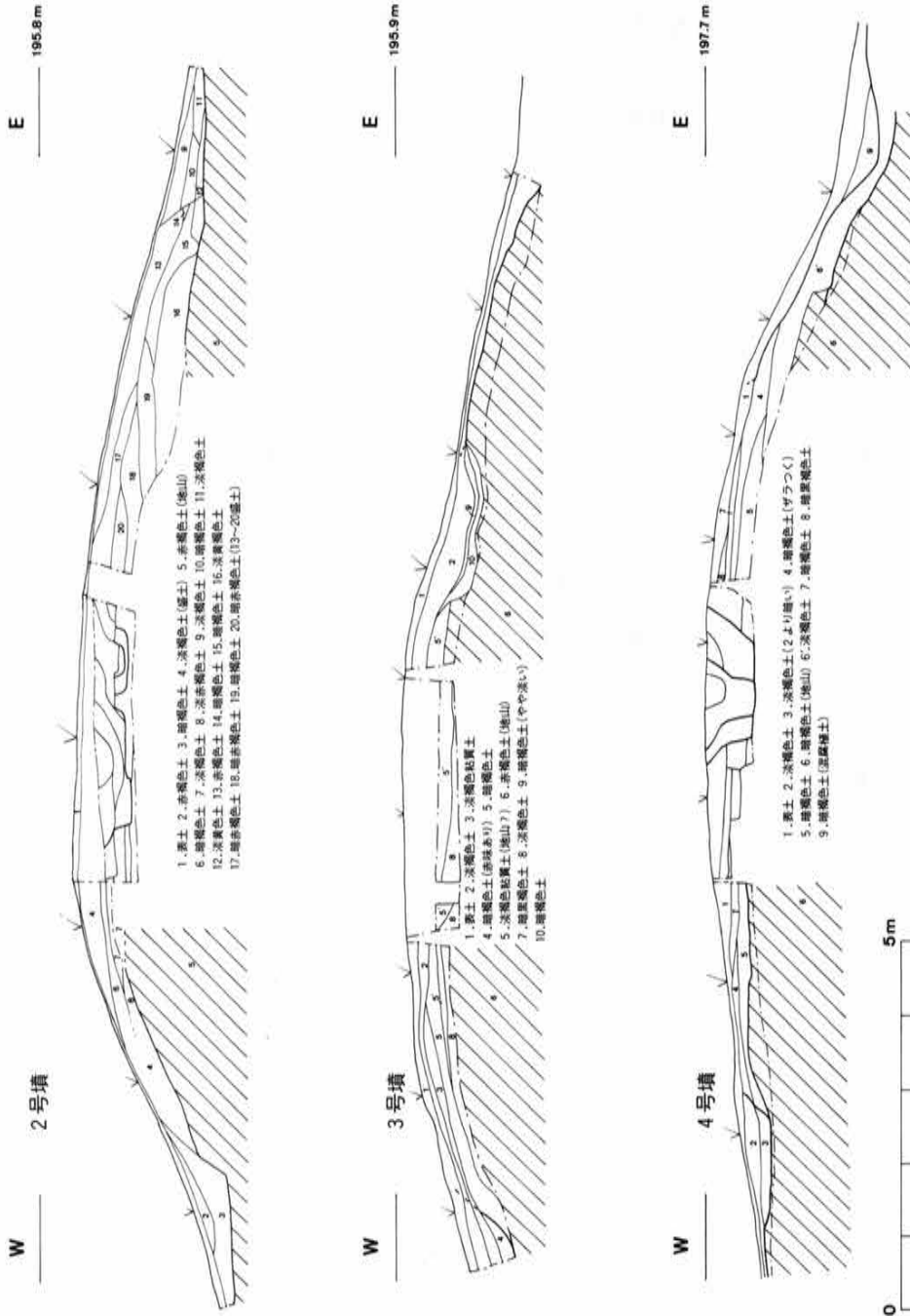
発掘調査は、地形測量から始めた。その結果、古墳状隆起を14か所確認した。後に、文化財保護課の確認調査によって、古墳は12基と確定した。第12図に表現した座標は、国土座標である。なお、図面はすべて座標北である。5月22日から6月5日まで断続的に地形測量を行った後、6月6日から腐植土を除去する作業を開始した。その時点で、5号墳は埴輪を備えていたことが判明した。それでは、センターが実施した2～5号墳についての概要を以下に述べる。個々の墳丘規模については付表2を参照していただきたい。

#### 2号墳

丘陵の先端にある1号墳とは離れているが、近接して配置された2・5・7・8・11の7基の中ではもっとも先端にある円墳である。丘陵の上部、すなわち南側に最大幅3mの濠を造り、3号墳と隔離させている。濠は南が深く、北は75cmである。また、北東部はテラス状で濠を掘っていない。主体部は2つで、西側の第1主体部は南北に長く、主軸はN23°Wである。掘形の内側に棺の輪郭を示す落ち込みを検出した。南北3.1m・東西0.75



第12図 地形測量図



第13図 2~4号墳 填丘土層断面図

mで、掘形より5cm深い。鉄鏃は北半部の1か所に集中し、先端を南に向けて置かれていた。あまり大きく乱れてはいず、棺内に置かれた可能性が高い。点数は13~15本である。鉄製刀子は2本南半分に置かれていた。これが遺体の腰の辺りに置かれていたとすると、鉄鏃は頭の北に置かれていたことになり、矢を頭位北に置くことを前提に木棺を設定したことになる。東側の第2主体部は遺物がなく時期は不明であるが、層序によれば第1主体部より古い。墳丘上南部で須恵器甕と須恵器杯蓋を検出した。陶邑編年ではMT-15で、6世紀前半頃か。なお、南側の濠は3号墳を一部削っているので、2号墳の方が新しい。

### 3号墳

2号墳のすぐ南側にある円墳である。中央部にあった木の根によって埋葬施設は壊されており、規模などは不明である。濠は南半分のみで、4号墳の一部を削っている。出土遺物は、墳頂部で検出した須恵器杯身1点と、墳丘内で出土した有舌尖頭器1点とがある。

### 4号墳

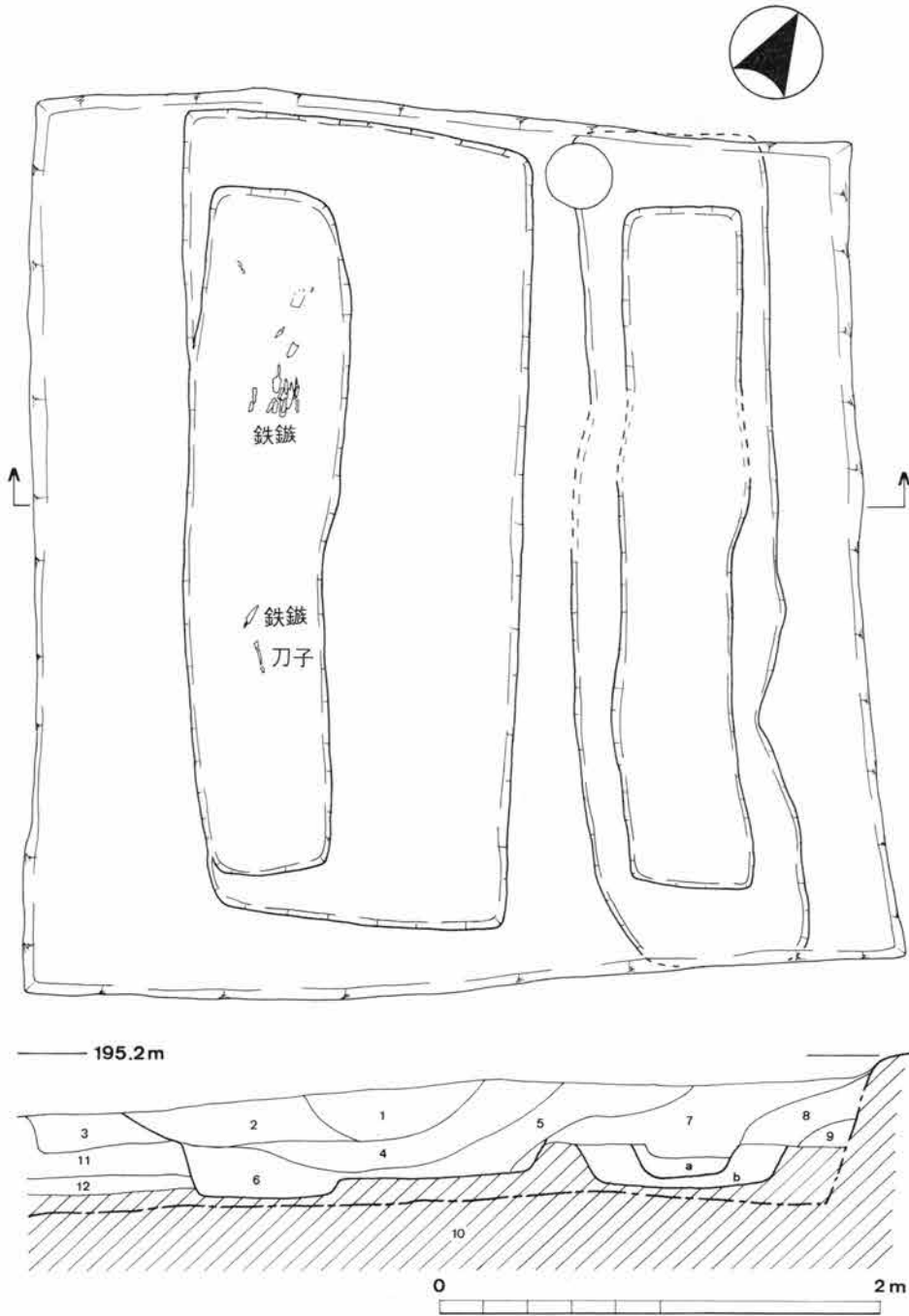
3号墳のすぐ南にある円墳である。墳丘の表土を除去した時点で、頂部に須恵器壺片のあることが判明した。その後、掘削を進めていくにしたがって、この遺物が棺上(あるいは墓壙上)に置かれていることも判明した。主体部は南北に長く、主軸はN28°Wである。掘形は4.4m×1.8mで、棺の輪郭は3.3m×0.8mである。棺の底と掘形は同じレベルである。出土遺物は須恵器壺1点である。濠は南西部のみで検出された。東部は7号墳の溝によって削られており、また、5号墳の濠(非常に浅い)の一部を削っていた。

### 5号墳

4号墳のすぐ南側にある円墳である。丘陵の最頂部に立地しており、規模も大きく、この古墳群の盟主墳として理解できるものである。埋葬施設は、中央部で1か所確認されたが、ほとんどは既掘されており詳細は不明である。かろうじて知られる主体部掘形は南北に長く、主軸はN29°Eである。掘形は4.2m×2.3mで、棺の輪郭は3.8m×1.9mである。ほぼ原位置を保った遺物としては、須恵器杯身と蓋がある。棺の中央部西寄りにセットになって置かれていたもので、木棺が崩落した際、若干内側に埋没したらしく、身が垂直方向となっていた。したがって、かつては棺上に置かれていたことになる。また、北部では鉄鏃2本と鉄刀子1本が棺内のレベルで検出された。

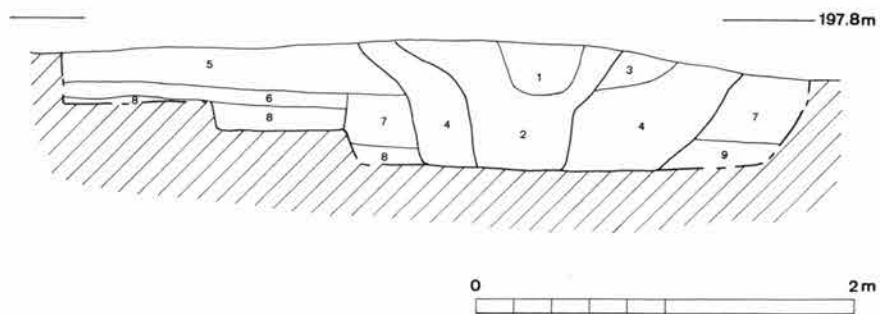
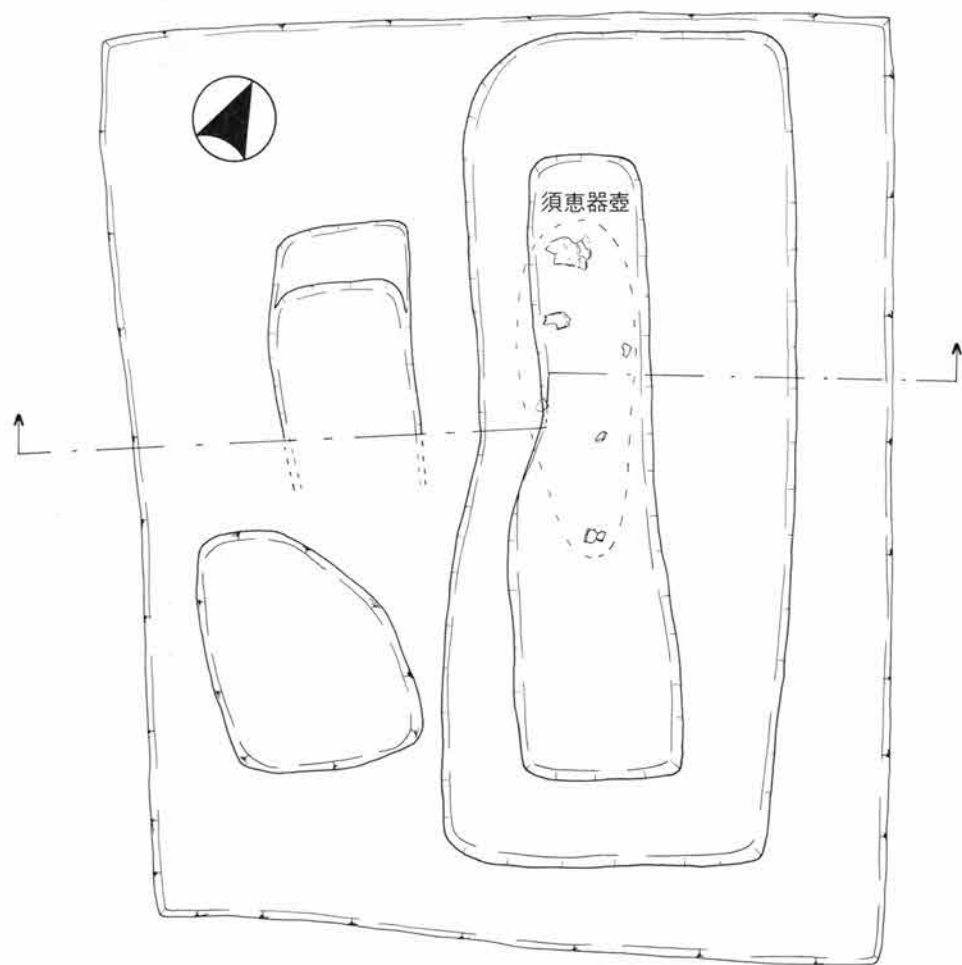
墳丘のまわりには濠が掘られていたが、南半分が顕著で深さ50cmほど遺存していた。北側は深さ5cmほどであった。なお、南東部の濠は一部地山を掘り残しており、墳丘から張り出した土壇状(第17図参照)となっていた。この両側の濠や墳丘斜面から朝顔形埴輪片(第20図2)が出土した。

さて、墳丘下面から約1m上がった地点に円筒埴輪が樹立されていた(第17図)。現状で



第14図 2号墳主体部実測図

1. 淡赤褐色土 2. 赤褐色土 3. 淡赤褐色土 4. 3+淡褐色塊 5. 淡赤褐色土 6. 赤褐色土  
 7. 淡褐色土 8. 赤褐色土 9. 暗褐色土 10. 暗褐色土 11. 淡褐色土(盛土) 12. 暗褐色土  
 a. 淡褐色土 b. a+橙褐色土斑



第15図 4号墳主体部実測図

1. 暗褐色土 2. 赤褐色土(棺) 3. 淡赤褐色土 4. 暗褐色土(掘形) 5. 淡褐色土(盛土)  
6. 黄褐色土(盛土) 7. 淡褐色土 8. 暗褐色土(盛土) 9. 暗褐色土 10. 淡褐色土



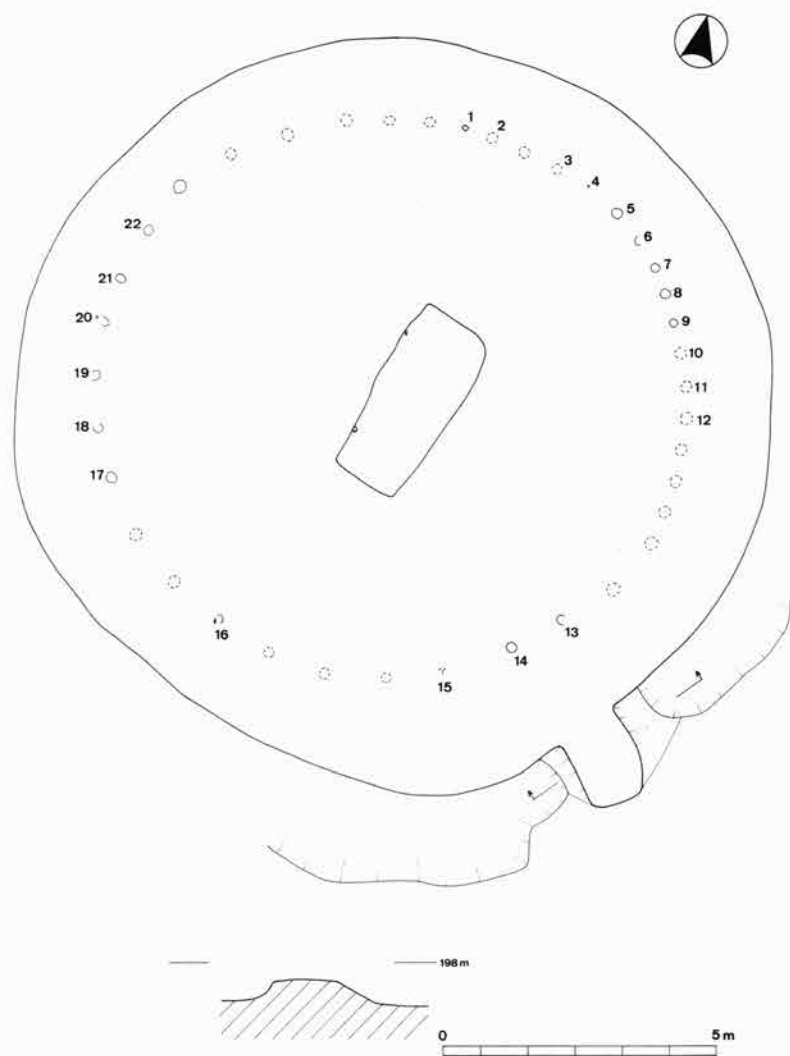
第16図 5号墳墳丘断面図

は22本が確認されたが、底部のみで、一部下から一段目のタガ部分が遺存していた。北東部は約65cm間隔で、他は1～1.2m間隔である。これをもとに推定すると、かつては35～40本(第17図では39本と推定)ほど樹立されていたことになる。埴輪片は墳丘裾の濠に埋没していたが、その中には、4号墳との間に人物埴輪(その形態的特徴から巫女形埴輪と思われる)2体(硬質)が小破片となって埋没していた。うち1体は後の復原作業によりかなり遺存状態のよいものと判明した。同じ埴輪片3片は墳頂部でも出土したので、かつてはそこに樹立されていたらしい。また、遺存状態のよい方(今回図示した分)が東側に、もう1体が西側に集中していたので、そのように並んでいたと推定できよう。

形象埴輪は上記の2体のみで、他は1～2個体の朝顔形埴輪が北側に集中し、数個体のそれが南側にあり、部分的に樹立されていたほかは、すべて普通円筒埴輪である。

なお、南側の濠埋土から有蓋高杯が出土したが、この破



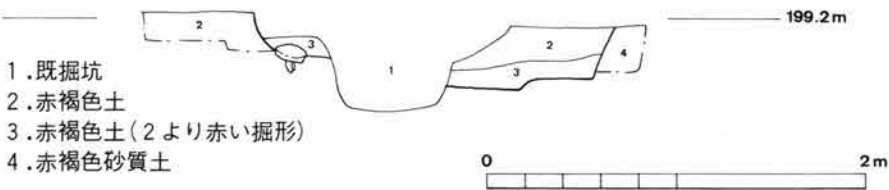
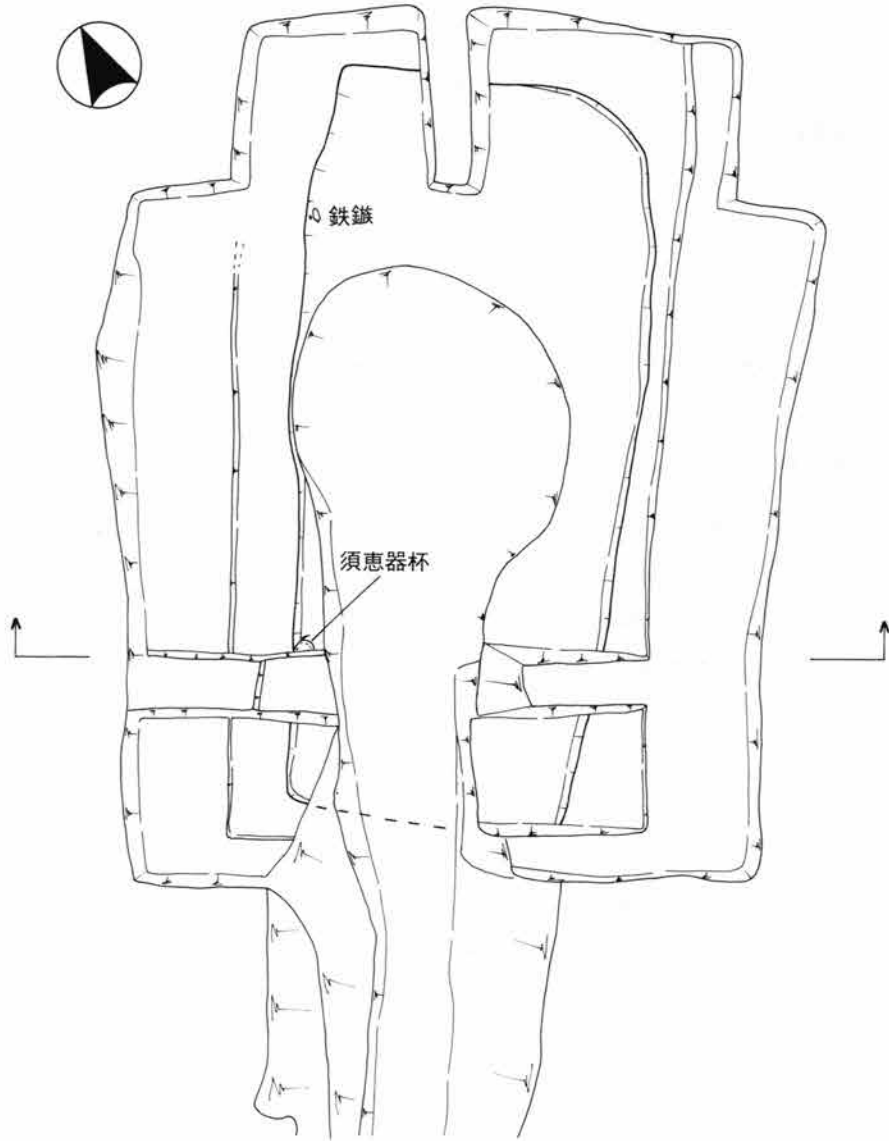


第17図 5号墳墳丘輪郭図

片は墳頂部付近にもあり、かつては主体部近辺にあったらしい。しかしながら、既掘坑が形成された時に散乱したようである。また須恵器壺1点も出土したが、これは、4号墳と5号墳の間の濠内で出土したもので、完全に5号墳のものとは言い切れない。

#### 墳丘について

個々の古墳についての説明は以上である。この項では2～5号墳の墳丘について説明したい。2～5号墳で共通するのは、尾根筋に古墳を築造している点である。墳丘は、下部が黄褐色や赤褐色の粘質土の地山で、その上に濠とその外側にあった旧表土を削平して盛土としている。5号墳の南方がほぼ平坦なのは、この地点までも削平して盛土に使用した



1. 既掘坑
2. 赤褐色土
3. 赤褐色土(2より赤い掘形)
4. 赤褐色砂質土

第18図 5号墳主体部実測図

可能性を示唆している。なお、盛土は北東部に厚く、南西部に薄い。これは丘陵の東側が小盆地として開けたか所となっており、かつて人々が通行したり、あるいは村落があったりして、その方向のみ大きく見せる工法を執っているのだろう。

#### 築造順序について

濠と墳丘との前後関係から類推すると、築造順序は5号墳→4・8号墳→3・7号墳→2・11号墳となるようである。なお、すべて木棺直葬の円墳である。主体部の主軸は南北方向がほとんどであるが、1号墳のみ東西方向である。但し、南北方向でも5号墳は大きくずれており、結局は、尾根筋の方向にあわせて主体部を設定したことがわかる。また、2・7・8号墳は主体部が2つあり、他は1墳1主体部である。

### 4. 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、有舌尖頭器、須恵器杯・杯蓋、同有蓋高杯、同壺、同甕、鉄鏃、鉄刀子、鉄製ピン様、普通円筒埴輪、朝顔形埴輪、人物埴輪、瓦器碗などである。2～5号墳に関しては古墳時代の土師器は1点もなかった。

では、図示した遺物を中心に説明したい。

#### 2号墳

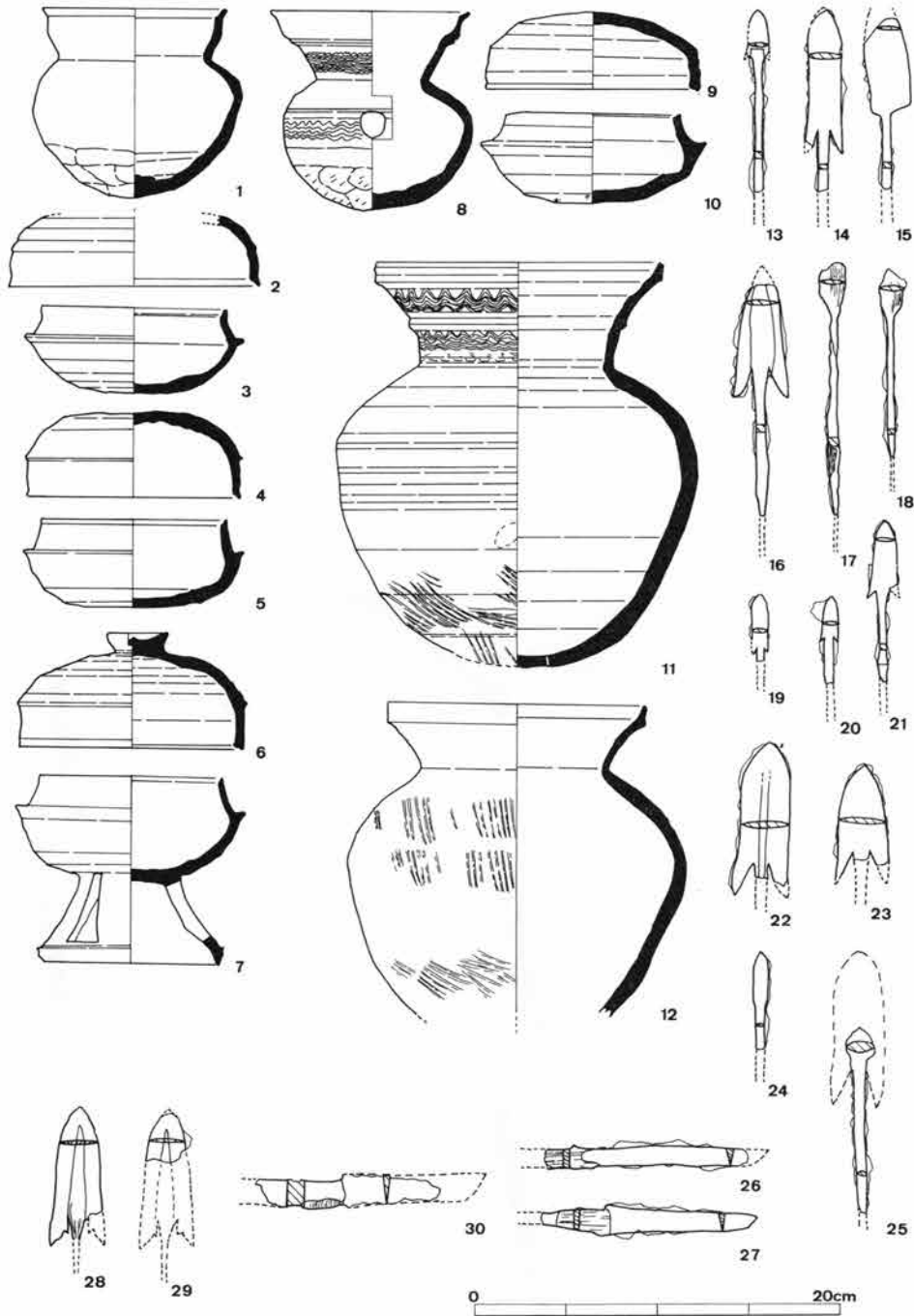
墳丘南部から須恵器甕(第19図1)と同杯蓋(2)が出土した。2は陶邑古窯址群のMT15(注4)と同時期であろう。1はやや変わった口縁部であるが、体部の波状文のない点から、同時期として大過なからう。したがって、6世紀前半と把握しておく。

鉄鏃は10数点出土した。形態は三角形(長短2種)と柳葉形である。茎部に植物質の痕跡がある。刀子も束の部分に認められる。なお、鉄製のピン様(図版第14の(2))のものが1点出土した。

#### 3号墳

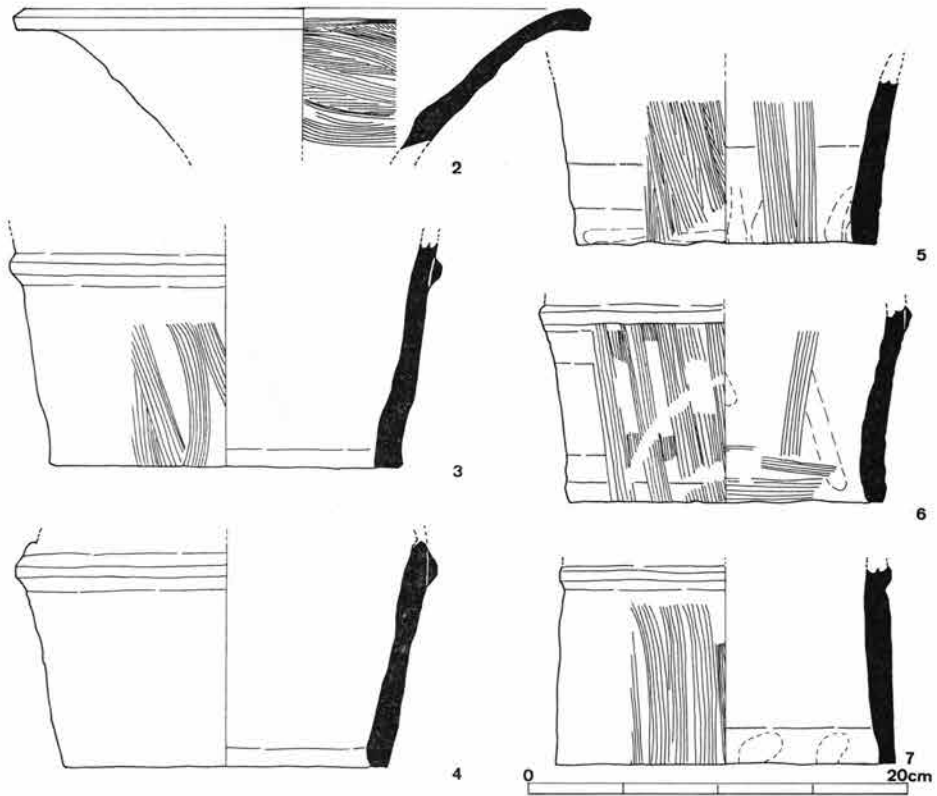
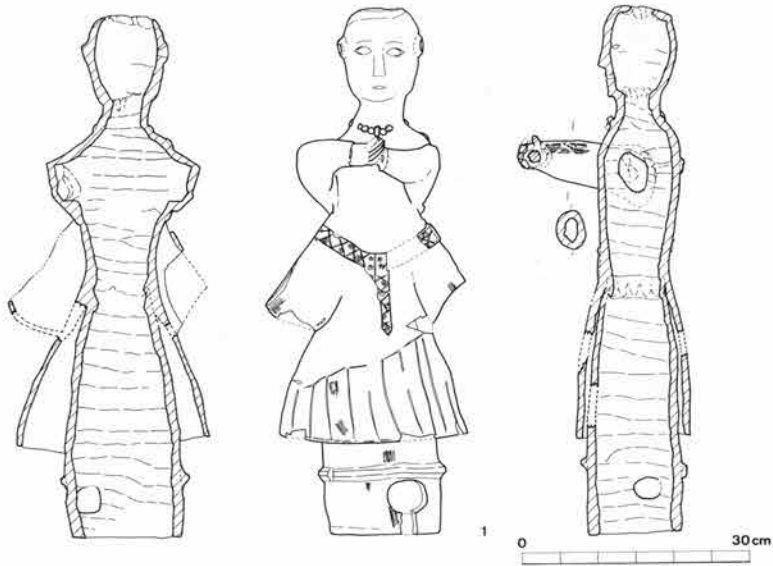
須恵器杯身(3)が出土した。やや小振りではあるが、受け部は短く、やや内傾している点から陶邑TK47よりは新しい様相である。一応6世紀前半と比定できよう。

墳丘頂部の攪乱坑から有舌尖頭器(第11図)1点出土した。基部を欠損しているので有舌尖頭器と断定はできないが、基部付近のカーブからすれば、ほぼ間違いのないであろう。残存長8.5cm・幅2.2cm・厚さ0.8cm、重さ14.5gのサヌカイト製である。表面はやや風化し灰色を呈している。全体に加工剥離は荒く、未製品(注5)の可能性もある。縄文時代草創期に属するものである。新潟県小瀬が沢出土タイプに近似し、長い尖頭器ではあるが、基部は明確に屈折せず、若干の相違がある。



第19图 出土遺物実測図(1)

2号墳：1 須恵器碗，2 須恵器杯蓋 3号墳：3 須恵器杯身 4号墳：11 須恵器壺  
 5号墳：4・9 須恵器杯蓋，5・10 須恵器杯身，6 須恵器蓋，7 須恵器高杯，8 須恵器碗  
 12 須恵器壺 2号墳：13~25 鉄鏃，26~27 刀子 5号墳：28・29 鉄鏃，30 刀子



第20図 出土遺物実測図(2)

5号墳：2 朝顔型円筒埴輪 3 円筒埴輪(8) 4 円筒埴輪(8) 5 円筒埴輪(7)  
6 円筒埴輪(8) 7 円筒埴輪(8)

## 4号墳

前述したように棺上に置かれた格好で須恵器壺1個体(第19図11)が出土した。破片となっていたが底部は約3cmの円形に穿孔されていた。口縁部に波状文を施し、体部下半はタタキ技法を施している。他は回転ナデである。色調は淡青灰色で、口径15.6cm・器高22cmである。他に墳丘外の北東部濠内から須恵器有蓋高杯蓋1点と、同杯身・杯蓋各1点ずつの破片が出土した。杯は陶邑TK47段階より大きく、MT15段階と同時期であろう。

## 5号墳

墳丘内より須恵器杯身・杯蓋が1セット出土した(完形、第19図9・10)。出土状況から棺上に置かれたものと推定できる。身の場合、体部下半をヘラケズリ(底からみれば時計回りの方向)をするが粗雑で、その後回転ナデを施したためケズリ面は鮮明ではない。口径9.6cm・器高4.8cmである。蓋は天井部を中心から外側へ時計回りにヘラケズリしているが粗雑である。2点とも作りは粗雑で回転作用に対する熟練度が低い。焼成は淡灰色で、他の須恵器が青灰色系であるのに対して特異である。なお、胎土は1mm大の白色砂(石英)と微細な黒色粒を含む。他に主体部の棺内にあったと思われるものに、鉄鏃2本(第19図28・29)と鉄刀子1本(同30)がある。前述した須恵器蓋より約10cm下で検出された。先端は北を向けていた。

須恵器有蓋高杯(第19図7)は3方に透しがあるもので、墳丘外の北西部で検出し、同蓋(同6)は墳丘外の南部で検出した。南部は主体部の既掘坑からの排土が堆積しており、かつてこれが主体部近辺にあったことを窺わせる。なお、内側には朱がはっきりと付着していた。須恵器杯身・杯蓋(第19図4・5)は墳丘外の北西部に埋没していた。シャープなヘラケズリ(時計回り)を施したものであり、この2点はあるいは陶邑古窯跡のものかもしれない。陶邑TK47段階のものである。須恵器甕(第19図8)は墳丘外の北西部で検出された。底部をヘラケズリし、体部中央と口縁部に楕円形の波状文を施している。須恵器壺(第19図12)は底部を欠損しているため意図的に穿孔していたかどうかは不明である。体部下半はタタキを施し、下1/3は鮮明に残っているが、中位以上はナデ消している。色調は青灰色を基調とするが、肩部以上の半分は紫がかり、焼成時の影響を受けている。非常にシャープな作りとなっている。

巫女形埴輪は2体出土した。今回図示した(第20図1)方の高さは71.3cmである。但し頭髪部分は検出されなかった。それを含めると74~75cm程度であっただろう。もう1体は胴や手の一部と頭部の一部が検出されたのみであった。では、今回図示した埴輪について説明しよう。頭頂は外側から粘土紐の端を押し入れており、意図的に穴の開いた状態となっている。耳や鼻は立体的に造形されており、目と口はヘラ様の鋭利なもので切り込み

を入れ、一気に開けている。首飾りは正面中央に1個勾玉を粘土塊で表現し(下部欠損)、その周りに現存11個の丸玉を表現した粘土塊を貼付している。両腕は前方にまわし、何かを差し出しているようすである。残念ながら手の部分は破損しており、左手は親指のみ、右手は指3本(親指・中指・薬指)のみ遺存していた。なお、図示できなかった方は手の部分が遺存しており、杯様を手のひらに載せていたが、当該例の場合は、親指同志を付けており、杯を載せるポーズではないことから、何か細長いものを縦方向に差し出していたようである。きぬがさでも持っていたのであろうか。

衣服については、ヘラで縦方向に刻んでひだを表現した裳(スカート)をはき、腕の部分は筒袖を表現している。その上から、左から右へ斜めに羽織った状態を表現している。これは襲(意須比・おすい)と呼ばれているものである。更にその上にはたすきを掛けている。たすきの表面には斜線をヘラで描き、斜線の間には竹管文のような円形の押印をしている。これは丸玉でも縫い込んだ状態を表現しているのであろうか。なお、前述した襲の袖口は左を綴じ込んでおり、右は開けている。足は表現せず、円筒埴輪の下段部分と同様のものを使用している。タテハケ手法を施している。一段目のタガまでに2か所の円形透し穴がある。

成形について概述すると、以下のようである。2~3cm幅の粘土紐を輪積みし、腰から上は左上がりの巻き上げで首まで作っている。それに頭部を連結させている。頭部も同様に2cm幅程度の粘土紐を輪積みしているらしいが、ていねいなナデによってその跡は消されている。スカートの部分は本体を巻いて接合させており、接合部は強度を増すためか、上半部を下半部に差し込むようにして、そこにスカートの上端を重ねている。腕も粘土紐を輪積みしたものを、つけ根で接合させているが、ほとんどが中空である。但し、手の部分だけは中実で、指一本ずつ丹念に付けている。たすきは平らな粘土紐を貼付している。なお、本体は粘土紐の状態から大きく6ブロックに分割して接合している。つまり、下から14cmぐらいまで(腕のつけ根上端辺り)、同60cmぐらいまで(首の辺り)、頭部である。そして、腕は別々に作ったものを、つけ根で接合している。腕のつけ根と腰と首の部分はユビオサエで慎重に接合しており、成形は大きく3段階と考えることも可能である。

胎土は1~2mm大の白色砂(石英か)と褐色のチャート片を含んでおり、近隣の胎土の可能性はある。色調は、下半が灰褐色で上半が淡褐色である。もう1体も同様だが色調は淡褐色である。なお、かろうじて遺存した襲は若干大きく、やや大型品か。

朝顔型埴輪は数個体分出土しているが、ここでは1個体のみ図示(第20図2)した。これは南東部の濠で検出したものである。内側にヨコハケを施したもので、口径は30.6cmである。焼成は軟で、色調は断面が暗灰色、表面が淡褐色である。

普通円筒埴輪は周濠内で多数検出されたが、ここでは原位置を保っていた内5個体を紹介する。底径は16~18cmで、第1段目タガの下端の径は17~21cmで、19cm前後が多い。外面はタテハケで、内面は縦方向のユビオサエが顕著である。焼成は軟で、色調は淡褐色である。これらの円筒埴輪は焼成は軟であるが、川西編年<sup>(注6)</sup>のV期に相当しよう。

## 5. ま と め

では、調査で判明した事実を列挙し、塩谷古墳群の歴史的位位置を確認しておきたい。調査を実施した古墳の中でもっとも古いのは5号墳で、陶邑TK47と同時期とすると、5世紀末~6世紀初頭の築造といえよう。もっとも新しい11号墳は陶邑TK10と同時期と思われることから6世紀中葉と比定できよう。わずか半世紀ほどの間に7基が連続して築造されたことになる。その直後、近接する宮の浦古墳群(横穴式石室墳)が、7世紀初めまで造営される(15基)。したがって、塩谷周辺(曾根の地)には5世紀末頃から、有力な豪族がいたことになる。この地域の首長は2基の前方後円墳の被葬者であろうが、当地から2.5kmと3.5km離れた地にある。これらは単独墳で、近隣に古墳群を擁してせず、この点からすれば前方後円墳のあった地が有力豪族の地であったということではなく、曾根を含めたいくつかの有力豪族の墓地と把えるべきであろう。

さて、塩谷古墳群形成の契機になったのは、5号墳である。これは丘陵の頂部に位置し、墳丘ももっとも大きく、埴輪を樹立している点が特徴的である。この系統は、主体部の形状等によれば、2~5・7・8号墳は強い関連性がある。1号墳は主体部の方向が相違したり、位置が若干離れているので別系統の可能性もある。また、11号墳は主体部木棺の木口に粘土塊を置いており、これも特異である。

須恵器については、5号墳の段階から地元産と思われる粗雑で白っぽいものと、陶邑そのものと思われる青灰色でシャープな作りのもとの2種ある。そして、2号墳では図示しなかったが、園部町の窯で顕著な独特の高杯<sup>(注7)</sup>(脚内側が肥厚するもの)や、粗雑なタイプが多く新しくなるに従って、地元近辺の製品を使用するようである。

埴輪については丹波町初であり、南は観音峠を越えた園部町、北は綾部、福知山までその出土例はない。普通円筒埴輪としてはもっとも小型の部類に入る。

巫女形埴輪については、京都市鳥羽遺跡の1例のみしかなく、非常に重要なものである。更に1個体は遺存状態がよく、全国的にみても数少ない良好な資料である。巫女形埴輪を含めた人物埴輪の変遷については、若松良一氏の研究がある。それによると、5世紀中葉に畿内では出現し、6世紀初め頃もっとも写実的なものが製作され、6世紀中葉頃から約半世紀にかけて関東地方で爆発的に製作され、古墳に樹立されたという。この点からいえば、



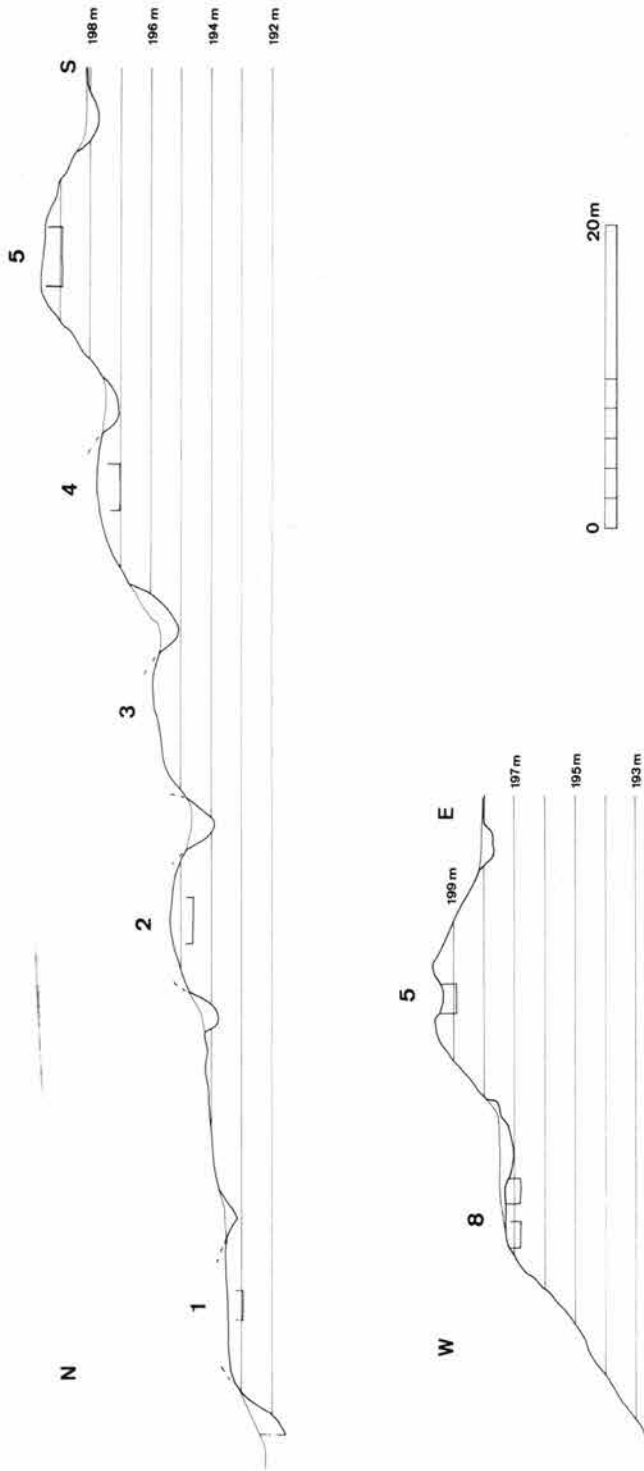
付表2 塩谷古墳群一覽表

古墳名	墳 丘		埋 葬 施 設		出 土 遺 物	備 考
	形状	規 模	掘 形 規 模	棺 の 規 模		
1号墳	円墳	径約13m 高約1m	長さ約3.4m 幅 約1.3m			京都府教育 委員会調査
2号墳	円墳	径約11m 高約1.6m	第1主体部 長さ約3.6m 幅 約1.5m	長さ約3.1m 幅 約0.7m	鉄鏃10以上、刀子2、 須恵器杯1・蓋1・ 甕1	京都府埋蔵 文化財調査 研究センタ ー調査
			第2主体部 長さ約3.7m 幅 約0.9m	長さ約3.1m 幅 約0.55m		
3号墳	円墳	径約1m 高 1m			須恵器杯2・蓋1	〃
4号墳	円墳	径約12.5m 高約2m	長さ約4.4m 幅 約1.8m	長さ約3.3m 幅 約0.8m	須恵器杯2・壺2	〃
5号墳	円墳	径約15.5m 高約2m	長さ約4.0m 幅 約1.8m		須恵器杯2・高杯1 ・蓋2・壺1・甕1、 円筒埴輪24以上、人 物埴輪2	〃
6号墳	円墳	径約15m				
7号墳	円墳	径約10m 高約1.6m	第1主体部 長さ約3.3m 幅 約1.6m	長さ約2.6m 幅 約0.8m	鉄鏃5、刀子1	京都府教育 委員会調査 (周溝内から須恵器高 杯が出土)
			第2主体部 長さ約2.9m 幅 約1.0m	長さ約2.4m 幅 約0.7m		
8号墳	円墳	径約14m 高約1.8m	第1主体部 長さ約3.5m 幅 約1.6m		須恵器杯1・蓋1、 土師器碗2	京都府教育 委員会調査
			第2主体部 長さ約4.0m 幅 約1.8m	長さ約2.5m 幅 約0.7m		
9号墳	円墳	径約9.5m				
10号墳	円墳	径約9.0m				
11号墳	円墳	径約8m 高約1m	長さ約3.2m 幅 約1.5m	長さ約2.8m 幅 約0.7m	須恵器杯1・蓋・鉄 刀1	京都府教育 委員会調査
12号墳	円墳	径約8m				

もっとも写実的な段階のものなので、当時の服装を知る上で貴重な資料になった。また、なぜ5号墳だけに樹立したのか、大いなる疑問点が出現したともいえ、丹波の古墳文化研究に一石を投じることになった。

かつて、この地が有力であったことは『延喜式』式内社があったことで類推できるが、それが5～6世紀までたどれる可能性がでてきた。第2項で指摘したように、8世紀前半に「秦人」がいたことは、秦人が6世紀以前に日本に来た渡来人で、在地の豪族の下で新

塩谷古墳群



第21図 塩谷古墳群の丘陵断面図(水平:垂直=1:2)

技術を行使したとの説に従えば、塩谷古墳群の歴史的位罫が見えてくるかもしれない。

塩谷5号墳の被葬者がヤマト政權と何らかのつながりを持っていたことは、畿内で発生した人物埴輪を有していることで類推できるが、前方後円墳との関連や主体部構造など、考察すべき点は多々ある。しかし、軽々に結論を急ぐべきではない。

いずれにしても、今回の調査が丹波町の古代を探る重要な節目であったことは疑いなく、その基礎データを呈示するに止めたい。

(伊野 近富)

注1 協力者等

長田康平・大西智也・入船弘幸・岡本竜之・水口清文・村上誠記・荻野富紗子・松下道子・柏尾依子・堀米真吾・堀 智行・森 直樹・吉田 桂・岡本美和子・村上典子・藤川こちよ・吉田静一・岩崎 薫・上田豊子・石橋一男・林 至・田尻一夫・上田忠夫・大槻 茂・船越良夫・北村すみえ・浅井義久・石橋治男・中野 要・山下喜美子・田尻保子・田畑光雄・栃木道代・和田里香・村川 恵

注2 浅井義久氏から教示をいただいた。

注3 『何鹿神社御由緒記』何鹿神社総代会編

注4 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966

注5 尖頭器については黒坪一樹氏・田代弘両氏の所見を参考にした。

注6 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2・4) 1977・1978

注7 山田邦和「丹波の須恵器生産覚書」(同志社大学考古学シリーズⅢ『考古学と地域文化』) 1987

注8 若松良一「人物埴輪編年試論」(『討論 群馬・埼玉の埴輪』あさを社) 1987

補注 調査終了後の協議により、古墳群は保存されることになり、来年度の調査はとりやめとなった。

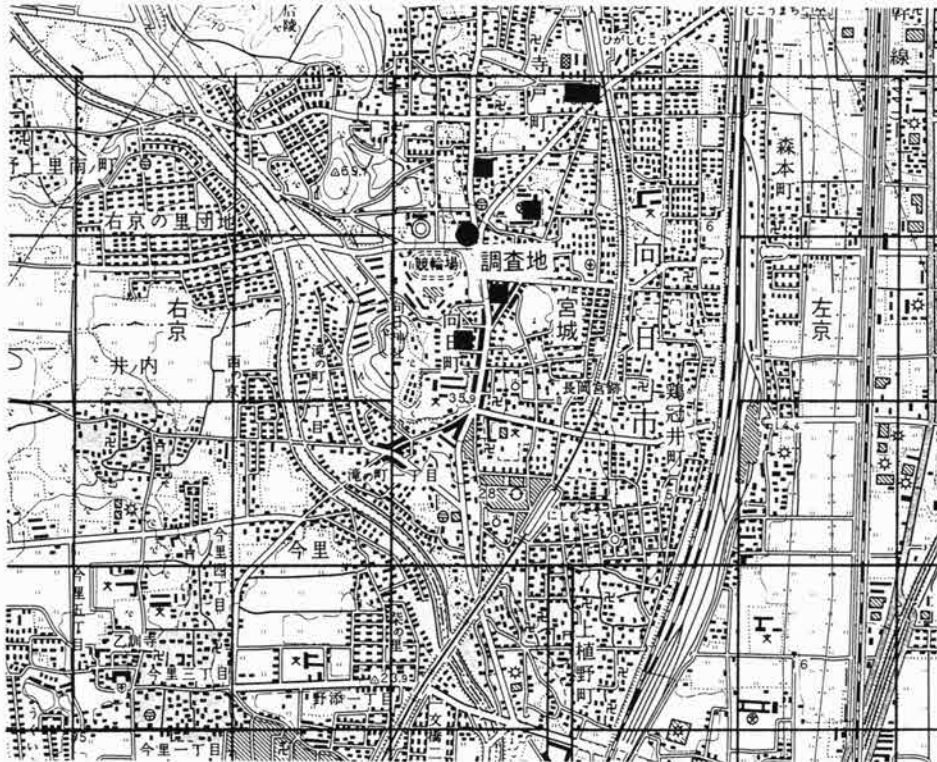
### 3. 長岡宮跡第228次発掘調査概要

(7AN17C地区)

#### 1. はじめに

この調査は、府道椋原高槻線と府道柚原向日線の交差点に接した、向日市寺戸町西野辺1-10・11に所在する旧向日町警察署跡地の一部の、拡幅工事に係るものである。

調査対象地は、推定長岡宮官衙割付によれば北辺官衙と朝堂院北官衙の境界線にあたり、平安宮では大蔵省・凶書寮に相当する地点である。地形的には向日丘陵の東端に位置し、東方の段丘面とは約2mの比高差が認められる。京都市発行の3,000分の1地形図では32mの等高線が北西から南東方向にはしる。そして、現在は標高32m前後の平坦地となっている。このため、後世の削平を受けたと推測されるが、削平のおよんでいない部分での



■ 長岡宮北方官衙・朝堂院北方官衙の礎石建物

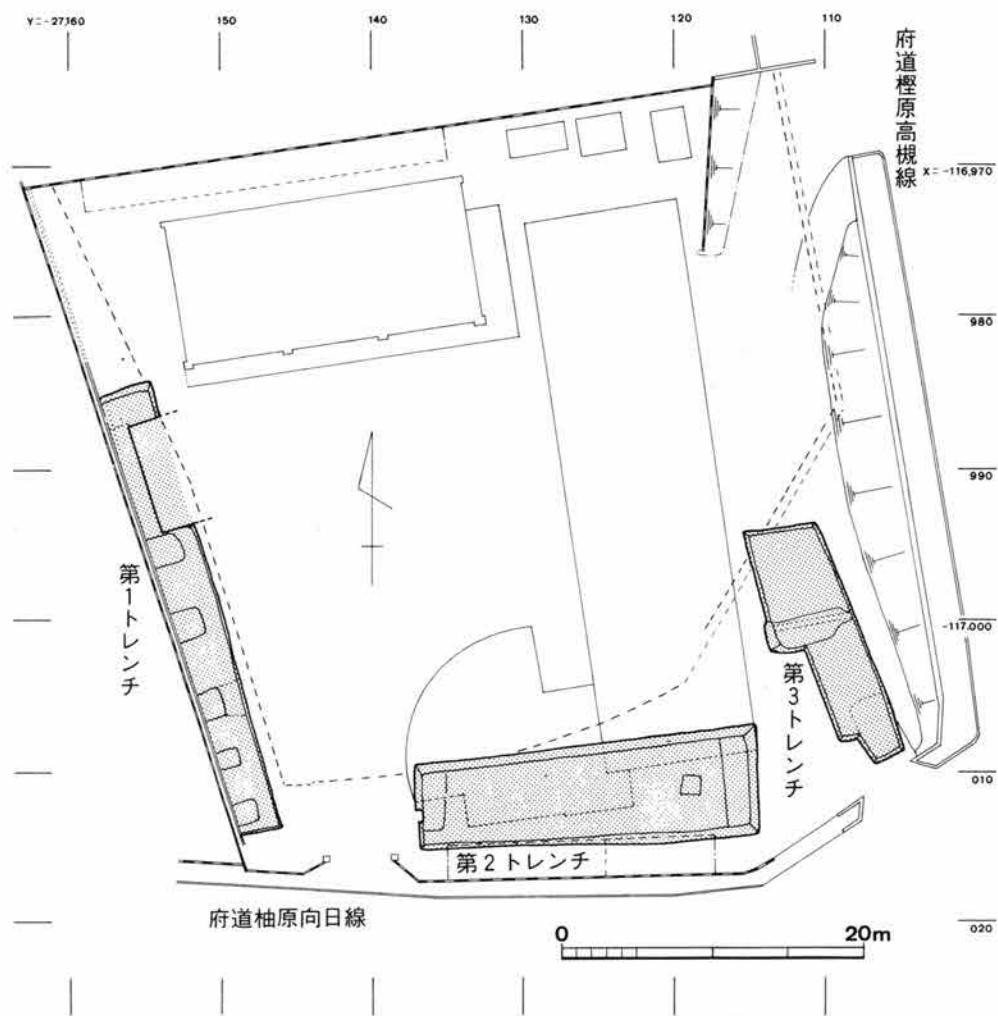
第22図 調査地位置図 (1/25,000)

遺構、遺物の有無を確認することを目標に発掘調査を実施した。

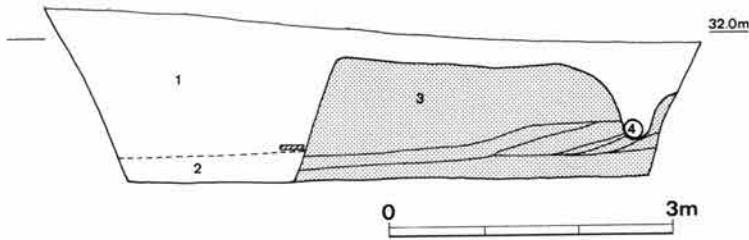
現地調査は乙訓土木事務所の依頼を受けて平成元年7月3日に開始し7月27日に終了した。調査面積は約270m<sup>2</sup>である。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人、同調査員石尾政信が担当した。

調査にあたって、京都府警察本部、向日町警察署、向日市教育委員会、(財)向日市埋蔵文化財センターの御協力を得た。また、現地調査、図面整理には学生諸氏の参加・協力があった。記して謝意を表する。

なお、調査に係る経費は全額京都府乙訓土木事務所が負担した。



第23図 調査地平面図



第24図 第2トレンチ東壁断面図

① 攪乱・盛土層 ② 建物基礎の石敷き ③ 砂礫層 ④ 排水管

## 2. 調査概要

調査地は、標高約32mの平坦地であるが、西から東へとわずかに傾斜しており、西端では丘陵の削平に伴う2～3mの段差がある。西端の段差がある位置に、NTT社宅に通じる進入路が予定されていることから、この地点に長さ約30mの第1トレンチを設定した。そして、府道柚原向日線に平行した第2トレンチ、府道極原高槻線(物集女街道)に平行して削平の最も少ないとおもわれる地点に第3トレンチを設定した。

各トレンチを重機掘削後に、人力により掘り下げ・精査を行ったが、旧向日町警察署に関係する建物基礎と排水施設、および攪乱が認められるほかは、表土直下が砂礫層(部分的に砂層・粘土層が帯状に含まれる)となる。砂礫層は丘陵を形成する大阪層群と推定される。

## 3. まとめ

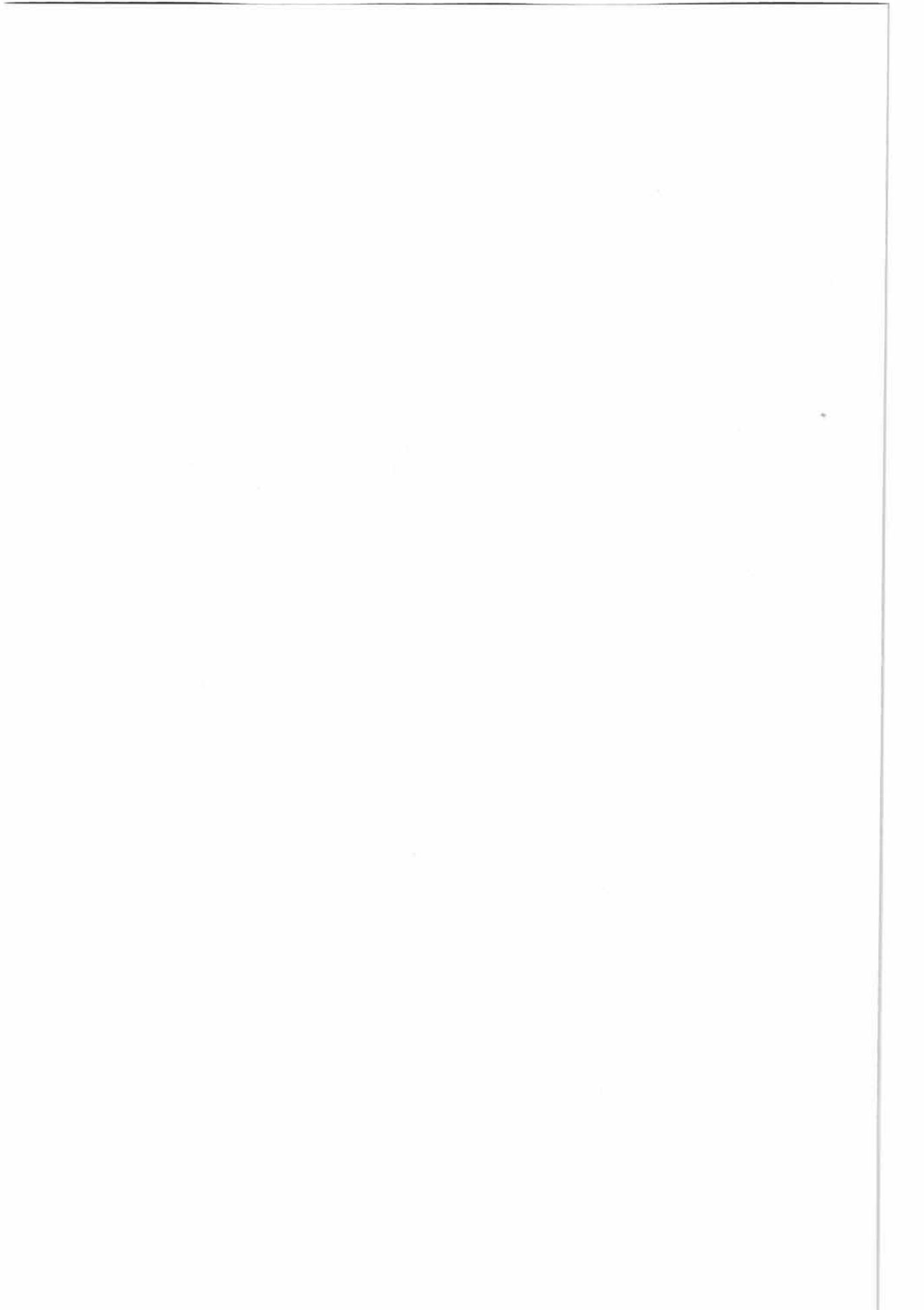
調査地周辺では、北北東約200mの長岡宮跡第137次調査<sup>(注3)</sup>(7AN12E)で大蔵と推定される礎石建物をはじめとする礎石建物跡が検出されているが、今回の調査では上記のとおり、顕著な遺構・遺物はみられなかった。後世の削平により、長岡京期の遺構等はすべて削りとられていることが判明した。(石尾 政信)

注1 『向日市埋蔵文化財調査報告書』第9集 1983

注2 藤川智子・岩佐聖子・川相依子

注3 宮原晋一「長岡宮跡第137次(7AN12E地区)～北辺官衙(南部)一推定大蔵～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財報告書』第11集 向日市教育委員会) 1984

宮原晋一・山中章「同上」(『向日市埋蔵文化財報告書』第17集 向日市教育委員会) 1985



## 4. 長岡京跡左京第222次発掘調査概要

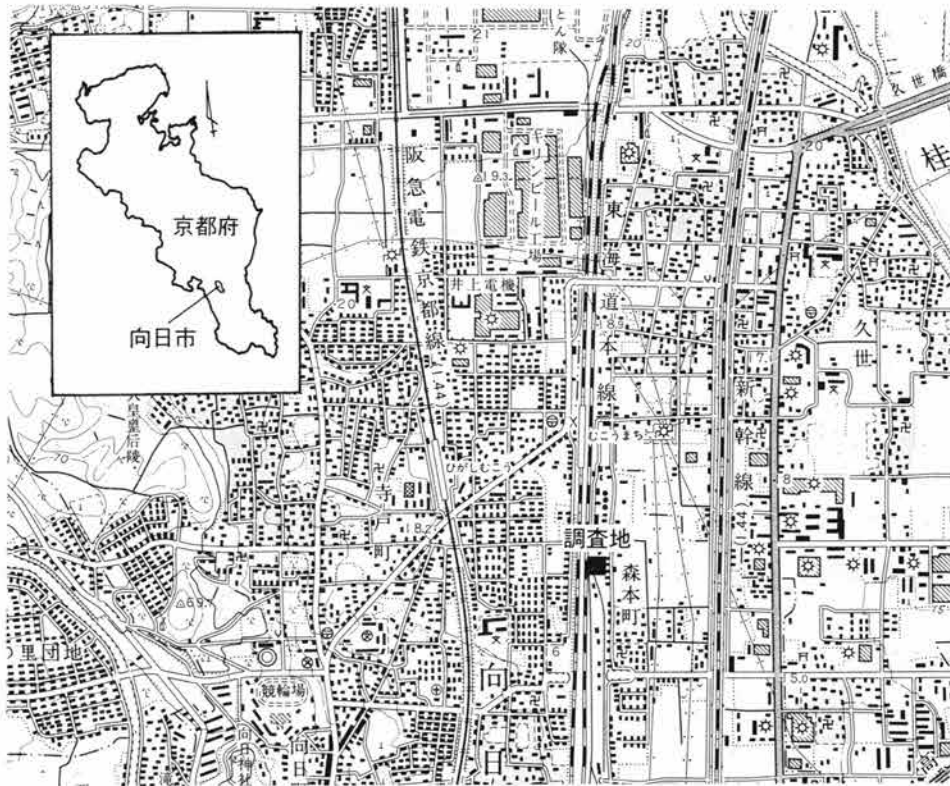
(7ANDKD-3地区)

### 1. はじめに

今回の発掘調査は、向日町信号通信区事務所建築工事に伴い、日本国有鉄道清算事業団近畿支社の依頼を受けて実施したものである。

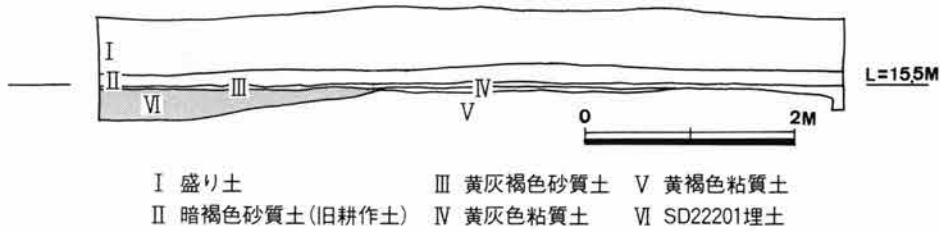
調査対象地は、京都府向日市森本町上町田にあり、長岡京の条坊復原によれば左京一条二坊三町の推定地にあたる。周辺地域では、過去<sup>(注1)</sup>2回の発掘調査が行われており、東二坊第一小路東側溝及び一条第二小路北側溝が検出された。このため、今回の発掘調査においても、条坊に関係する溝や建物跡が検出されることが期待された。

現地調査は、平成元年6月12日に開始し、平成元年8月11日に終了した。調査面積は、255m<sup>2</sup>である。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人、同調査員



第25図 調査地位置図(1/25,000)





第26図 トレンチ東壁拡張区セクション図

石尾政信，中川和哉が担当した。

調査にあたって，日本国有鉄道清算事業団近畿支社，JR西日本向日町保線支区，向日市教育委員会，財団法人向日市埋蔵文化財センターの御協力を得た。また，現地調査，図面・遺物整理には学生諸氏の参加・協力があつた。<sup>(注2)</sup>記して謝意を表する。

## 2. 調査概要

調査対象地は，標高16m前後の平坦地で，調査前までは，JR西日本向日町保線区の資材置場として利用されていた。

調査は，南北に長いトレンチを設定して，重機によって盛土と旧耕作土を除去した後，下層を人力で掘削した。

調査地の基本層序は，現地表面下50cmまでが盛土(I層)，10cmが旧耕作土(II層)である。これを剥ぐと，黄灰褐色砂質土(III層)が堆積している。その下には，トレンチにところどころ黄灰色粘質土(IV層)が薄く堆積している。次に，黄褐色粘質土(V層)が堆積している。IV層が，中世以降の遺構検出面，V層が長岡京期の遺構検出面である。

調査にあたっては，第VI座標系に属する国土座標を現地に運び，これを基点として測量等を行った。

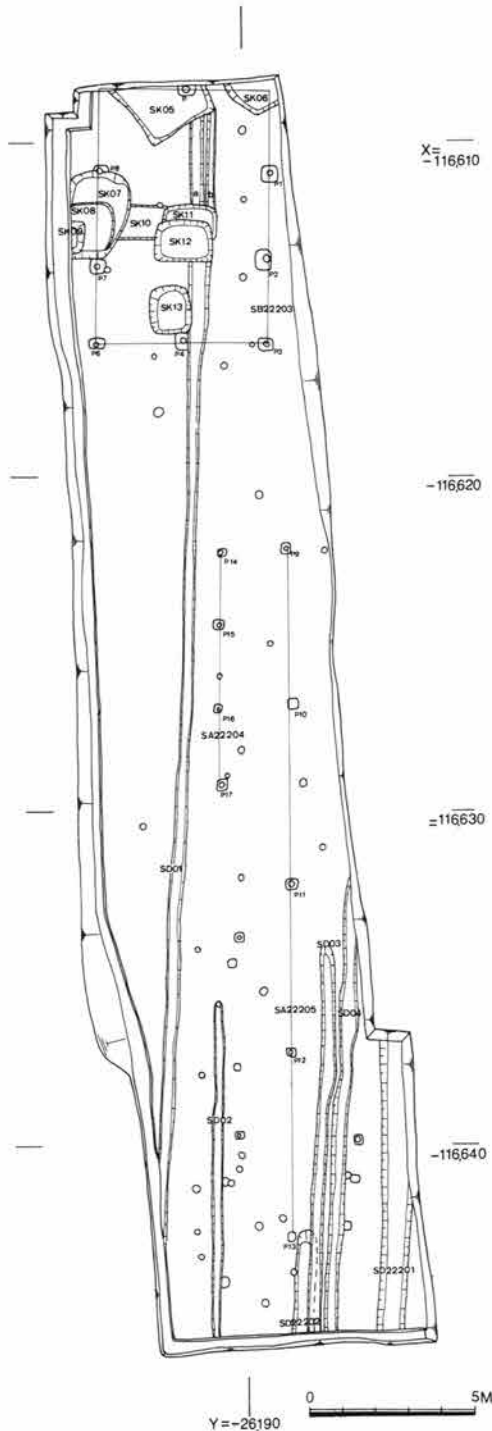
## 3. 検出遺構

本調査地では大きく分けて3つの時期がある。以下，古い時期から順に報告する。

### (1) 長岡京期の遺構

長岡京期の遺構には，溝2条，建物跡1棟，柵列2条がある。

**溝SD22201** トレンチ南東突出部で検出した南北溝である。溝幅は0.8~0.9m・深さは0.35m前後を測り，長さ約9m分を検出した。断面形は逆台形を呈し，青灰色粘質土が埋土となる。長岡京左京東二坊第一小路西測溝と考えられる。溝心の国土座標は，X=-116,644.000で，Y=-26,185.600である。出土遺物には，土師器・須恵器のほか，製塩



第27図 調査トレンチ平面図

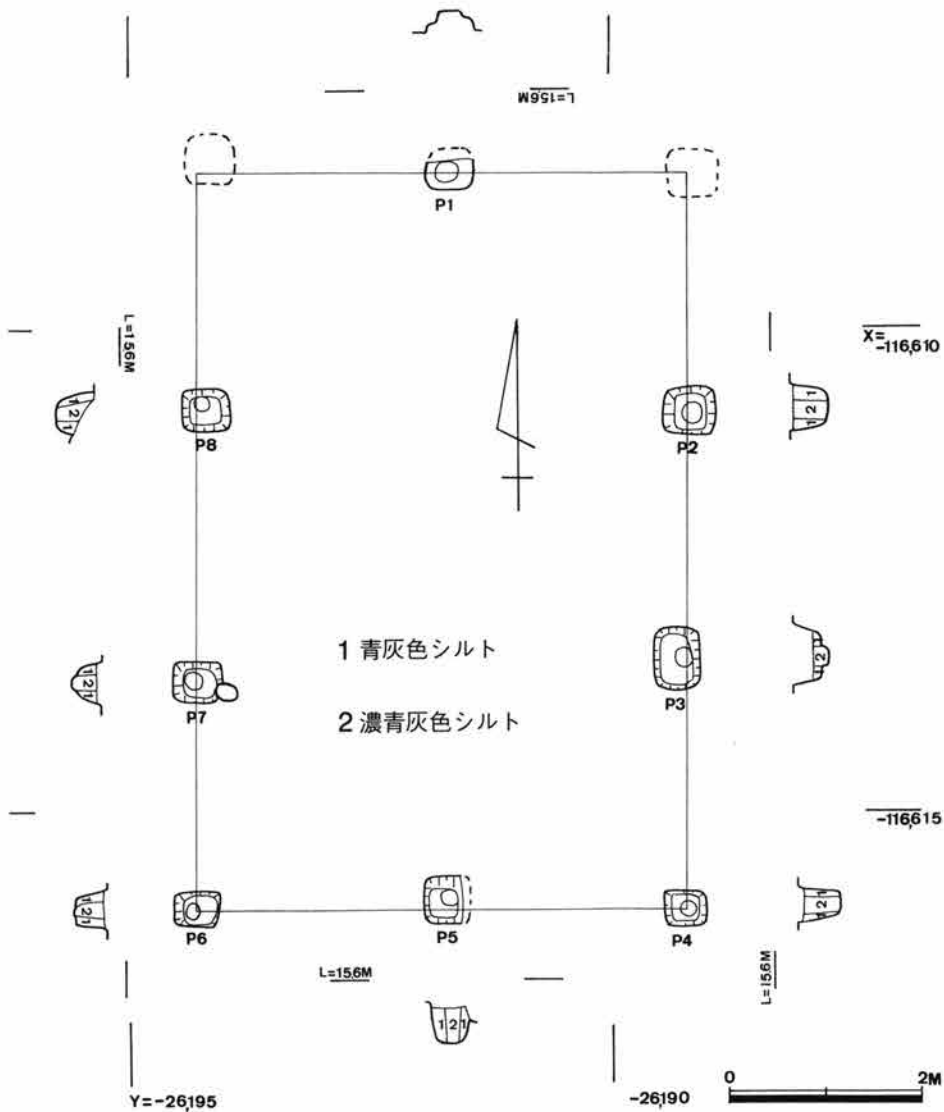
土器，銅銭，土馬，馬歯，植物の種子などがある。

**溝SD22202** SD22201に平行する南北溝で，トレンチ内で終わっている。長さ約3.5m分を検出した。幅0.55～0.65m・深さ約0.4mを測る。断面形は逆台形を呈し，青灰色粘質土が埋土となる。溝心の国土座標は， $X = -116,645.000$ ， $Y = -26,188.300$ である。出土遺物には土師器，須恵器などがある。

**掘立柱建物跡SB22203**(第28図) トレンチ北部で検出した8基の隅丸方形掘形(P1～P8)で構成される東西2間×南北3間の南北棟の掘立柱建物跡である。柱間は不揃いで，東西2.6m・南北2.6～2.8mを測る。柱穴は円形を呈し，直径0.2m前後を測る。北側角柱は近世土坑のため検出できなかった。

**柵列SA22204** 南北方向の柵列で，3間分が検出できた。柱間は5.5～6.5mを測る。柱掘形は隅丸方形を呈し，一辺0.35m前後・深さ0.25～0.55mで，断面形は逆台形を呈する。P15からは，漆が内外面に付着した須恵器碗，木片，漆膜が出土した。P16には柱根が残存していた。出土遺物として，須恵器の杯蓋がある。

**柵列SA22205** 南北方向の柱列で，柱間は，4.9～5.6mを測る。柱掘形は隅丸方形を呈し，一辺0.26～0.36m・深さ0.26～0.28mで，断面形は逆台形を呈するが，柱穴部分は若干深くなる。



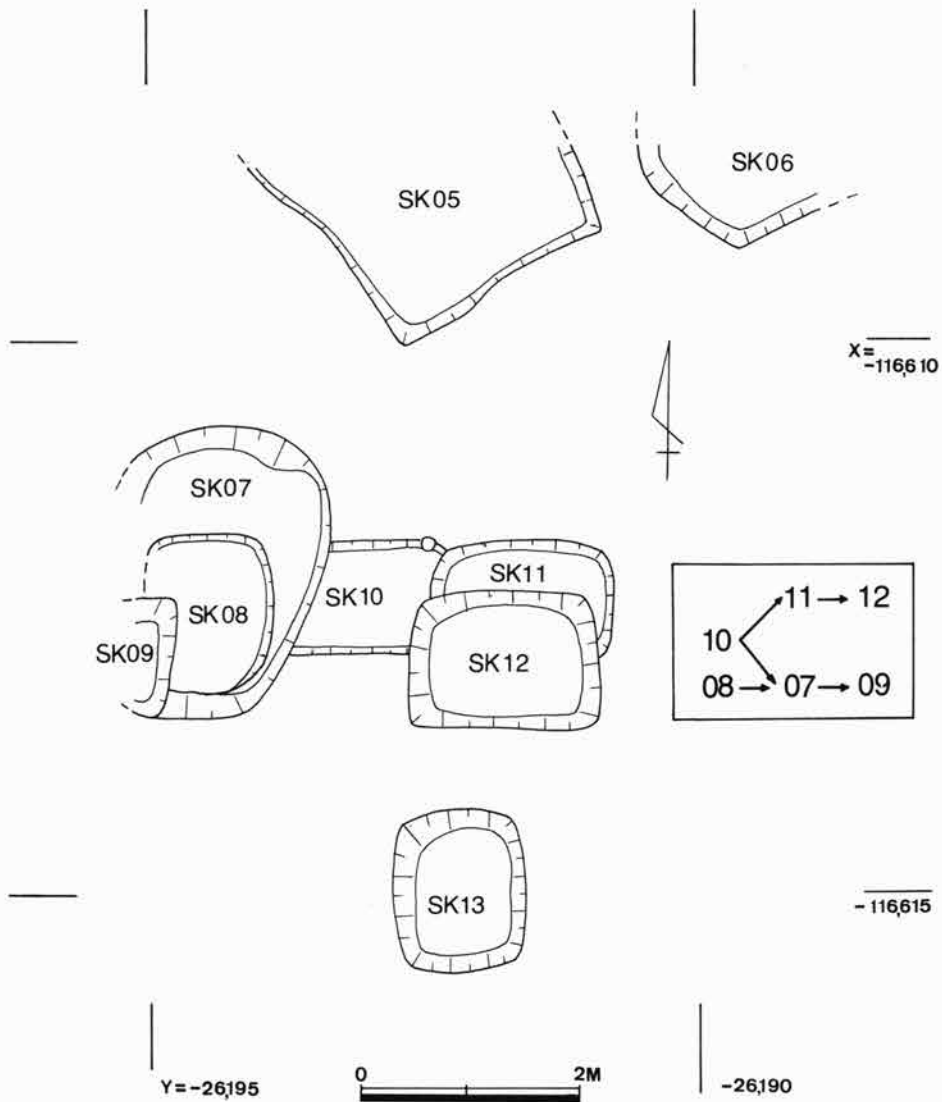
第28図 SB22203 平面図

このほかに、この時期に属すると考えられる、隅丸方形の掘形や円形の掘形を持つ柱穴がトレンチ南方に多く存在するが、構造物は明らかにできなかった。

(2) 中世の遺構

中世の遺構には、4条の平行する素掘り溝がある。N3°E前後と北で東にわずかに振れている。

**溝SD01** トレンチ中央を南北に走る素掘り溝である。北部で2本に分かれるが、両者の関係は、近世土坑のため不明である。幅0.4~0.6m・深さ0.1~0.25mを測る。出土遺



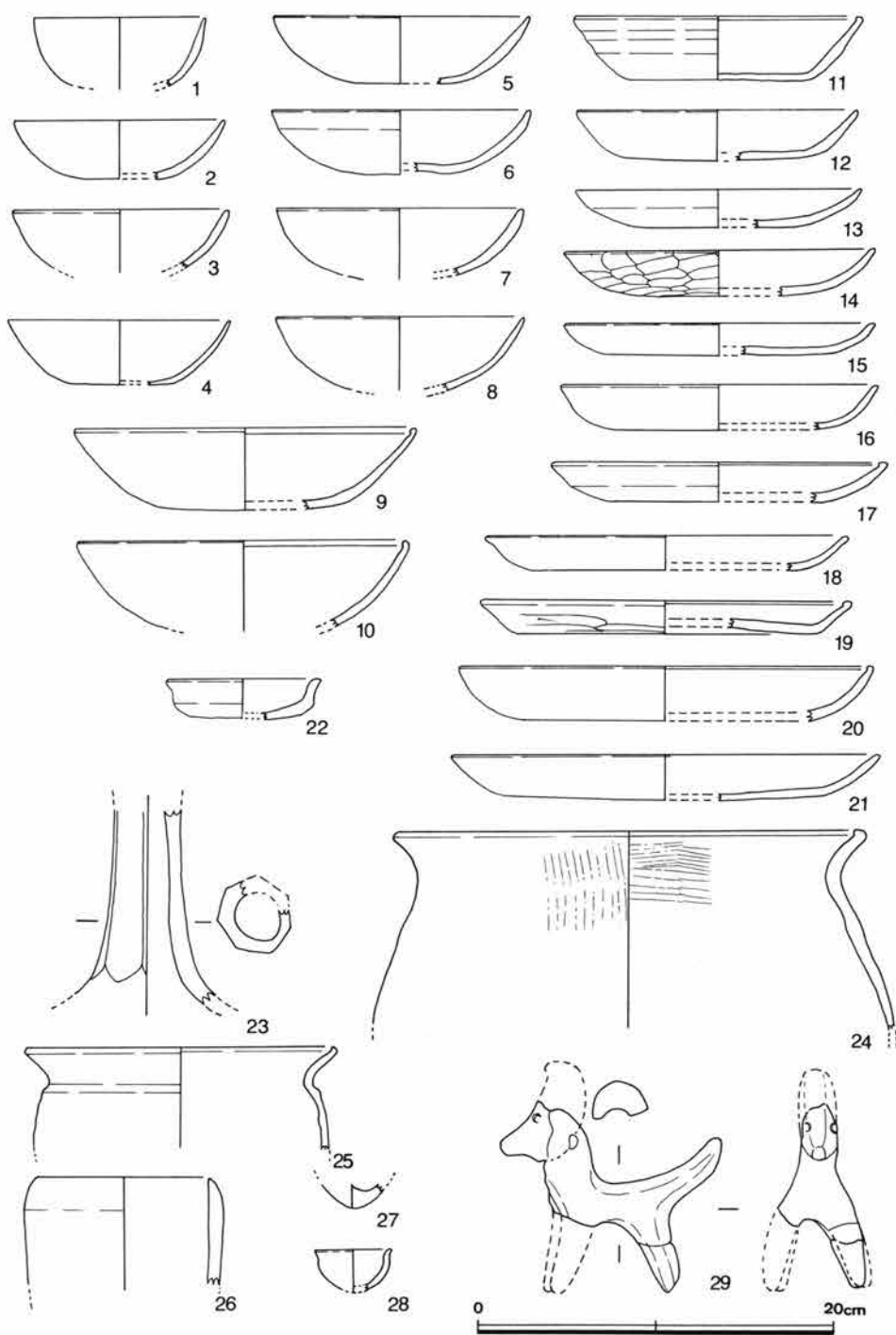
第29図 近世土坑群平面実測図

物には、瓦器碗がある。

**溝SD02** トレンチ内で終る南北に走る素掘り溝である。幅0.4m前後・深さ0.1mを測る。

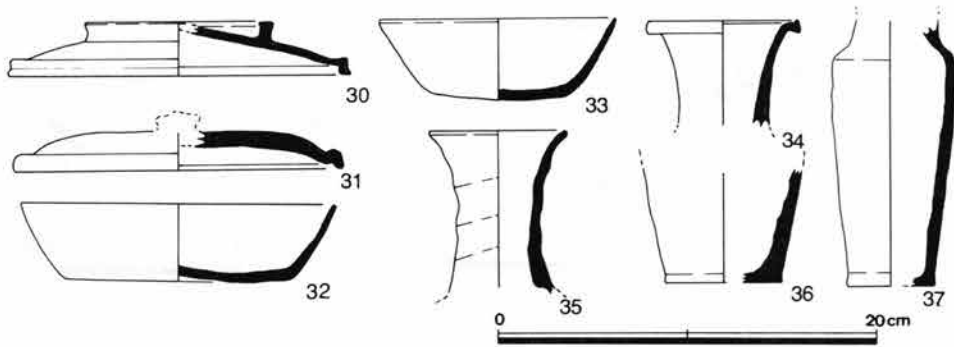
**溝SD03** トレンチ内で終る素掘り溝である。幅0.35m前後・深さ0.1m前後を測る。SD22202を切っている。

**溝SD04** 南北に走る素掘り溝である。幅0.4m前後・深さ0.15~0.20mを測る。



第30図 SD22201 出土遺物実測図

1～8：土師器碗 9～11：土師器杯 12～22：土師器皿 23：土師器高杯  
 24～25：土師器甕 26・27：製塩土器 28：手づくね 29：土馬



第31図 遺構出土須恵器  
30・31：杯蓋 32・33：杯A 34：壺L 35～37：壺G

### (3) 近世の遺構(第29図)

近世の遺構としては、大小9基の土坑群がある。方向性を持たない大形の土坑(SK05～07)と、方向性を持ち、隅丸方形の規模に統一性が見られる小形の土坑(SK08～13)に分けられる。土坑の切り合い関係は、図中に示した。<sup>(注3)</sup>

**SK05** トレンチ北東隅の浅い大形の土坑。北側は、トレンチ外にのびている。深さ約0.15m、底部は平坦である。SB22203の柱穴の1つを完全に破壊していると考えられる。出土遺物はない。

**SK06** トレンチ北西部の大形土坑。北側はトレンチ外にのびる。土坑内には、円礫が多く含まれている。深さ約0.2m。出土遺物には、磨滅の認められる須恵器・瓦がある。

**SK07** 西部がトレンチ外へのびる大形の土坑である。深さ約0.25m。出土遺物としては、土師器、備前焼の播鉢の体部片がある。

**SK08** SK07の底面で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、一辺東西1m・南北1.5m・深さ0.05mを測る。出土遺物はない。

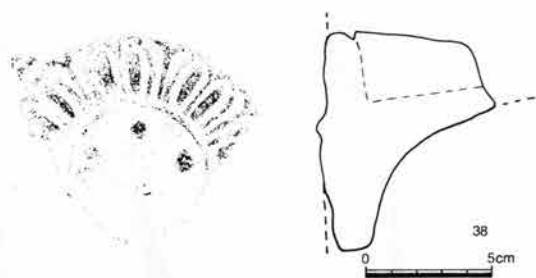
**SK09** 西部がトレンチ外へのびる南北1.1m・深さ0.2mを測る土坑である。出土遺物はない。

**SK10** 南北1m・深さ0.1mの土坑。備前焼の播鉢の口縁部破片、青磁碗小片が出土した。

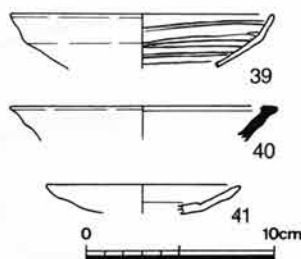
**SK11** 東西1.5m・南北1m・深さ0.25mを測る隅丸方形の土坑。出土遺物には、瀬戸焼の皿がある。

**SK12** 東西1.7m・南北1.2m・深さ0.5m前後の隅丸方形の土坑の出土遺物には、土師皿、青磁片がある。

**SK13** 東西1.2m・南北1.5m・深さ0.45m前後の隅丸方形の土坑。出土遺物はない。



第32図 SD22201出土軒丸瓦実測図(平城6235J)



第33図 中・近世土器実測図

#### 4. 出土遺物

出土遺物は、遺物整理箱で約5箱出土した。紙面の都合上、全部は図化し得なかった。以下、古い時代順に、図化し得たものを中心に、遺構毎に報告する。なお、包含層の遺物は割愛した。

##### (1) 長岡京期<sup>(註4)</sup>

##### A. 溝SD22201出土遺物

溝内の遺物は、検出できた部分の中央付近で多く出土した。断面観察の結果、2層に埋土が分かれたため、上層・下層の2層に分け遺物の取り上げを行ったものの、2層間には、接合関係が多く認められたので、一括して資料の操作を行った。

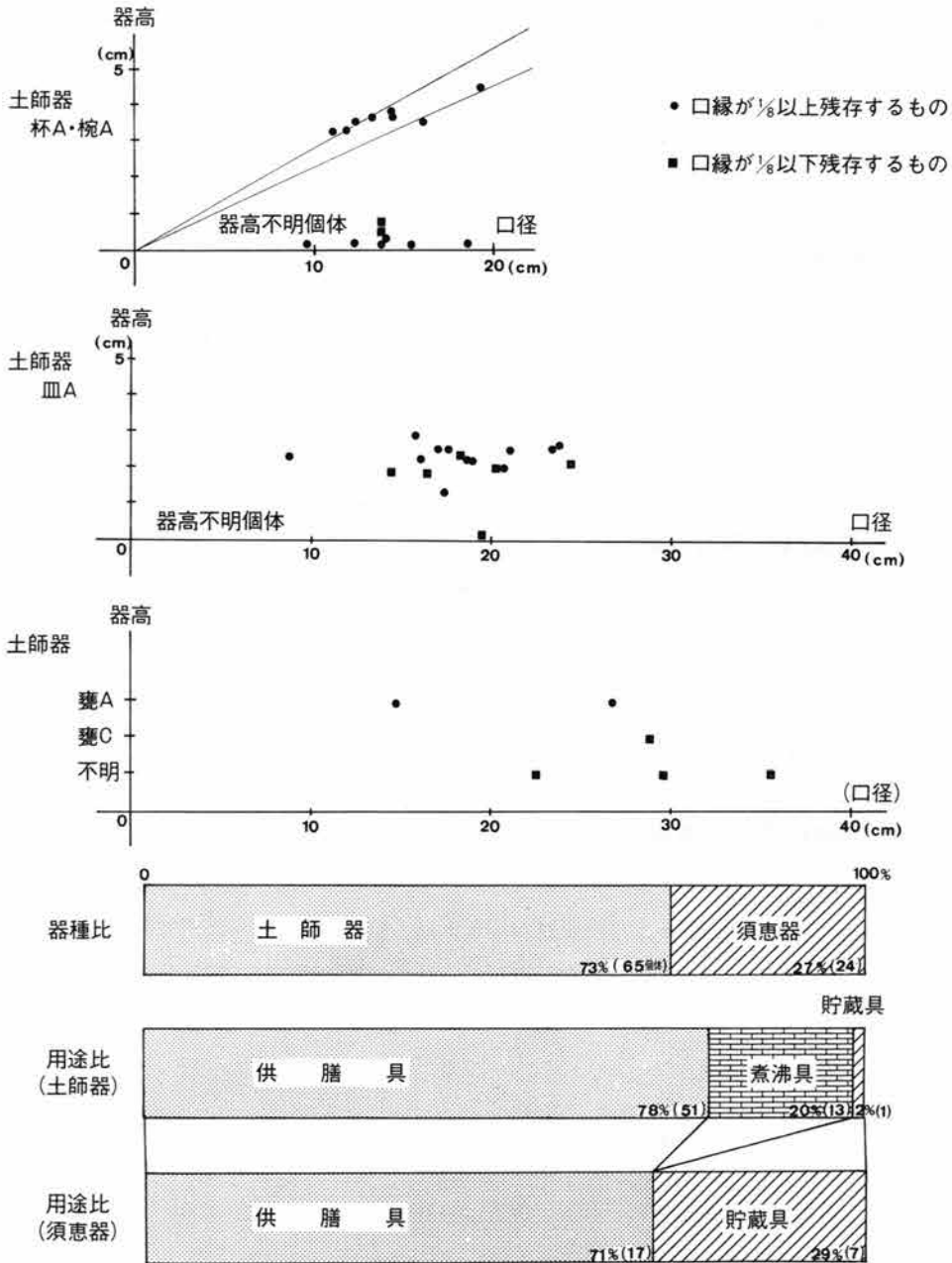
土器は土師器65点、須恵器24点、製塩土器が少なくとも2個体以上出土した。器種別の個体数は、土師器は杯A 2点、皿A 29点、碗A 21点、高杯1点、壺F 1点、甕A 12点、甕B 1点、小片のため杯と碗の区別のつかないものが5点ある。須恵器は、杯A 2点、杯B 5点、杯のA、Bの不明な個体7点、蓋A 2点、蓋B 1点、壺G 2点、壺N 1点、壺L 1点、鉢D 1点、甕2点がある。須恵器は小片が多く図化できるものが少なかった。この他銅銭(文字の判読不可能)1点、ミニチュア土器1点、馬歯1本、土馬3個体、瓦が少量出土した。

##### a. 土師器

杯A(9~11) いずれも口縁部を内側に折り曲げている。10は底部が残存していないため器種の個体数の中では数えなかったが、口径の大きさから杯Aと考えられる。11は、完形で総計2個体である。

皿A(12~21) 口縁部を丸くおさめるもの、内側に折りまげるものがある。口径は15~24cm、器高2~3cmのものが多い。口径よりも器高に整一性が認められる。

皿C(22) 口縁部及び内面をナデ、底部は未調整で凹凸が残り、端部はやや外反ぎみに終る。



第34図 SD22201 出土土器計測図

椀A(1~8) 口径10~15cm・器高3~4cmのものが多い。口縁の端部は丸く終る。  
 高杯A(23) 脚部だけの出土で、外面は、鋭利な刀子状のもので7面に面取りされる。  
 甕A(24・25) 24の外面には、ススの付着が認められる。甕の口縁端の形態は、さまざまである。



## b. 須恵器

須恵器は細片のため、図化できるものが少なかった。

蓋A(31) 全体に肉厚で、中央部には、宝珠つまみの取れた痕跡が認められる。

壺L(34) 頸部のみが完存している。

壺(35・36) 35は頸部のみ完存している。36は底部の反転復原図である。

## c. その他の出土遺物

製塩土器(26・27) 26は作りが雑で、比較的大きな砂粒を含む。図化した以外に、内面に布の圧痕が認められるものがある。

ミニチュア土器(28) 土師質で、全体の1/2が残存している。

土馬(29) 図化したもの以外に、胴部が2点、脚部3点、頭部1点が出土した。

軒丸瓦(38) 全体に磨滅が見られ、外区は、欠損している。平城6235Jに分類できる。

## B. 柵列SA22204出土遺物

### 須恵器

蓋(30) 環状のつまみを持つ蓋で、蓋上面が硯に転用されている。P16の掘形内より出土した。

杯A(33) やや器高の高い杯で、内面に漆が付着している。外面には、漆によって指紋が残されている。漆の容器と考えられる。P15から出土している。

## C. 溝SD22202出土遺物

出土遺物には、土師器7点、須恵器3点がある。器種別の個体数は、土師器が杯A1点、碗A2点、高杯1点、甕3点、須恵器が杯A1点、壺L1点、壺G1点である。

壺G(37) 頸部及び底部の一部が欠損している。底部外面には、糸切痕跡があり体部はロクロ引き目の凹凸が目立つ。

### (2) 中世の出土遺物

溝SD01～04 すべてから瓦器が少量ずつ出土した。図化できるものは39のみである。39は、SD01aから出土した。口縁部は横ナデによって外反する。口縁端部はそのまま丸くおさまる。内面にミガキが認められる。焼成は良好で硬く、漆黒色である。和泉型の瓦器碗(注5)で、13世紀頃のものと考えられる。

### (3) 近世の出土遺物

瀬戸焼皿(40) 口縁部は外反し、内側に肥厚している。外面には釉がかかっている。SK07から出土。

土師皿(41) (注6) 底部内面に凹線がめぐる。17～18世紀頃のものと考えられる。

## 5. ま と め

以下、主要な調査成果を長岡京期を主に述べる。

(1) 一条第二小路が大路幅を持っているならば、<sup>(注7)</sup>トレンチ内で南側溝が検出できるはずであるが検出できなかったことと、調査区の北側で長岡京期の建物が検出できたことから、これまでの調査と考え合わせると、推定一条第二小路の道幅が小路の幅であることが想定できる。

(2) これまでの近接する調査で検出されている東二坊第一小路東側溝と今回検出した西側溝の溝の中心間距離は約9.7mである。

(3) 漆を用いるような作業が行われていた可能性がある。

(4) 当調査区内で検出したSD22201内の土器組成は、土師器が73%、須恵器が27%と土師器が多く、土師器・須恵器ともに供膳具が70%をこえている。

(5) SD22201内において、土馬、ミニチュア土器、馬の歯、銅銭が出土しており、何らかの祭祀行為が行われたと想定できる。

(中川 和哉)

注1 向日市教育委員会が行った長岡京跡左京第41次、(財)向日市埋蔵文化財センターの行った長岡京跡左京第220次のいずれも未報告のため、(財)向日市埋蔵文化財センター 松崎俊郎氏に多くの御教示を得た。

注2 広瀬時習・辻川哲郎・三好ひとみ・小村美香・小楠彰子・塚本映子・田中あゆみ・東 裕子・岩佐聖子・川相依子・坂本英美・富田富士江。

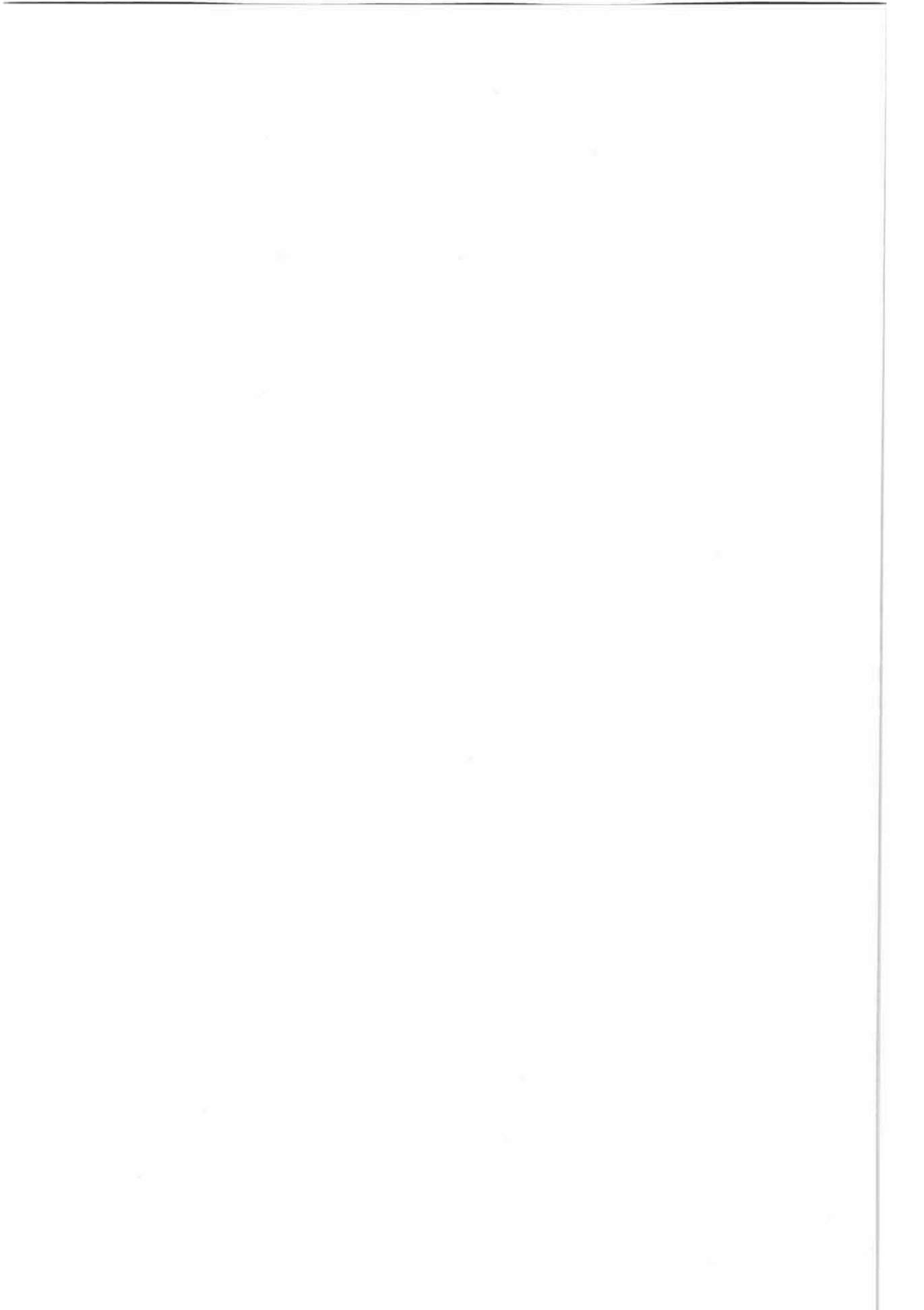
注3 矢印の方向に時期が新しくなるが、上下関係は、時期差及び、平行関係を示さない。

注4 百瀬正恒「長岡京の土器」(『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会) 1986

注5 橋本久和『上枚遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1980

注6 鈴木重信・松藤和人『同志社キャンパス内出土遺構と遺物—同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編Ⅱ—』同志社大学校地学術調査委員会 1978

注7 長岡京跡の調査の増加に伴って、東西の道が必ずしも復原案どおり、大路が大路幅を持たないため、南北どちらかにずれることが指摘されている。



## 5. 第二京阪道路関係遺跡（内里八丁遺跡・新田遺跡）

### 昭和63年度・平成元年度発掘調査概要

#### 1. はじめに

内里八丁遺跡・新田遺跡の調査は、第二京阪道路建設に先立ち、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施したものである。昭和63年度の調査は、八幡市内里今福・内垣内の内里八丁遺跡を対象とし、平成元年2月1日から3月8日まで行った。調査面積は約500m<sup>2</sup>で、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人、同調査員三好博喜が担当した。平成元年度の調査は、八幡市内里日向堂・中島・八丁の内里八丁遺跡と八幡市内里内垣内・古宮、岩田中道の新田遺跡を対象とし、5月18日から行った。試掘面積は約4,300m<sup>2</sup>で、調査第2課調査第3係長小山雅人、同調査員荒川 史が担当した。なお、内里八丁遺跡については、試掘調査の結果、遺構の存在が確認されたため年度途中から本調査に切り替え、現在調査中である。このため本概要では試掘調査分のみ報告し、本調査の報告は後日行いたい。本概要の執筆は三好・荒川が行い、文末に担当者名を記した。

現地調査・整理事業にあたっては、八幡市教育委員会をはじめとして多くの方々の協力を得た。<sup>(注1)</sup>記して謝意を表す。

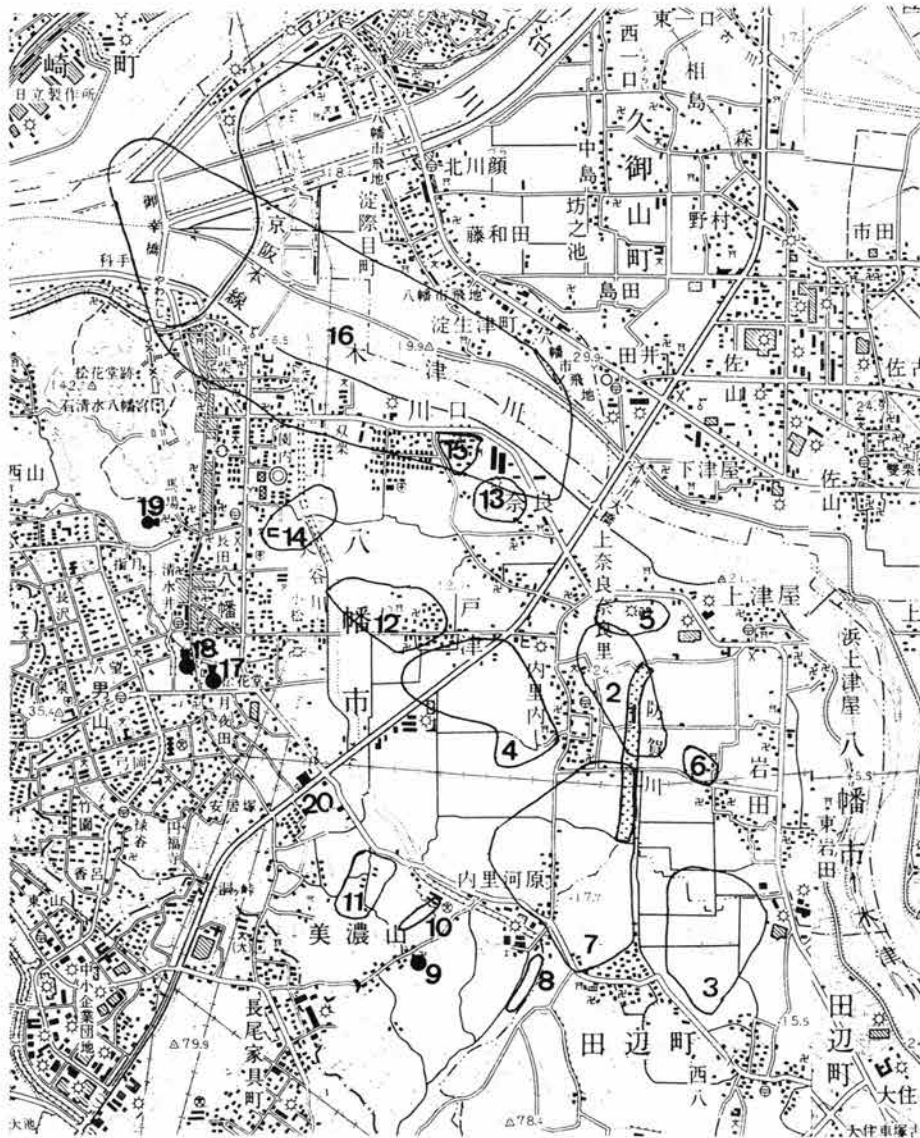
なお、調査に係る費用は全額建設省近畿地方建設局が負担した。

#### 2. 位置と環境(第35図)

内里八丁遺跡・新田遺跡は、木津川が形成した沖積平野に位置する。この両遺跡のある八幡市は、南山城地域に属し、西に京都府と大阪府の境でもある男山丘陵を配し、北と東を三重県布引山地に源を発する木津川が流れる。このため八幡市域は大きく二つの地域に分けることができる。つまり、男山丘陵とそれに続く河岸段丘、そして木津川が形成した沖積平野の二つである。

八幡市域では、丘陵部及び沖積平野のいずれにも、多くの遺跡が分布していることが知られている。以下時代を追ってこれらの遺跡を概観していく。

旧石器時代・縄文時代の遺跡は少なく、わずかに男山丘陵の金右衛門垣内遺跡が知られるのみである。この遺跡からは、ナイフ形石器や切目石錘が出土している。



第35図 調査地周辺遺跡分布図

1. 調査地 2. 内里八丁遺跡 3. 魚田遺跡 4. 内里五丁遺跡 5. 上奈良遺跡 6. 西岩田遺跡
7. 新田遺跡 8. 荒坂遺跡(横穴) 9. 王塚古墳 10. 狐谷遺跡(横穴) 11. 金右衛門垣内遺跡
12. 戸津遺跡 13. 下奈良遺跡 14. 島遺跡 15. 川口環濠集落 16. 木津川河床遺跡
17. 東車塚古墳 18. 西車塚古墳 19. 石不動古墳 20. ヒル塚古墳

弥生時代に入ると遺跡数もふえ、男山丘陵では弥生時代中期の金右衛門垣内遺跡・幣原遺跡、銅鐸が出土した式部谷遺跡、弥生時代後期的美濃山廃寺下層遺跡等がある。平野部では弥生時代後期後半の木津川河床遺跡がある。

古墳時代には男山丘陵上や段丘縁辺部に古墳が築造される。前期の古墳としては、茶臼

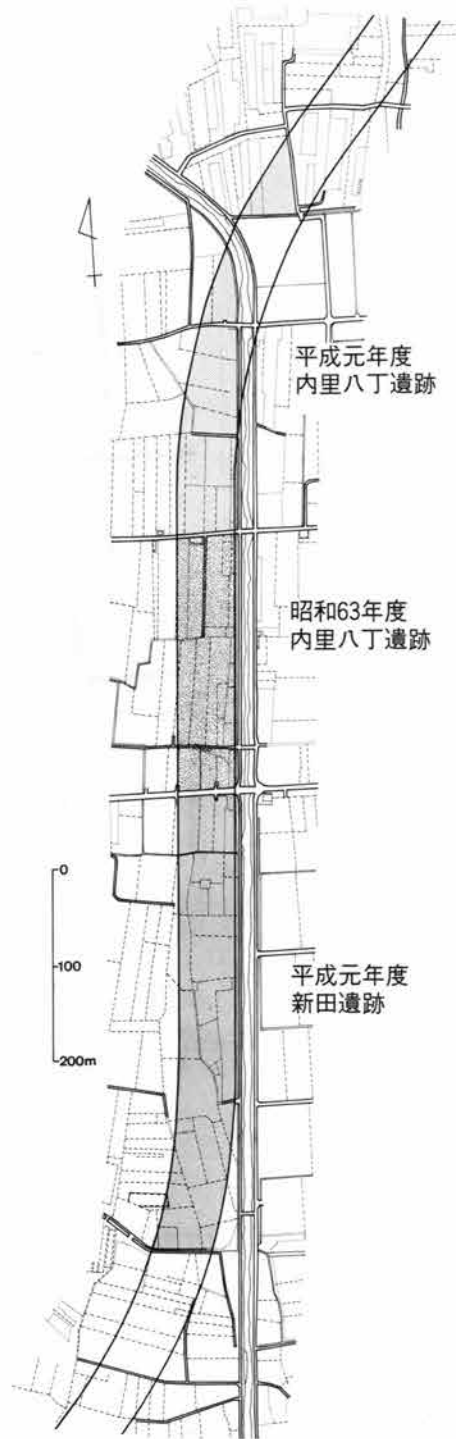
山古墳・石不動古墳・西車塚古墳・ヒル塚古墳といった50～100m前後の規模の前方後方墳・前方後円墳・方墳がある。中期古墳では、東車塚古墳・美濃山王塚古墳がある。墳形では、前・中期を通して前方後円墳が市域北部の旧八幡地域に集中する傾向がある。古墳時代後期では、美濃山地区から田辺町大住地区にかけて、狐谷横穴群・荒坂横穴群などの横穴墓が数多く造られる。このことは美濃山地域周辺に移住させられたとされる隼人との関連が考えられている。

古墳時代の集落はあまり調査されておらず、現在のところ、木津川河床遺跡で庄内式併行期の住居跡が検出されているのと、新田遺跡において5世紀代のカマドを持つ竪穴式住居跡が検出されているのみである。

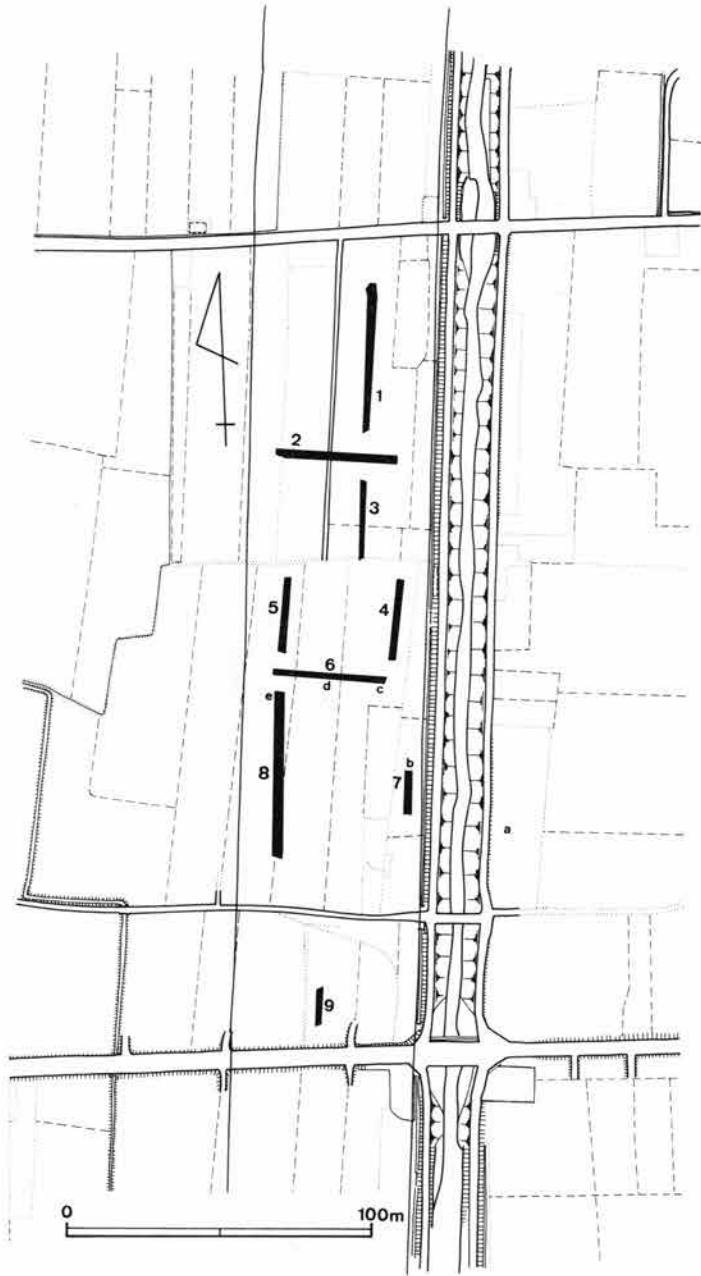
奈良時代の遺跡で著名なものとしては、西山廃寺・志水廃寺・美濃山廃寺の3寺院跡と、四天王寺の創建瓦を焼いた平野山瓦窯が男山丘陵周辺部にある。

これまで見たように、八幡市域における調査の多くが男山丘陵周辺であり、平野部での調査はわずかに木津川河床遺跡と新田遺跡のみである。しかし、100m前後の前方後円墳を築造する生産基盤が、丘陵上の遺跡群であったとは考え難い。前記の2遺跡の例や他地域の例などから、むしろ沖積平野にその生産基盤を求めるほうが妥当であると思われる。

(荒川 史)



第36図 年度別調査地位置図



第37図 昭和63年度内里八丁遺跡トレンチ配置図

岸を検出できる可能性があった。このため試掘トレンチを設定し、遺構・遺物および遺物包含層の存在を確認することとした(第37図)。また、必要に応じて重機を用いた土層観察を行った。

調査の結果、調査地全搬にわたって耕作土層・砂質土層・シルト層が確認され、調査地

### 3. 昭和63年度の調査(第37～39図・図版第22・23)

昭和63年度の調査地周辺では、近年来進められているほ場整備事業に伴う発掘調査が随所で行われてきた。東隣りの地点では昭和57年度に調査が行われ、排水路掘削時の立会調査坑から木津川旧流路に伴う沼状地に堆積した中世遺物が出土<sup>(注2)</sup>している。また、昭和58年度に行われた南西側の新田遺跡試掘調査のグリッド調査によって、木津川河道(新)の西岸が北へのびることが確認<sup>(注3)</sup>されている。

今回の調査地は、木津川の旧流路にあたることが予想されたものの、流路の西

付近の層位がほとんど変化のない堆積状況を示していることがわかった(第38図)。遺物は、砂質土層・シルト層にみられ、瓦器片を主体とした遺物が含まれていた。また、昭和57年度の試掘調査坑でも、シルト層から瓦器がまとまって出土していることから、シルト層の堆積時期は中世以後と考えられる。

出土遺物(第39図)は、砂質土層およびシルト層を中心として整理箱1箱程度が出土しているが、いずれも細片である。出土遺物の多くは、瓦器を主体とし

た中世の陶磁器類であり、これに近世以降の陶磁器類が混じる。土師器・須恵器などの比較的古い時代の遺物は少なく、摩滅したものもみられる。このため図示

できた遺物は中世および近世のものに限られ、量も少ない。

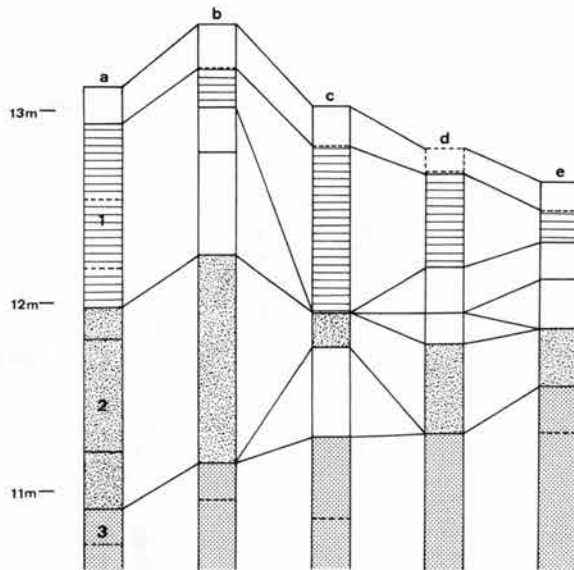
1は白磁の碗である。復原口径17.2cmで、口縁部に玉縁を持つ。森田・横田分類の白磁碗Ⅳ類にあたり、<sup>(注4)</sup>11世紀後半頃のものである。2は天目茶碗で、復原口径11.2cmを測る。16世紀頃の美濃窯天目と考えられる。3は、12世紀以降の瓦質三足釜の口縁部と思われる。復原口径は18.2cmを測る。

(三好 博喜)

#### 4. 平成元年度の調査

##### (1) 内里八丁遺跡(第40～43図・図版第24・25)

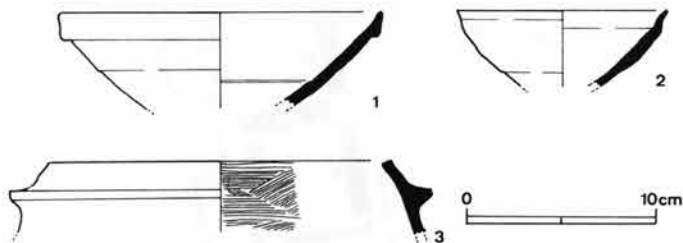
平成元年度の内里八丁遺跡の調査地は、昭和63年度調査地の北に隣接しており、前年度



第38図 昭和63年度内里八丁遺跡土層柱状図

1. 砂質土 2. シルト 3. 粗砂

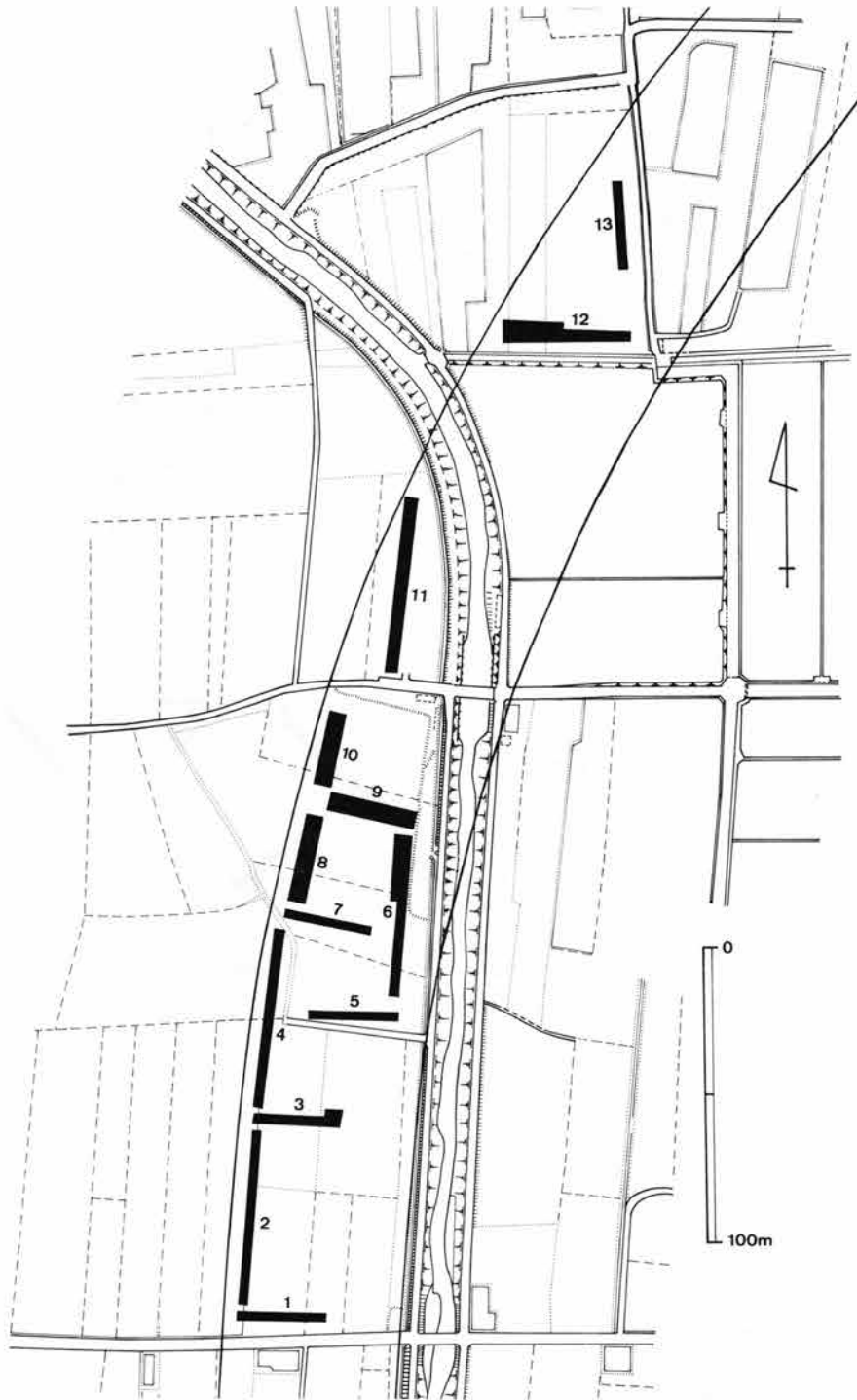
各アルファベットは第37図のアルファベットの地点に対応する



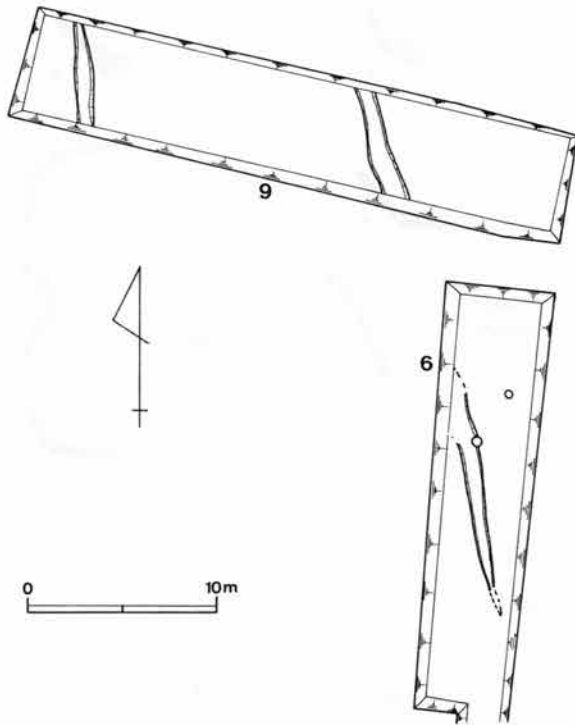
第39図 昭和63年度内里八丁遺跡出土遺物実測図

1. 白磁 2. 天目 3. 瓦質土器





第40図 平成元年度内里八丁遺跡トレンチ配置図



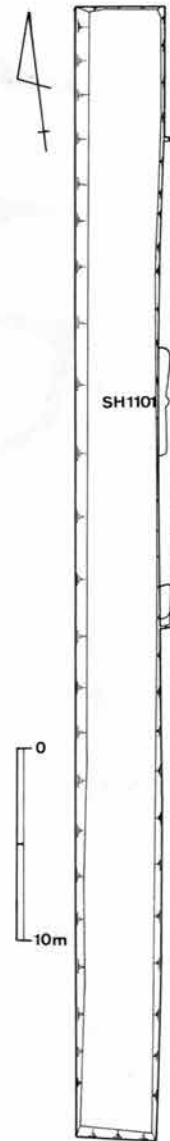
第41図 内里八丁遺跡6・9トレンチ実測図

調査と同様に沼状の地形が続くことが予想された。調査は幅3mのトレンチを13か所設定して行った(第40図)。

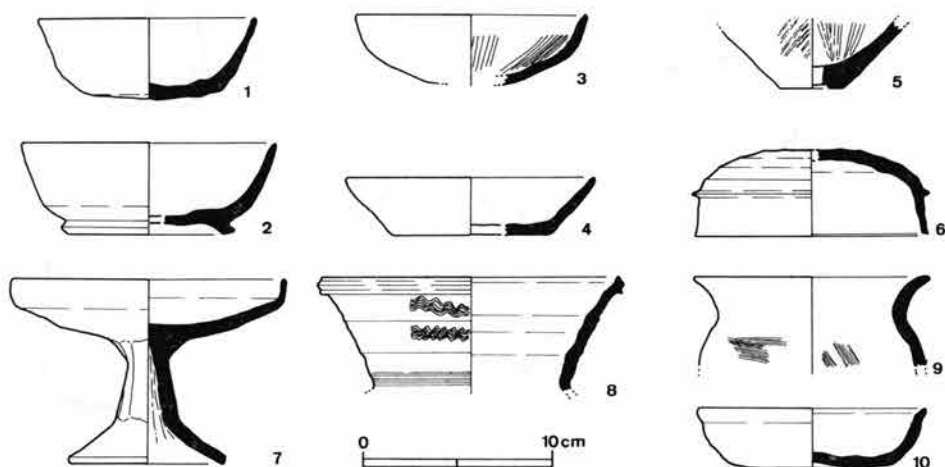
調査地南部の1～5トレンチ・6トレンチ南部・7トレンチでは、前年度調査と同様の堆積状況を示し、耕作土・砂質土・粗砂・青灰色シルトの順で堆積していた。調査地北部の6トレンチ北部・8～11トレンチでは、粗砂層がなくなり、耕作土・砂質土・茶褐色粘質土の順で堆積し、茶褐色粘質土層には遺物の包含が認められた。このため6トレンチ北部・8～10トレンチは幅6mに、11トレンチでは幅4mに拡張し、遺構の検出に努めた。

その結果、6・9・11トレンチにおいて遺構を検出した(第41・42図)。9トレンチでは、地表下約1mの茶褐色粘質土層上面において南北方向に走る溝を2条検出した。いずれも幅0.6～1mの溝で、遺物は出土していない。

6トレンチは土層観察のため、9トレンチにおける遺構検出面より約0.5m掘り下げしており、茶褐色粘質土の1層下層の面を検出していたが、ここでも南北方向に走る溝を1条



第42図 内里八丁遺跡11トレンチ実測図



第43図 内里八丁遺跡遺物実測図  
 1・2・4・6・8. 須恵器 3・5・7・9・10. 土師器

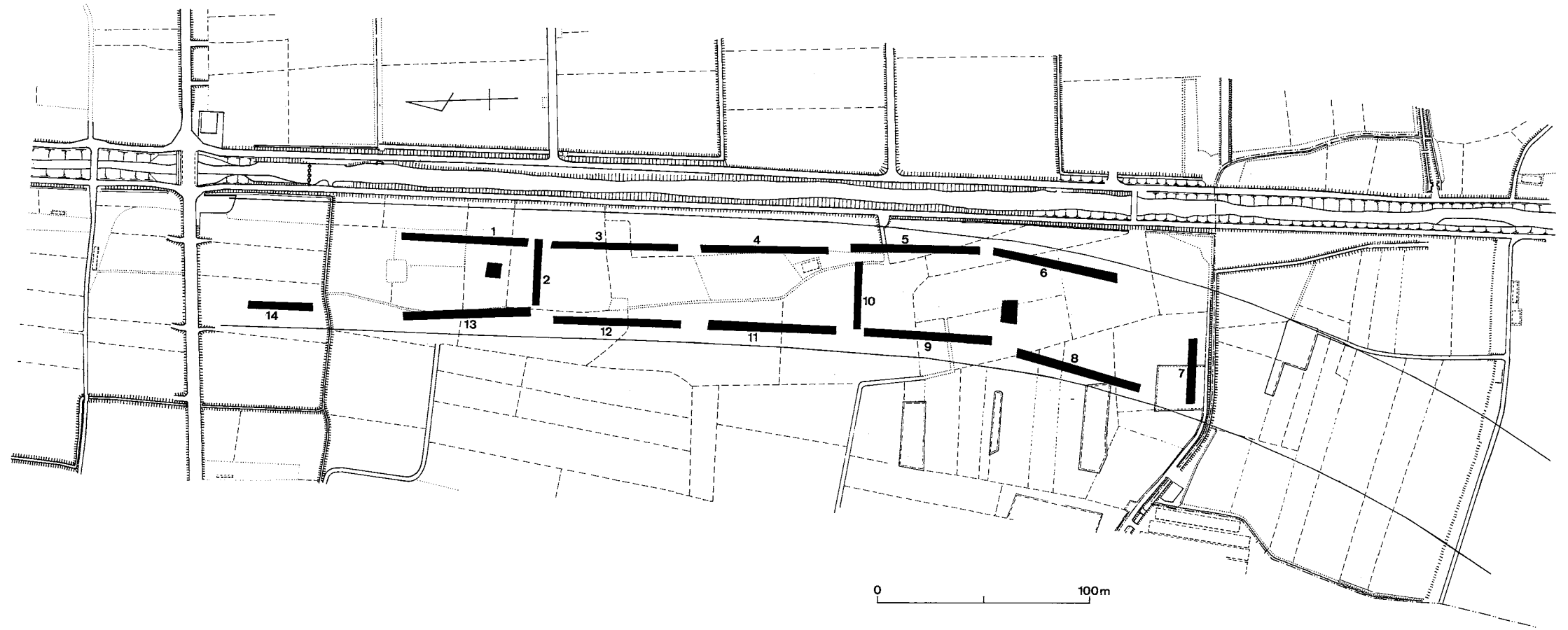
検出した。この溝からはTK209型式に属する須恵器の破片が出土している。

11トレンチでは当初層位の把握ができていなかったため、9トレンチと同様に重機により地表下1mの深さまで掘削していたが、その後の断面観察によって表土直下に遺構面があることがわかった。このため一部を幅1m拡張し調査を行った。その結果、竪穴式住居跡の一部(SH1101)とピットを検出した(第42図)。SH1101は方形の竪穴式住居跡で、一辺5.4mを測る。壁の残存高は約10cmである。出土遺物は土師器片があるが、細片のため時期は不明である。

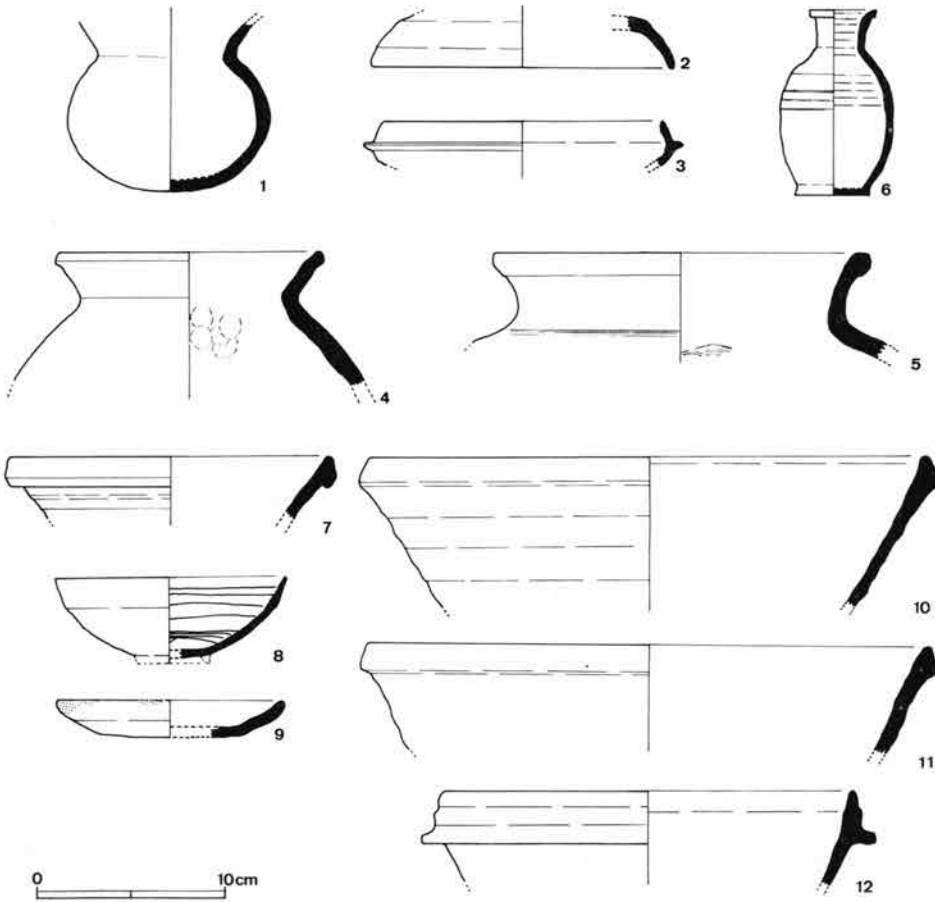
防賀川の東側の地区にあたる12・13トレンチでは、12トレンチ西部において方形になる茶褐色粘質土を検出した。方形周溝墓もしくは何らかの建物の基壇の可能性が考えられるが、一部分のみの掘削であるため性格は不明である。13トレンチでは灰色粘質土層と粗砂層を検出し、河川などによる再堆積の様相を呈している。灰色粘質土層から若干の遺物が出土しているが、遺構は検出できなかった。

今回の調査で遺物が出土したのは、調査地南部では青灰色シルト層から、調査地北部では茶褐色粘質土層からである。青灰色シルト層からは、主に瓦器・青磁・染付など中世以降の遺物が出土している。茶褐色粘質土からは主に須恵器・土師器が出土しており、古墳時代から奈良時代のものが中心である。出土した遺物の総量は、整理箱約3箱程度であるが、青灰色シルト層からの遺物はごくわずかで細片が多く、大半が茶褐色粘質土層からの遺物である。特に11トレンチからの出土量が多い。そのため今回図示し得た遺物はすべて6・10・11トレンチからの出土遺物である(第43図)。

出土した遺物の中で最も古い段階のものは5で、外面にタタキを有する甑である。庄内



第44図 新田遺跡トレンチ配置図



第45図 新田遺跡遺物実測図

1・4・9. 土師器 2・3・5・6. 須恵器 7. 白磁 8. 瓦器 10・11. 須恵質土器 12. 瓦質土器

式併行期と思われる。この段階を1期とすると、2期は6・8の段階で、TK208型式に併行する時期と考えられるが、遺物量は少ない。3期にあたるのはTK209型式に併行する時期であるが、図示し得る資料がなかった。6トレンチで検出した遺構はこの時期であるが、周囲では1期の遺物も出土していることから1期の遺構も存在する可能性がある。4期にあたるのは、1・2などの飛鳥・藤原京のⅢ期から平城京のⅢ期にいたる約100年間の遺物で、遺物量はこの段階のものが最も多い。9トレンチにおける遺構検出面はこの4期の遺構面と考えている。4期以降の遺物としては、平安時代の須恵器・灰釉陶器や鎌倉時代の瓦器・青磁なども出土しているが、量的にはごくわずかである。

(2) 新田遺跡(第44・45図・図版第26・27)

新田遺跡は、昭和58年度に今回の調査地の西方約250mの地点の調査が行われ、5世紀代<sup>(註5)</sup>の竪穴式住居跡と旧河道を検出している。今回の新田遺跡の調査は、昭和63年度の内里

八丁遺跡の調査地から八幡市境までの約24,000m<sup>2</sup>を調査対象とし、14か所のトレンチと2か所の断ち割り地点を設定して行った(第44図)。

調査の結果、ほぼすべてのトレンチで厚い砂層とブロック状に入る粘土層を検出した。この堆積状況から、調査地全域が木津川もしくは虚空蔵谷川の旧河道にあたるものと思われる。この旧河道は、昭和58年度調査における旧河道(新)につながるものであろう。

出土遺物は(第45図)、須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・白磁・瓦などがあるが、ほとんどの遺物が摩滅したものや水垢のついたものである。時期的には、今回図示できなかったが、平底の土器片も出土しており、おそらく弥生時代からあるものと思われる。比較的多いのは、1～5などの古墳時代の遺物、6・7の平安時代の遺物、8・10～12の鎌倉時代の遺物である。最も新しい遺物としては、9の土師皿や伊万里の染付などがあり、江戸時代中期頃と思われる。このことから今回検出した旧河道の年代は、最も新しい段階で江戸時代中期と考えられる。

## 5. ま と め

2年度にわたる内里八丁遺跡・新田遺跡の調査で、新田遺跡部分は旧河道、平成元年度調査の内里八丁遺跡北部に遺構の存在することがわかった。そしてその中間部は旧河道にともなう氾濫原であることが考えられる。内里八丁遺跡北部では、検出した遺構は少なかったが、堆積状況や遺物の出土状態などから周辺に何らかの遺構が存在することが予想される。また、遺構面は少なくとも2面あり、上層は飛鳥時代から奈良時代、下層は古墳時代と考えられる。

この内里八丁遺跡周辺は、条里地割も残っている地域であり、また足利健亮の推定する古山陰道も調査地付近を通る可能性がある。<sup>(注6)</sup> 今後の本調査によってこれらの問題を解決する良好な資料が得られるものと思われる。(荒川 史)

- 注1 昭和63年度調査参加者 滝脇喜充・塚本映子・中原昌弘  
平成元年度調査参加者 東 高志・新庄一秀・田中悦子・柳田剛史・高野由美子・俵 智子・浜中邦弘・脇田友子・木下智保・岩永篤彦・牧田佳子・寺本智美・吉川誓二・岡村忠志・森田千代子・奥平廣子・与十田節子・福田玲子
- 注2 奥村清一郎・伊辻忠司「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1983)』京都府教育委員会) 1983
- 注3 奥村清一郎・伊辻忠司「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1984)』京都府教育委員会) 1984
- 注4 横田賢二郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として」(『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館) 1978
- 注5 注3文献
- 注6 足利健亮「山背の計画古道」(『日本古代地理研究』 大明堂) 1985

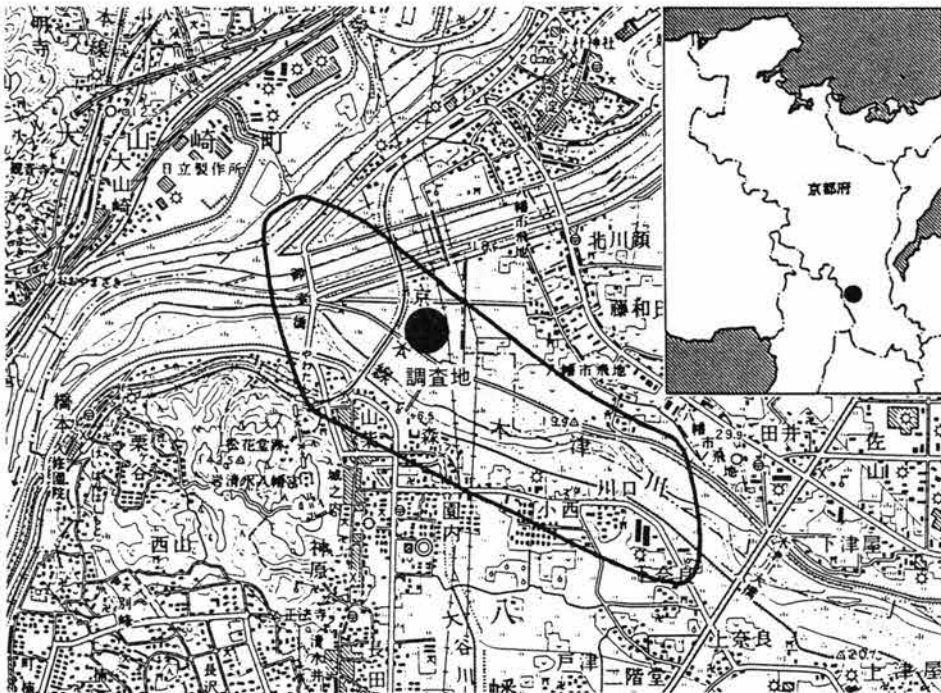
## 6. 木津川河床遺跡平成元年度発掘調査概要

### 1. はじめに

木津川河床遺跡は、木津川・宇治川・桂川の三川合流地点から木津川上流に架かる木津川大橋付近一帯に所在する。当遺跡は、この河川敷に散在する遺物の採集によって遺跡の存在が予想された。さらに、昭和57年度から本年まで数次にわたる発掘調査の結果、弥生時代～古墳時代の集落、中・近世の素掘り溝、噴砂等の遺構が検出され、具体的に遺跡として確認された。これらの調査は、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが京都府土木建築部の依頼を受け、洛南浄化センターの諸施設の建設に先立って実施している。

本年度の調査は、昭和61年度「ET-2地区」北側のエアレーション・タンク槽（「ET-3地区」）の建設予定地内である。調査期間は平成元年5月15日～9月14日までである。

調査の結果は、「ET-2地区」と同様の古墳時代初頭の竪穴式住居跡、同時代の土器類、土壌、中・近世の素掘り溝、噴砂等を検出し、その広がりを確認すること等、貴重な資料を得ることができた。なお、発掘調査に係る経費は、京都府土木建築部が負担した。



第46図 調査地位置図

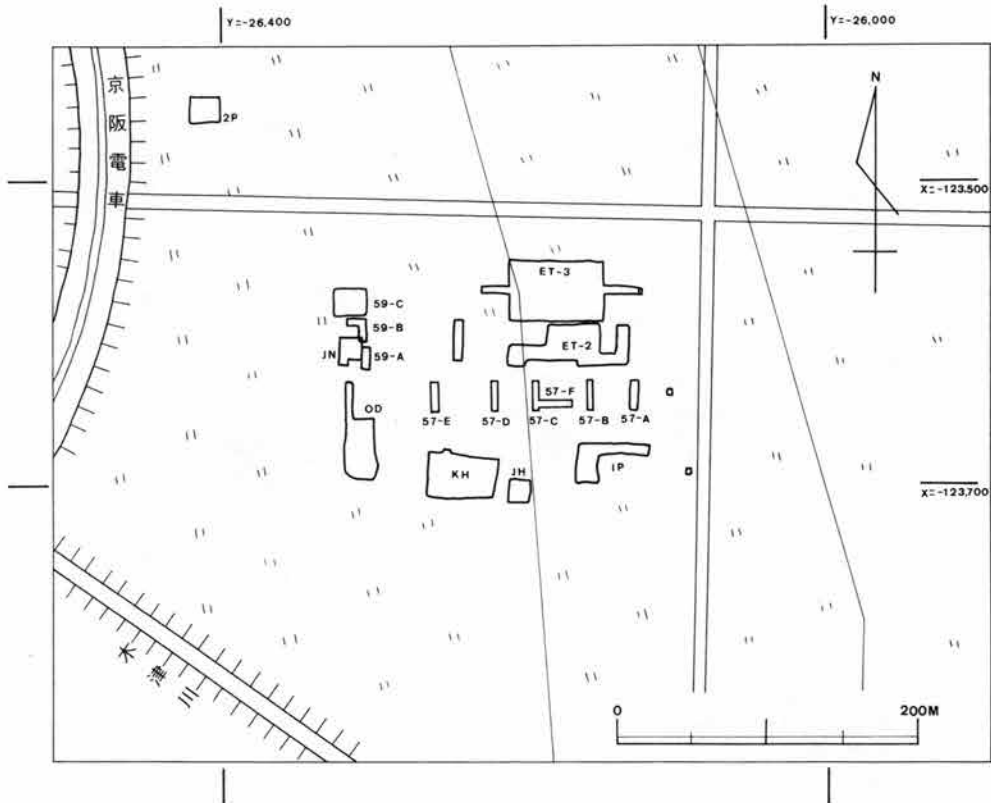
## 2. 調査経過

今回の調査は、ET-2地区では弥生時代～古墳時代の集落跡が確認されており、さらにその広がりを追認することが主目的である。

トレンチは、前年度に幅5m・長さ約100mの試掘トレンチを入れ、遺構の有無を調べ、それに基づき東西60m・南北33mのトレンチを決めた。調査面積は約2,000m<sup>2</sup>である。

調査地の掘削は、中世の素掘り溝が検出できる面(地表下2m)まで重機で行った。この時点で中世・近世素掘り溝、噴砂等の平面形がほぼ検出できたが、予想以上に溝の重複、大規模の噴砂等の存在することがわかった。

調査地内の地区割りは、従来どおり、国土座標の第Ⅵ座標系を用いて座標北とし、これに直交して5m方眼を組んだ。東西ラインは南から北に数字を、南北ラインは東から西へアルファベットを付してライン番号とした。5mの区画内の地区名は、その北西隅の交点をつくる東西・南北のライン名を用いた。この地区名は、昭和61年度ET-2地区の延長上にあるためそのまま踏襲した。10・LのポイントはX=-123,570・Y=-26,180である。



第47図 トレンチ配置図



### 3. 検出遺構(第48図)

#### 基本層序(第54図)

今回の調査地の基本的な層序は、過去数次の木津川河床遺跡調査とほぼ同様の傾向を示している。近世・現代層(1~6-2)を除く下層からは、近世以前の遺構・遺物が検出され、地表下2m・標高8.5mに存在する。以下、各層毎に記述する。

近世に属する層は4-6-2がある。大半は水田耕作、床土である。3は氾濫による堆積土である。4は素掘りの暗渠排水溝である。11・14~17は、近世の大溝内の堆積土で、地震によって噴出した砂礫(14)である。

中世に属する土層は、7・10がある。厚さ40cmを測り、一部平安時代に属するものがある。これは、水田あるいは畑の耕作土及び床土である。

12は、古墳時代の住居跡の基盤層である。砂質土で地盤がやわらかく、この中に古墳時代及び弥生時代の遺物が含まれている。

18は、厚さ1.5m以上の砂及び砂礫層である。トレンチ全面に広がる噴砂のもとである。出土遺物は第52図16の壺がある。

#### 素掘り溝(第48図)

第48図に図示した素掘り溝は、ほとんど中世に属するものである。

素掘り溝はトレンチ全面に東西・南北方向に数多く検出した。幅0.2~0.3m・深さ0.2~0.3m・長さ15mを越えるものがある。堆積土は、主に青灰色粘質土である。出土遺物は瓦器碗、土師器の細片がある。溝の先後関係、遺物の様相から2~3の時期差がある。トレンチ北東部、南西隅の素掘り溝群は、溝の間隔が1.3~1.6mを測り、畑地の様相を呈している。その他は水田の暗渠排水溝であろう。

#### 大溝(第48図)

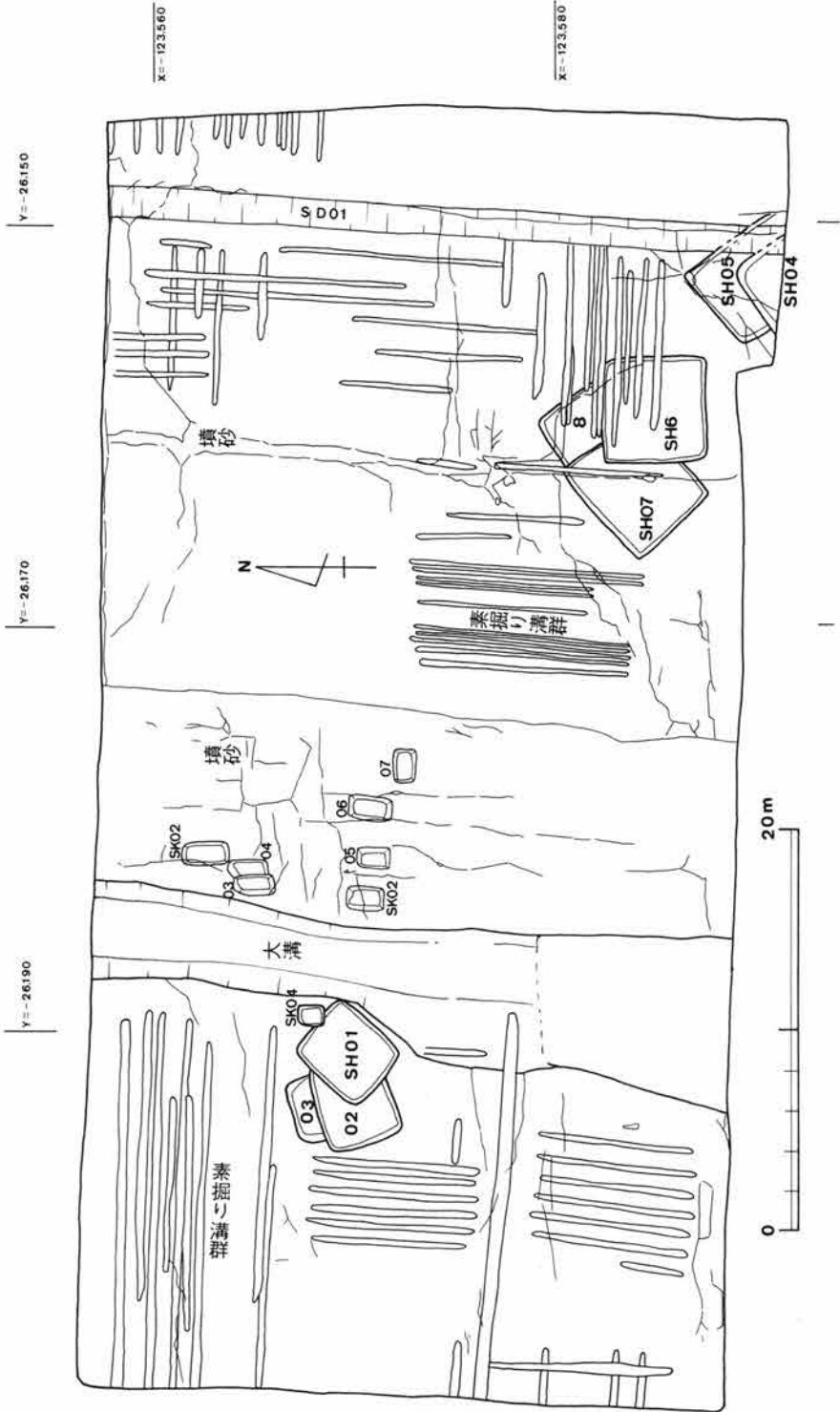
トレンチ中央やや西よりに検出した幅3~5m・深さ0.6mの溝である。断面は碗状を呈し、粘土・砂礫が堆積している。平面で検出した当初、砂礫層(第54図18)が全面を厚く覆っているため、大規模な噴砂であろうと考えた。しかし、堆積状況が不自然であるため、噴砂によって水田に広がった砂礫を溝内に寄せ集めたものとするに至った。この溝の性格は、農業用水路と思われる。

#### 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡は、合計8棟検出したが、それぞれ切り合っており、3時期にわかれる。出土遺物は庄内式土器がほとんどで、狭い時期に限られる。平面形はすべて方形を呈し、方位は真北から大きく振れる。

#### 竪穴式住居跡SH01・02・03(第49図)

SH01 3棟のうち最も新しい時期のものである。規模は3.4m×4.2m、残存高は0.15



第48図 遺構実測図

mである。柱穴や壁溝は検出されなかった。床面は噴砂によって東側(大溝側)がせり上る。柱穴・壁溝はないが、北辺に不定形な炭化物の集積があった。出土遺物は古墳時代の土師器の細片があった。方位はN45°Eである。

**SH02** SH01の下層より検出された。規模は3.6m×4.0m以上、残存高0.1mである。床面には柱穴・壁溝がない。堆積土は青灰色砂質土である。出土遺物は古墳時代の土師器の細片がある。方位はN68°Eである。

**SH03** 規模は3.1m×?を測る。堆積土は淡青灰色砂質で遺物は全くない。

#### 竪穴式住居跡SH04・05(第50図)

**SH04** トレンチ南東端で検出した。これは61年度調査の竪穴式住居跡SH89の北半分に相当する。規模は4.2m以上×3.4m以上、残存高0.3mを測る。床面には柱穴・壁溝はない。焼土、炭化物の集積が北東辺にあり、古墳時代初頭の土師質甕、器台、高杯等が少量に含まれる。堆積土は青灰色粘質土で炭化物が混入している。方位はN54°Eである。

**SH05** SH04の下層より出土し、ほぼ同じ方位(N45°E)を示す。規模は5.7m×6m以上、残存高は0.2mを測る。堆積土はSH04に類似するが炭化物の混入は少ない。住居のコーナーには噴砂坑があり、壁に沿って噴砂がみられる。

#### 竪穴式住居跡SH06・07・08(第51図)

**SH06** SH05付近で検出した。規模は4.8m×4.7m、ほぼ正方形を呈し、残存高0.2mを測る。方位はN6°Wである。床面には円形の柱穴を検出したが壁溝はない。堆積土は、青灰色砂質土に炭化物が混入し、部分的に焼土、炭化物の密集があった。出土遺物は、古墳時代の土師質甕・壺・高杯・器台等がある。

**SH07** SH06の下層より検出した。規模は4.9m×6.0m・残存高0.15m、方位はN57°Eである。堆積土は青灰色粘質土であり、炭化物、焼土を含む。出土遺物は古墳時代の土師質甕・壺がある。

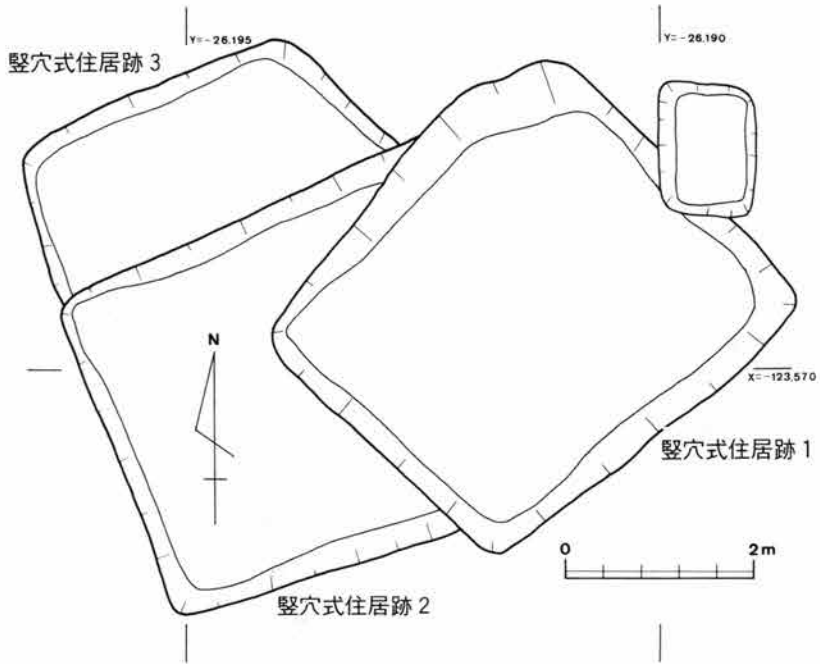
**SH08** 規模は2.7m×4.2m以上、残存高0.15mを測る。堆積土は青灰色砂質土である。遺物は土師質甕の細片がある。方位はN62°Eである。

#### 噴砂(第48図)

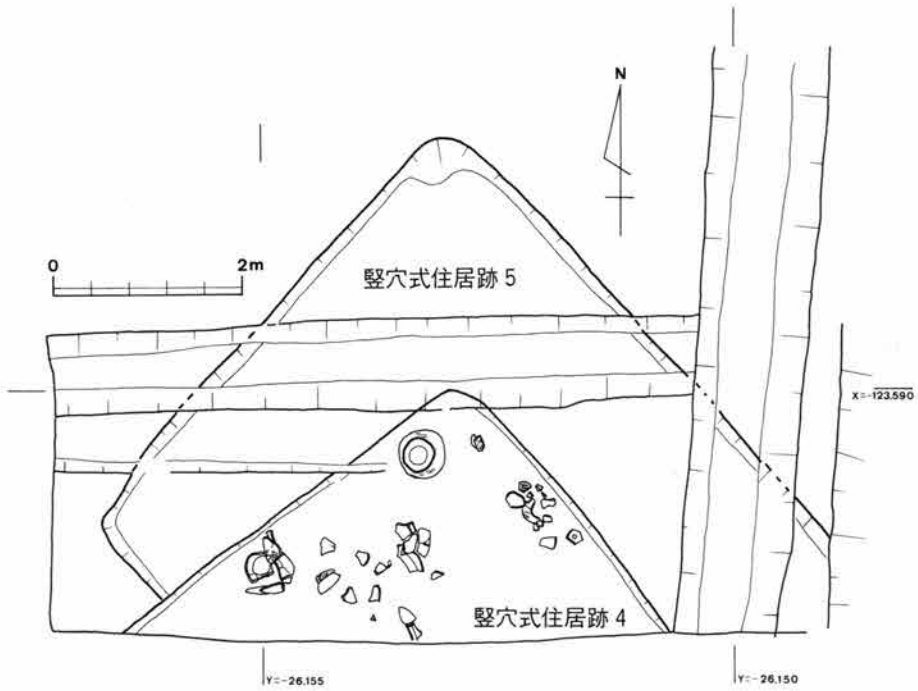
木津川河床遺跡の噴砂について、昭和61年度調査概報において、年代(慶長5年)、地震の規模、震源地等が解明されている。今回の噴砂は前述した内容と一致するものであるが、トレンチ全域に及ぶもので、しかも、遺構とのかかわりがよくわかる資料である。

噴砂の規模は幅数mm～30cm・長さ30m以上を測り、東西・南北方向及び斜め方向に走る。この砂は第48図18の黄褐色砂礫が噴き出したもので、特に砂の噴き上げが多い。

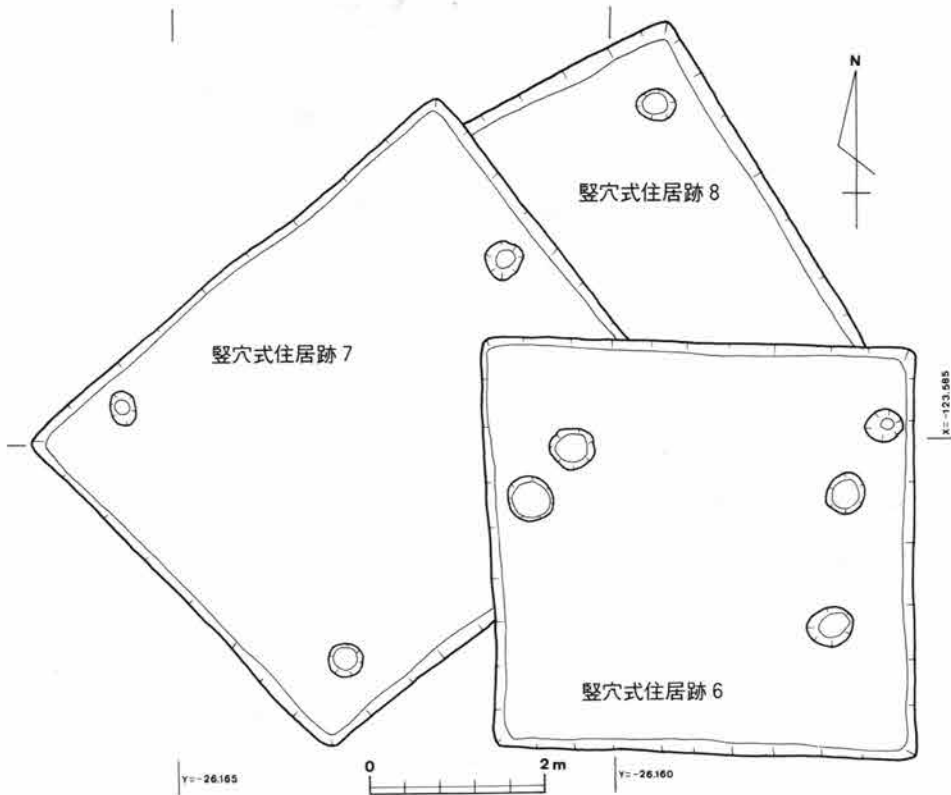
噴砂と遺構との関連を示す例として、(1)SD01の東肩、大溝の東肩 (2)竪穴式住居跡SH



第49図 竪穴式住居跡 1・2・3



第50図 竪穴式住居跡 4・5



第51図 竪穴式住居跡 6・7・8

05・SH08の壁面 (3)土坑群付近の噴砂等がある。

(1)SD01の堆積土は固くしまった粘質土で、一方、溝の基盤層は砂質土であり、明らかに土質の違いが噴砂の要因であろう。大溝(第54図)の噴砂も同様である。

(2)SH05のコーナーには噴砂坑(円錐状に噴き上げてできる噴砂)がみられ、ここから放射状に北東壁と北西壁に噴出している。これも土質の違い(固さ)で生じたものである。

(3)土坑に沿って縦横無尽に走っている。土坑2の東側の噴砂は土坑を壊している。

#### 4. 出土遺物(第52図, 第53図)

出土遺物には弥生時代から近世に至る遺物があり、コンテナ・バットで約15箱分がある。とりわけ弥生時代後期から古墳時代初頭の土器類が大半を占め、これらは庄内式土器と呼ばれている。この時期の遺物は、竪穴式住居跡・土坑から出土したもので、ET-2地区と同じような傾向がみられる。

##### 竪穴式住居跡SH04(第52図1～8)

1は口径16.4cm, 土師質壺である。器壁が厚く、二重口縁を有し、二段目は短く外傾

し一段目が長く直線的に斜め上方に立ち上がる。体部外面はハケによるカキ目、内面はヘラ削りを施す。肩部には幅広い1条の沈線がある。

2は口径19.5cm, 土師質高杯である。器壁が一様に厚い。焼成は不良である。

3～8は土師質甕である。器壁が厚いもの(3・5・6・8)と薄いもの(4・7)がある。

3は「く」の字形の頸部を有し、口縁部は外反しながら斜め上方にのび、端部は狭い平坦面を持つ。体部外面の上半部は荒いたタキ目、下半部は縦方向のハケ目を施す。内面は全面にケズリ調整を施す。口縁部内外面は横ナデによる仕上げを行う。

4は口径1cm。「く」の字形の頸部を有し、口縁端部は細くおさまる。体部外面はタタキ目のちナデによって消す。内面は、全面ケズリ調整する。

6は「く」の字形の頸部を有し、口縁部は内湾しながら斜め上方にのび、端部は上方に小さくつまみ上げ、外側に平坦面をもつ。色調は暗茶褐色で、いわゆる「河内産」の土器。

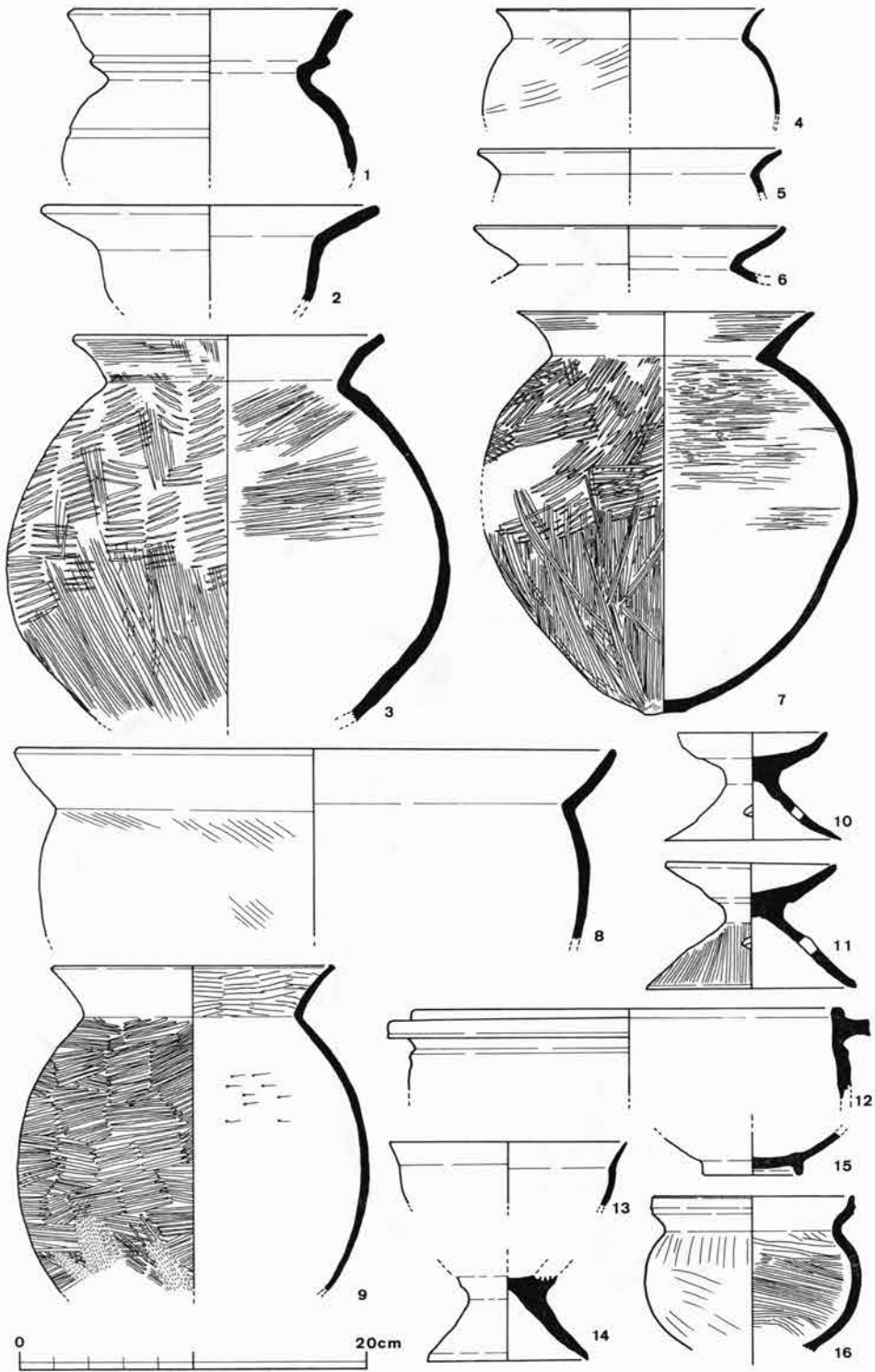
7は口径17.1cm・器高23.0cm。鋭く屈曲する「く」の字形の頸部を有し、口縁部はやや外反しながら斜め上方にのび、端部は外側に細くおさまる。胴部は丸く張り、底部は小さい平底である。体部外面の上半部は斜め方向のタタキ目、下半部は縦方向のハケ目を施す。内面は横方向のヘラ削りで調整する。

8は口径34.2cm, ゆるやかな「く」の字形の頸部を有し、口縁部は内湾しながら斜め上方にのび、端部は丸くおさまる。

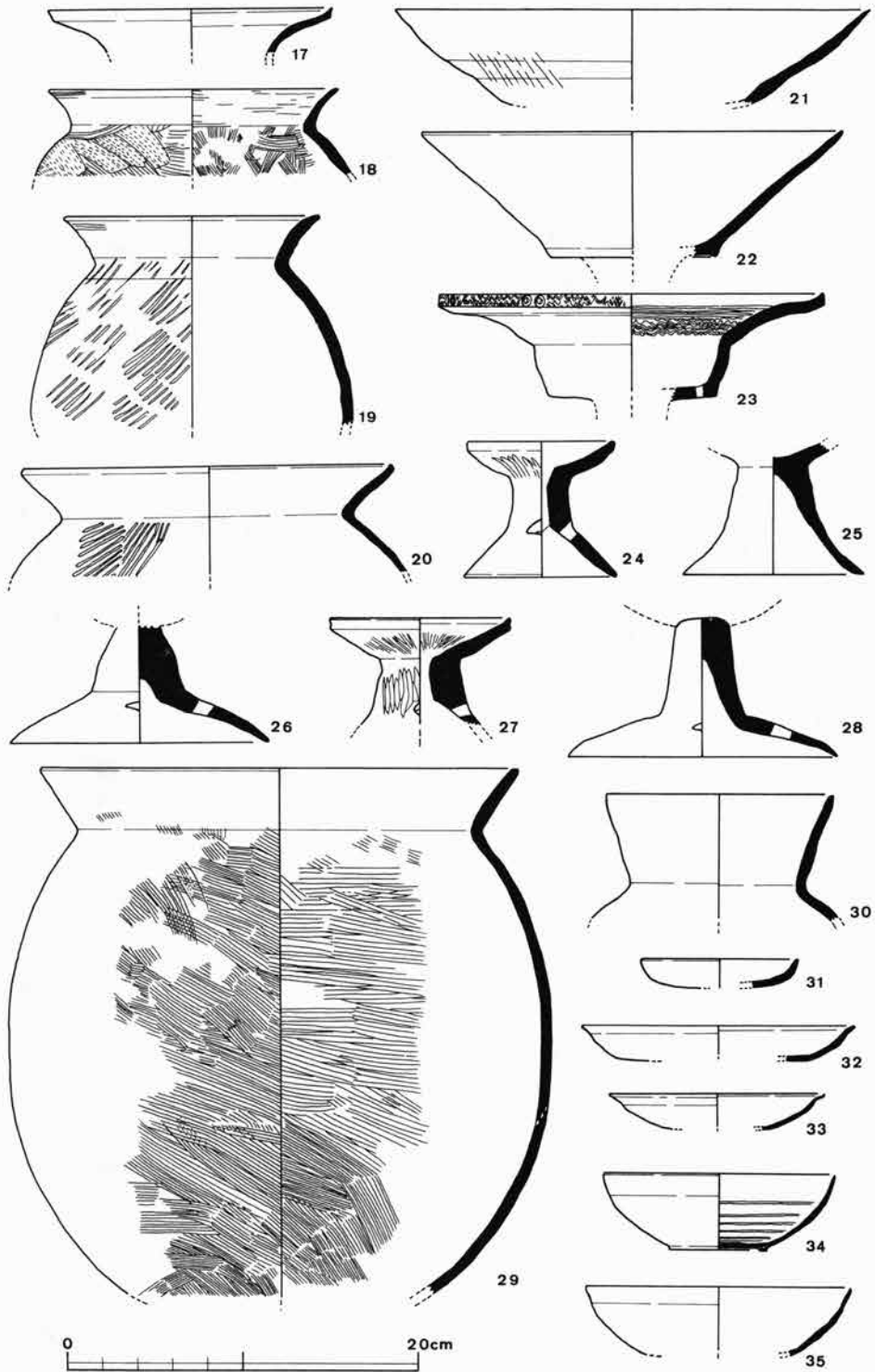
#### 竪穴式住居跡SH06(第52図18～29)

18～20・29は土師質甕である。18は口径16.4cm, 「く」の字形の頸部を有し、口縁部は外反しながら斜め上方にのび、端部は丸くおさまる。体部外面は細かいハケ目、内面はケズリの後ナデを施す。19は口径14.7cm, 形態は18と類似するが、器壁が厚い。外面はタタキ目、内面はケズリを施す。20は口径21.2cm, 口縁端部はつまみ上げる。外面はタタキ目内、面はケズリを施し、全体に器壁を薄く仕上げる。29は口径27.2cm, やや胴長の甕である。体部内外面ともハケ目調整である。

21～23・26・28は土師質高杯である。21は口径27.0cm, 杯部は内湾ぎみに斜め上方に立ち上がり、端部は細く丸くおさまる。外面はヘラ磨きを施す。22は口径23.8cm, 杯部は直線的に大きく外方に開き、端部は丸くおさまる。外面に断面三角形の段を有する。23は口径22.0cmで、器壁が厚い。杯部は水平な底部から直立ぎみに立ち上がり、途中で大きく外反する。端部は直上につまみ上げ、外側に平面を形成する。この面に波状文を巡らし、竹管文を2個並べて間隔をおいて配する。内面は直線的な櫛描文と波状文を組み合わせで描く。26・28は高杯の脚部である。28は柱部から大きく屈曲して外方に開き、端部は丸くおさまる。外面は放射状のきめ細かいヘラ磨きを施す。

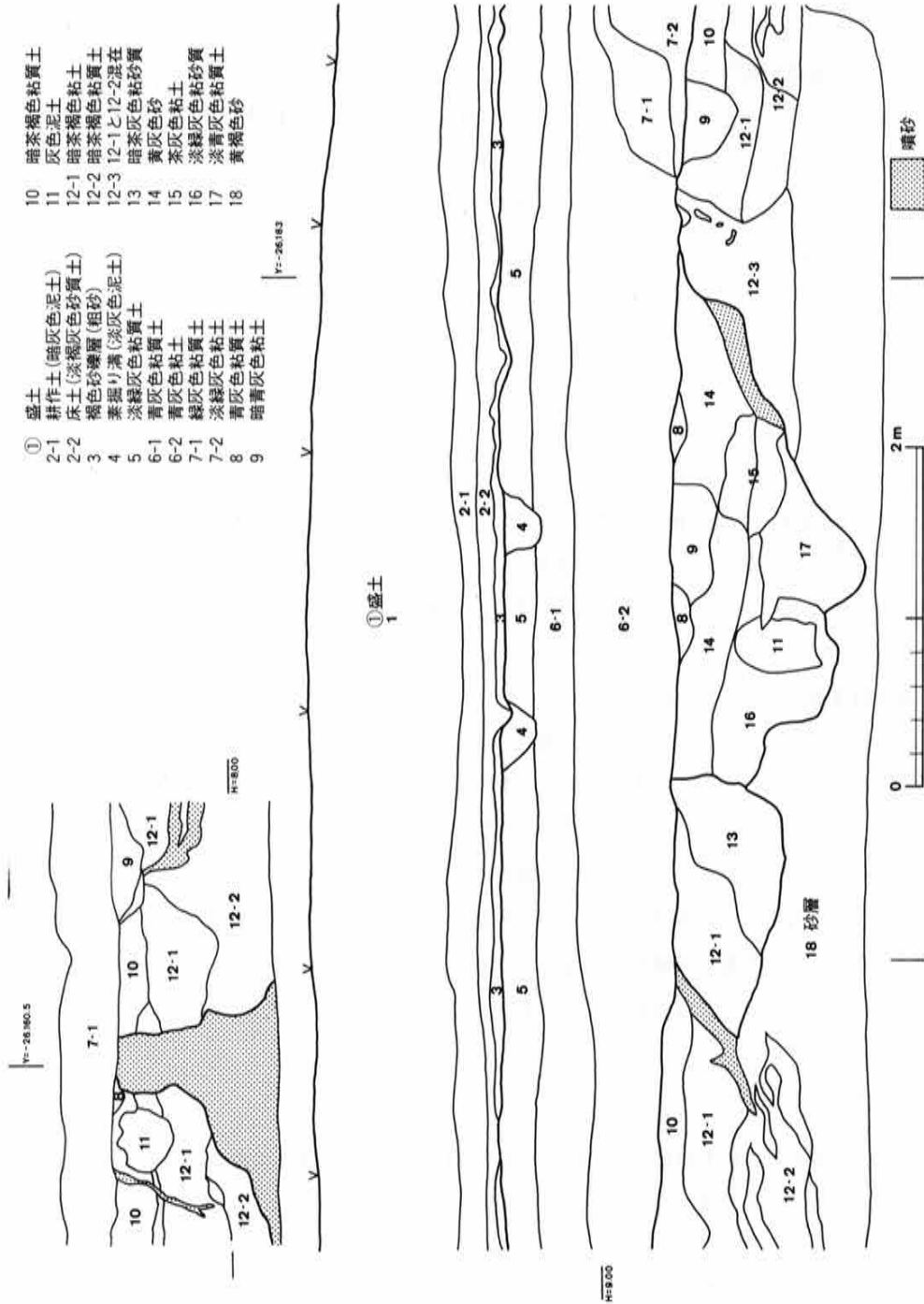


第52図 出土遺物実測図(1)



第53図 出土遺物実測図(2)





**竪穴式住居跡SH07(第53図17・30)**

17は土師質甕である。口径16.2cmで、端部は直上につまみ上げ、外側に平坦面をもつ。

30は口径13.0cmの土師質の直口壺である。やや外傾する長い口頸部をもつ。

**竪穴式住居跡SH08(第52図9～12)**

9は口径16.3cmの土師質甕である。器壁が薄く、「く」の字形の頸部を有し、外反しながら斜め上方にのび、端部は断面三角形状に肥厚する。体部外面の全面に横方向のタタキ目、内面は横方向のケズリを施す。口縁部内面は横ハケで調整する。

10・11は土師質器台で、小型品である。10は口径8.6cm・器高6.2cmを測る。横方向に開く受け部から口縁部が斜め上方にのび、端部は丸くおさまる。脚部は外反ぎみにスカート状に開き、円形の孔が3個付く。外面はヘラ磨きを施す。11は口径9.8cm・器高7.2cmで、受け部は斜め上方に開き、口縁部は丸くおさまる。脚部は直線的にスカート状に開く。

**素掘り溝(第53図31～35)**

31～33は土師質皿である。31は口径9.0cm・器高1.7cmで、内外面ナデ調整を施す。32は口径15.7cm・器高2.0cm。底部は平底で、口縁部は外傾し丸く終る。内外面にナデ調整を施す。33は口径12.2cm・器高2.0cmで、器壁が薄く、口縁部は「て」の字口縁である。

34・35は瓦器椀である。34は底部には低い台形状の高台が付く。内面には数条の暗文を荒く施す。

**遺物包含層(第52図12～16)**

12～15は中世の水田を形成する淡茶褐色土層から採集したものである。12は口径24cm、瓦質の羽釜である。13は口径13.5cmの土師質鉢である。14は土師質の高杯か器台の脚部である。外面はヘラ磨き調整する。15は土師質椀である。底部には逆台形の高台が付く。

16は砂礫層(第53図18)から出土した土師質、短頸壺である。口径11.6cm、器壁が一様に厚い。胴部は丸く張り、小さい「く」の字形の頸部を有し、口縁部は直上する。端部の外側は、幅広い沈線を施し稜線が1条走る。体部外面は荒いハケの後ナデ消す。内面は細かい横ハケを施す。底部には台がとり付くものであろう。

## 5. ま と め

今回の調査ではET-2地区に引き続き、庄内併行期の集落遺構を検出し、その範囲がさらに北へ広がることを確認した。これに伴い出土した庄内式土器は、生駒西麓産(河内産)が多数あり、木津川-淀川ルート of 土器交流が盛んであったことがうかがえる。

噴砂は大規模な地震の痕跡を示すばかりか、予想以上に遺構を潰しており、調査を実施する上で大きな影響を与えた。

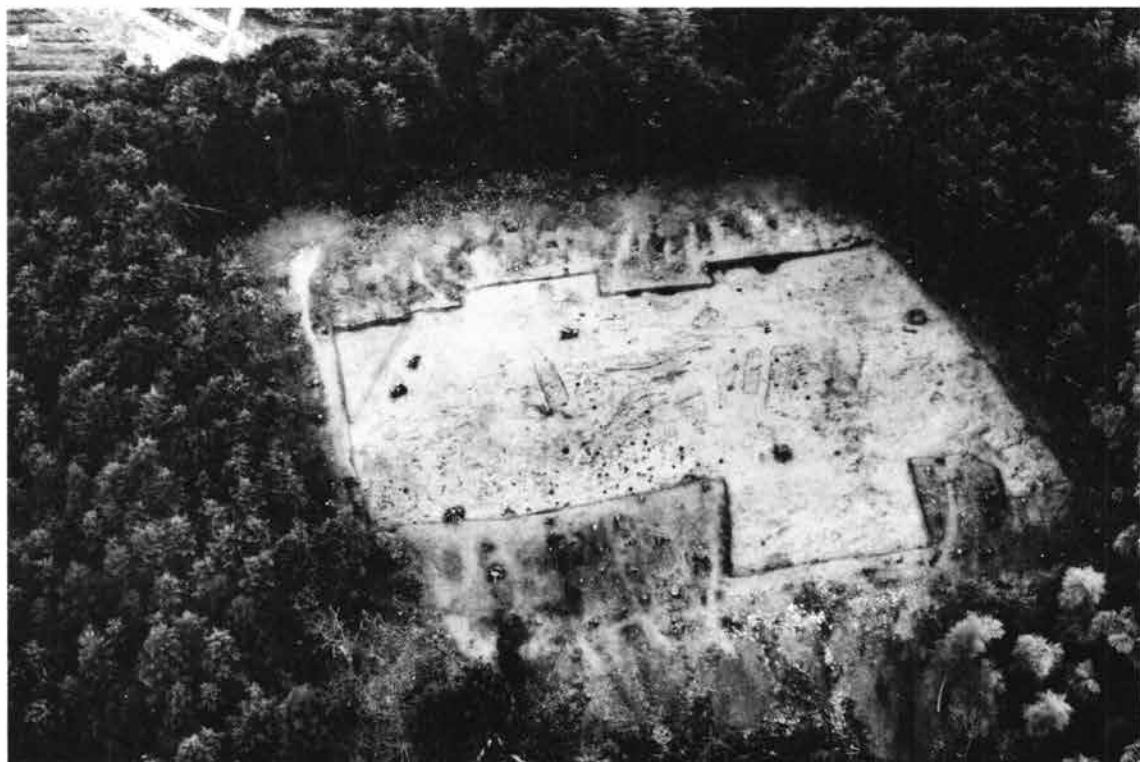
(竹井治雄)

圖 版

図版第1 高田山古墳群



(1) 調査地遠景 (空中写真)



(2) 調査地全景 (空中写真)

図版第2 高田山古墳群



(1) 調査前全景（南西から）



(2) 調査地全景（南から）



(1) 3号墳主体部2・3完掘状況(西から)



(2) 土壙墓1完掘状況(東から)

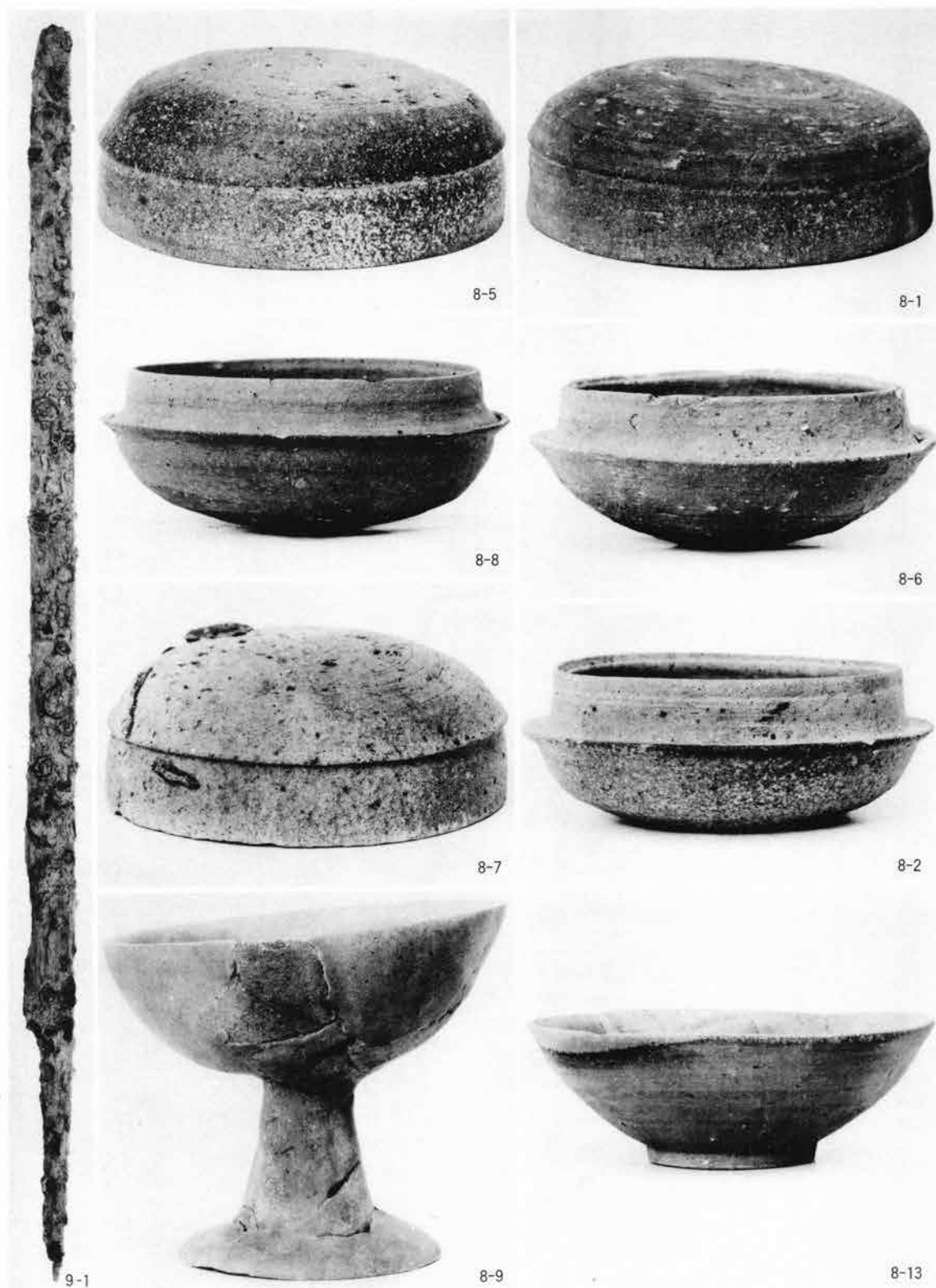




(1) 4号墳主体部1完掘状況(西から)



(2) 4号墳主体部1土器出土状況



出土遺物（番号は図面と一致）



図版第6 塩谷古墳群



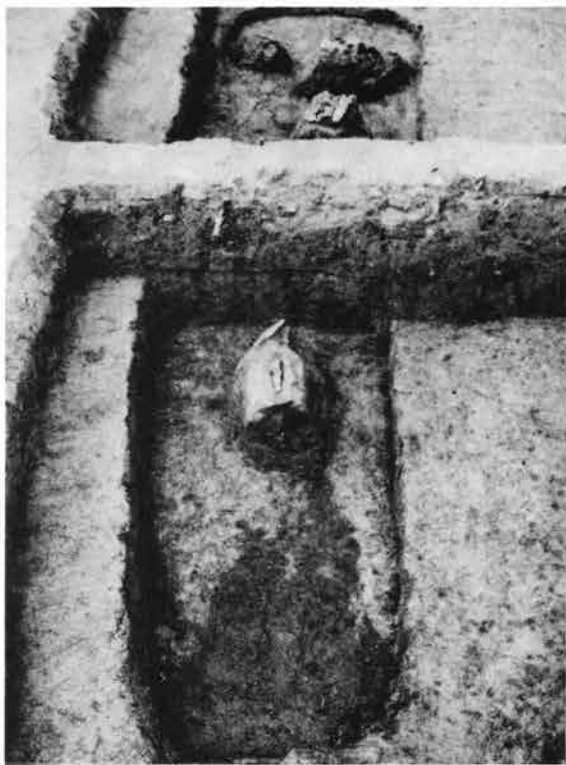
(1) 調査地全景（北東から）



(2) 調査地全景（南から）



(1) 2号墳全景 (南から)



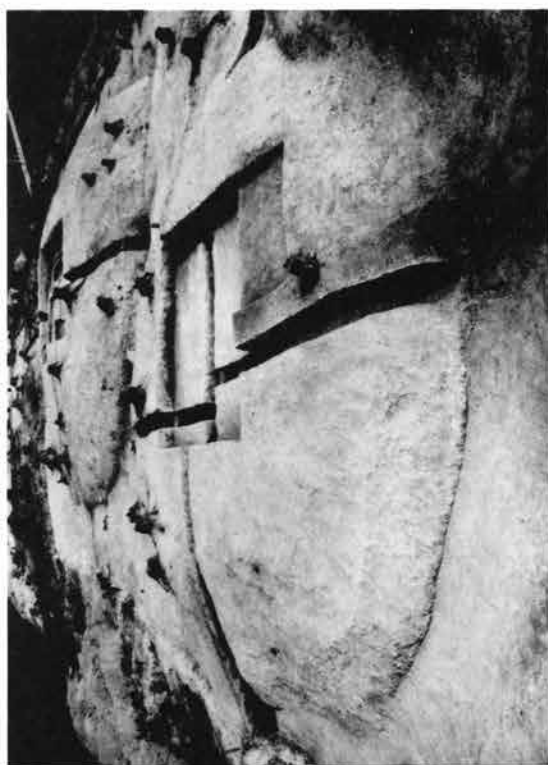
(2) 同 第1主体部 (南から)



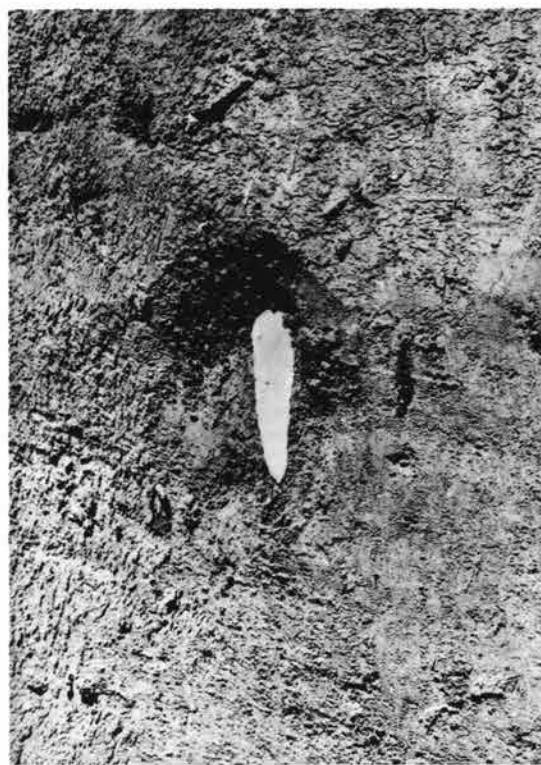
(3) 同 鉄剣 (南から)



(1) 1～3号墳調査風景 (南から)



(2) 2・3号墳全景 (南から)



(3) 3号墳出土有舌尖頭器 (東から)



(1) 4号墳全景 (南から)



(2) 同 主体部出土壺 (東から)



(3) 同 主体部 (南から)

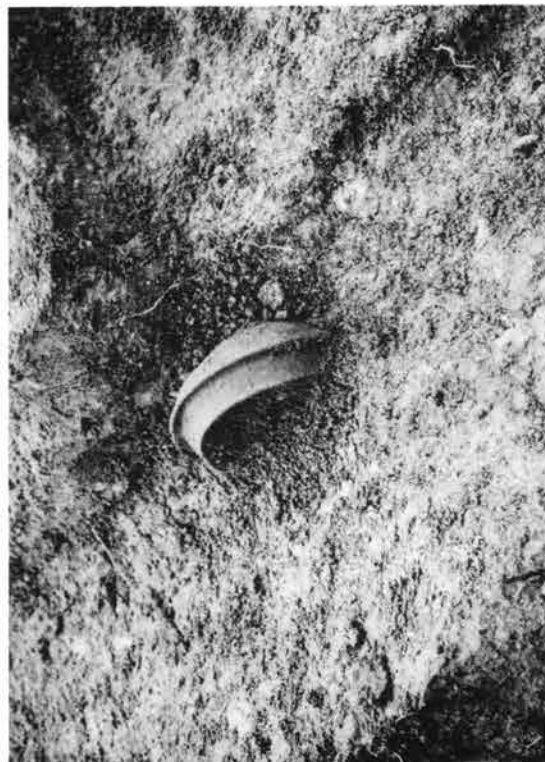




(1) 5号墳全景（南から）



(2) 同 人物埴輪（東から）



(3) 主体部出土須恵器（北から）



(1) 5号墳東部の埴輪(東から)



(2) 同 南東部造り出し(南から)



(3) 同部分上部と埴輪(北西から)



(4) 同部分出土の埴輪(南東から)

図版第12 塩谷古墳群



(1) 2・3号墳間の濠 (西から)



(2) 3・4号墳間の濠 (西から)



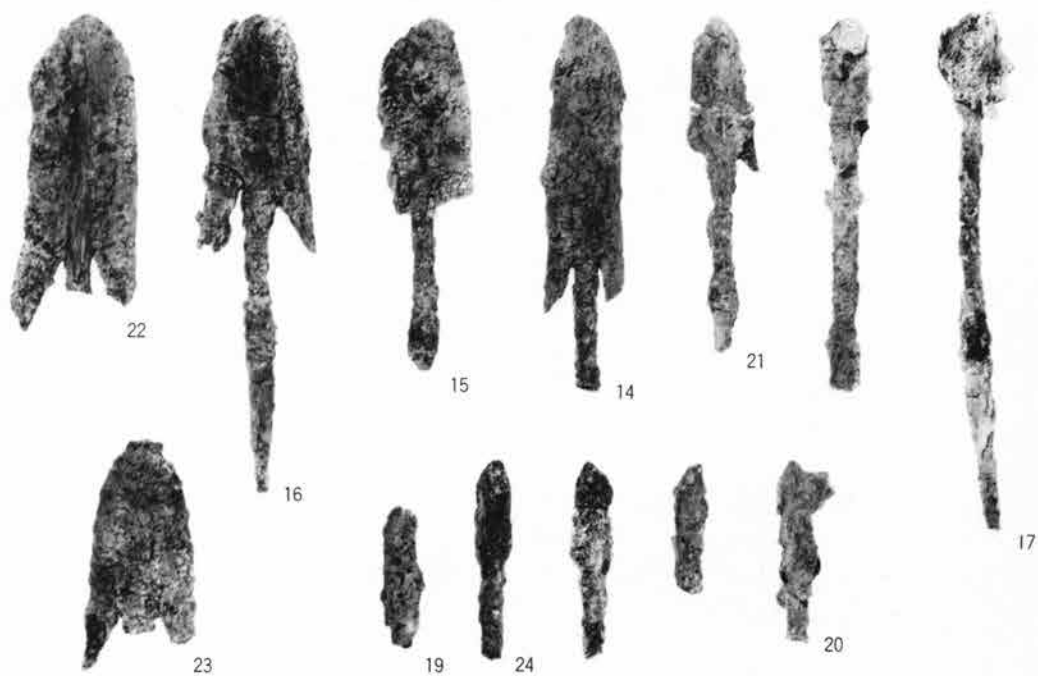
(3) 現地説明会風景



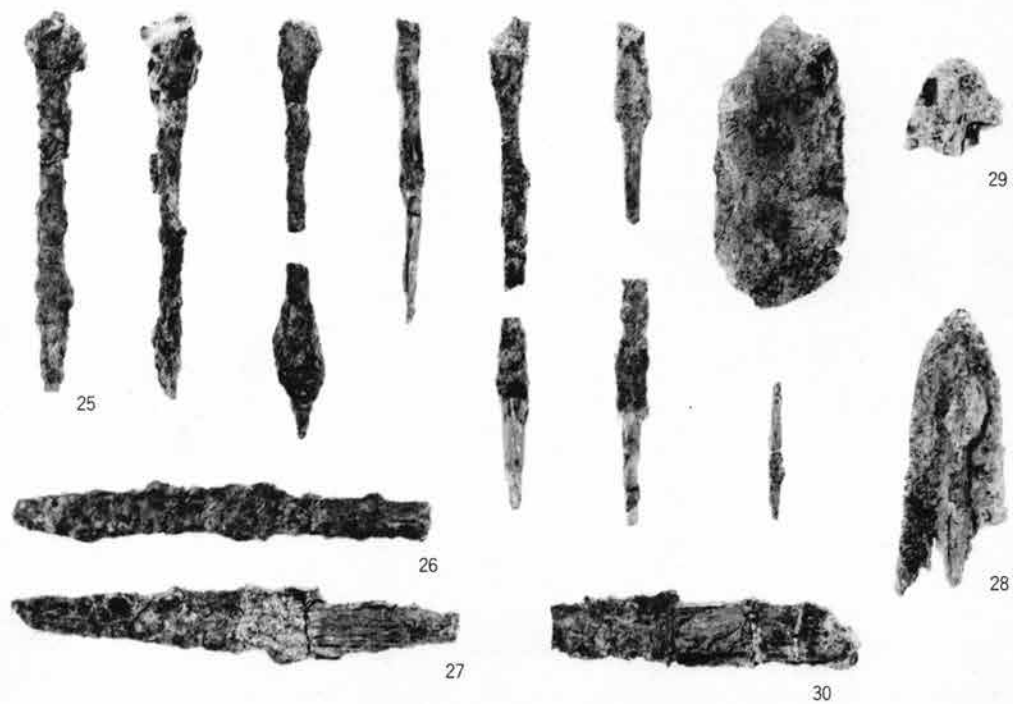
(4) 2～5号墳全景 (北から)



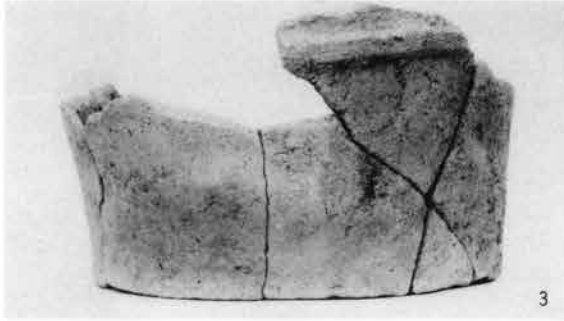




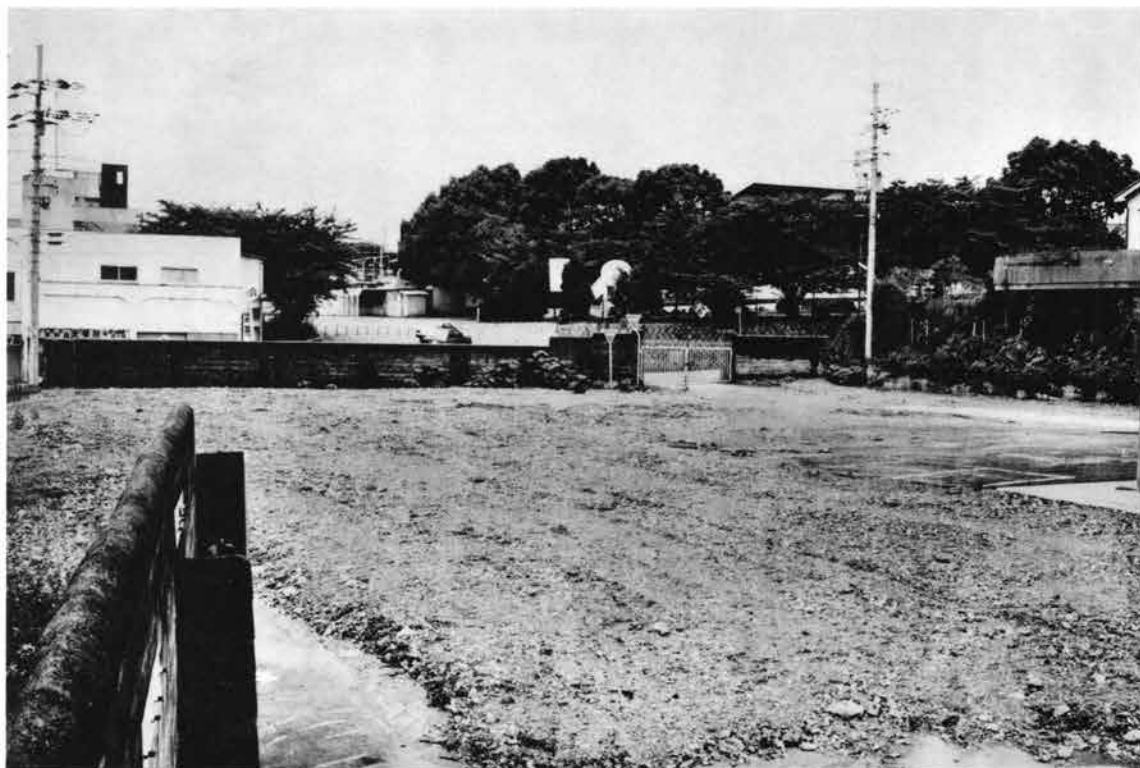
(1) 鉄製品



(2) 鉄製品



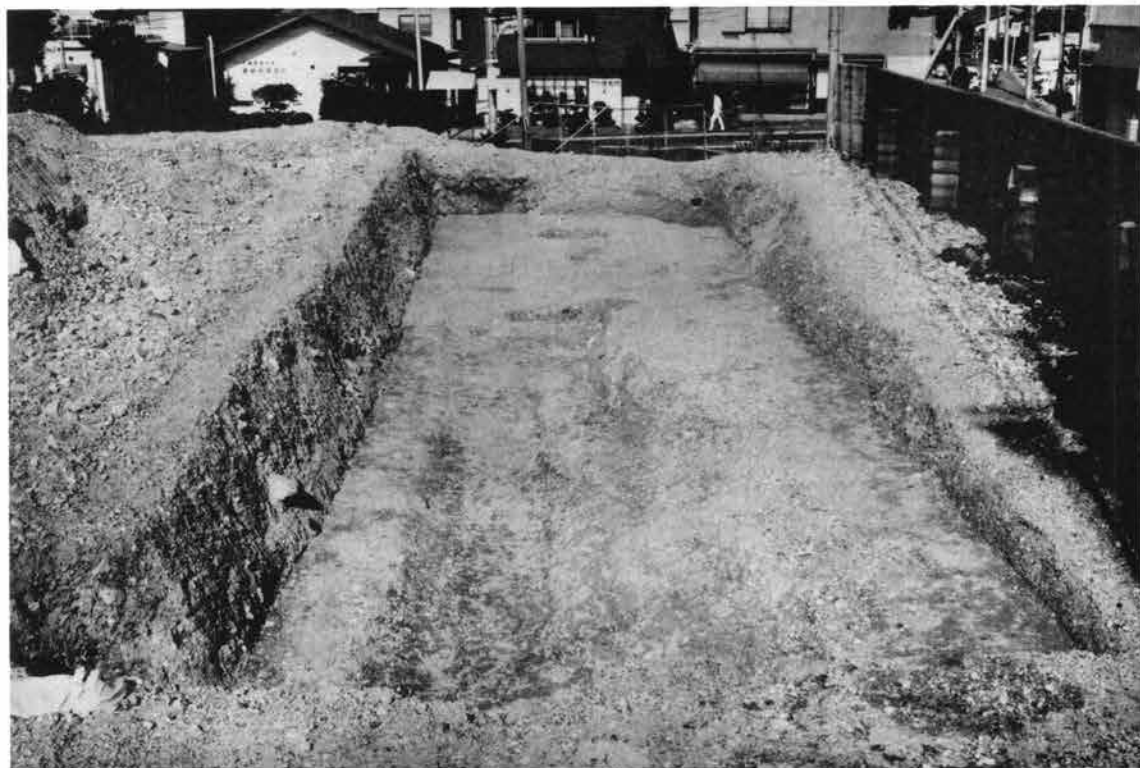
出土遺物（須恵器・円筒埴輪）



(1) 調査前風景（北から）



(2) 第1トレンチ全景（南方から）



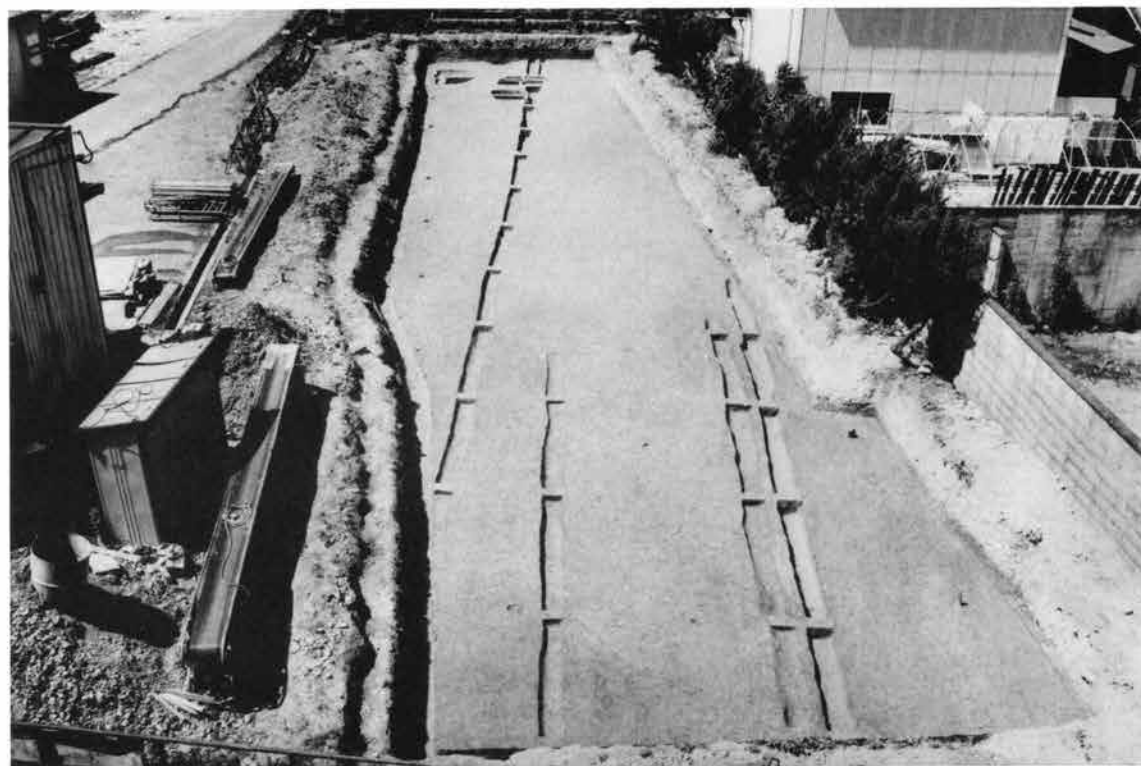
(1) 第2トレンチ全景(西から)



(2) 第2トレンチ東壁断面

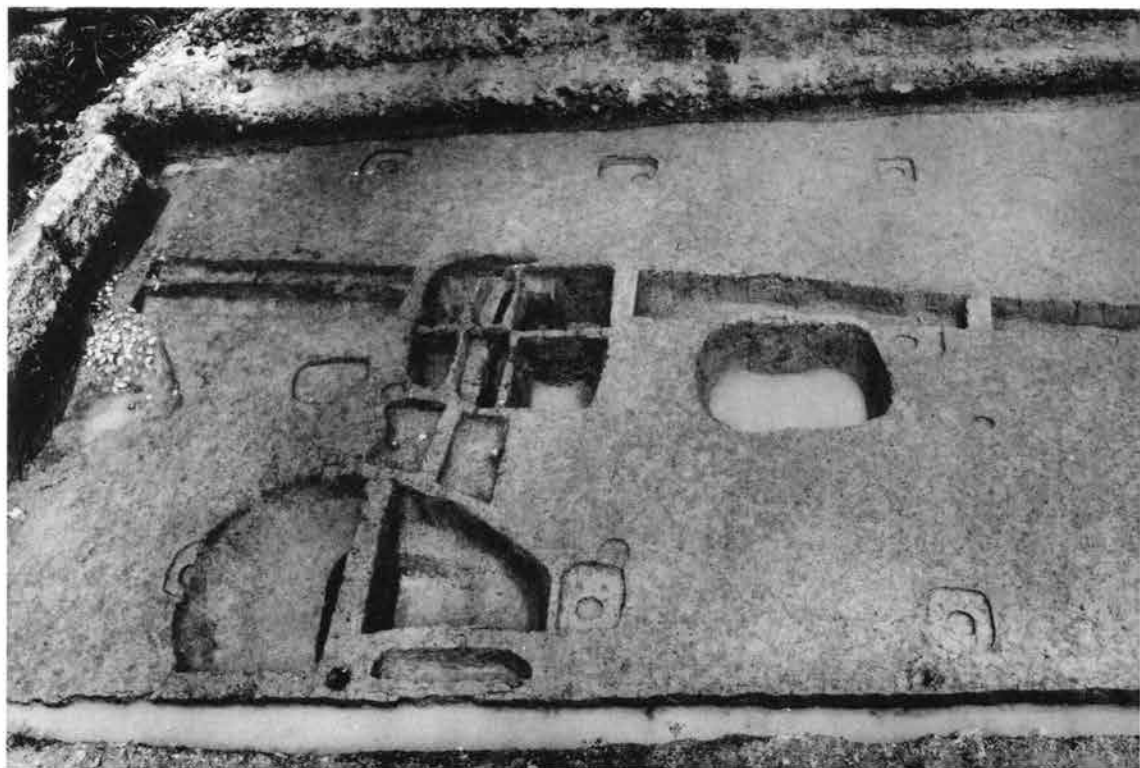


(1) 発掘調査前（南から）

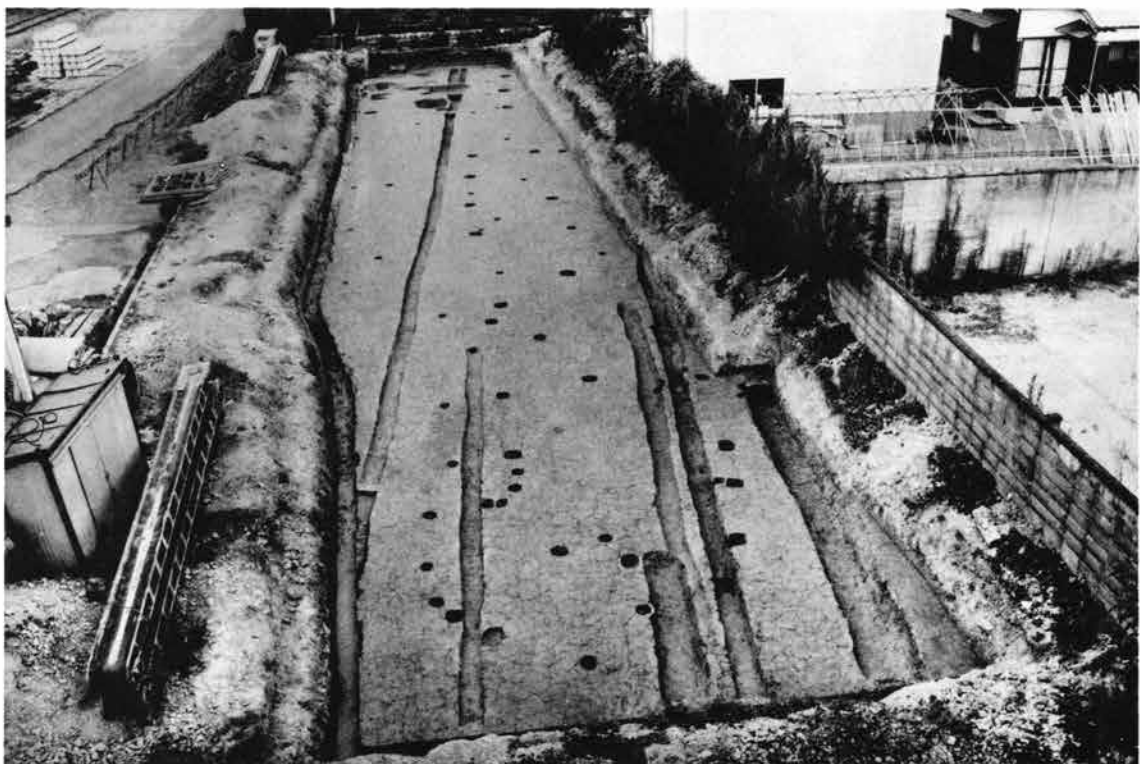


(2) 中・近世遺構（南から）





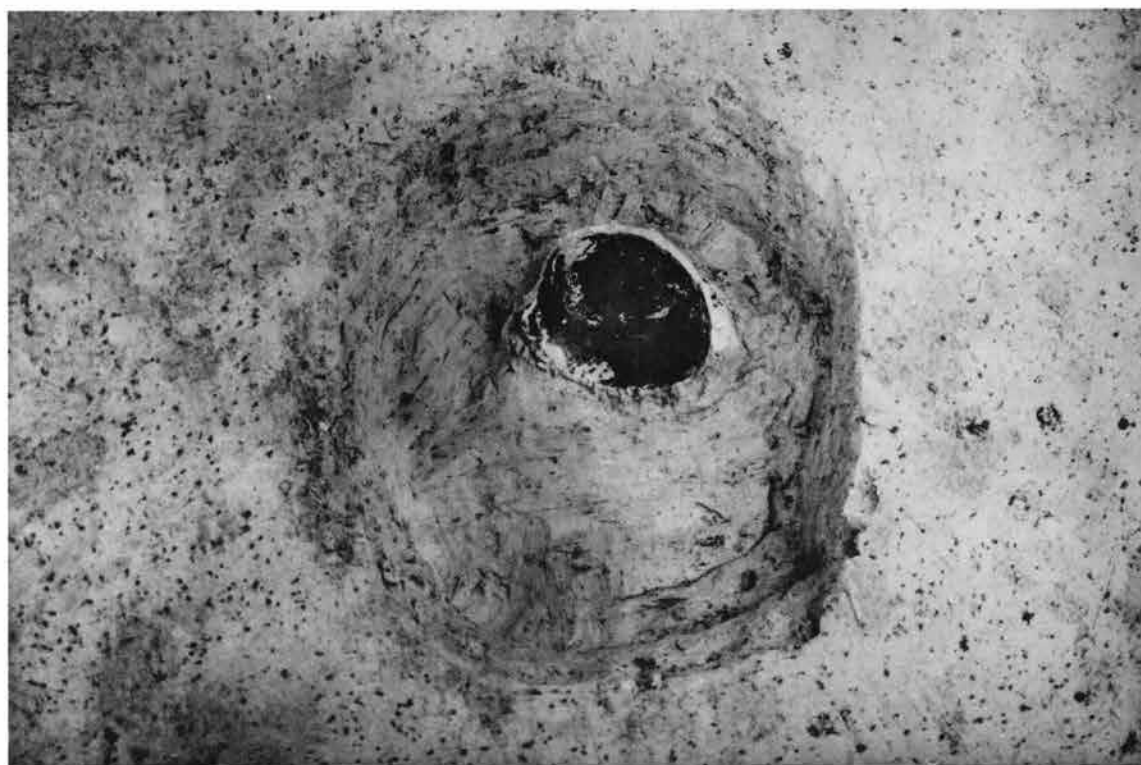
(1) トレンチ北部近景 (西から)



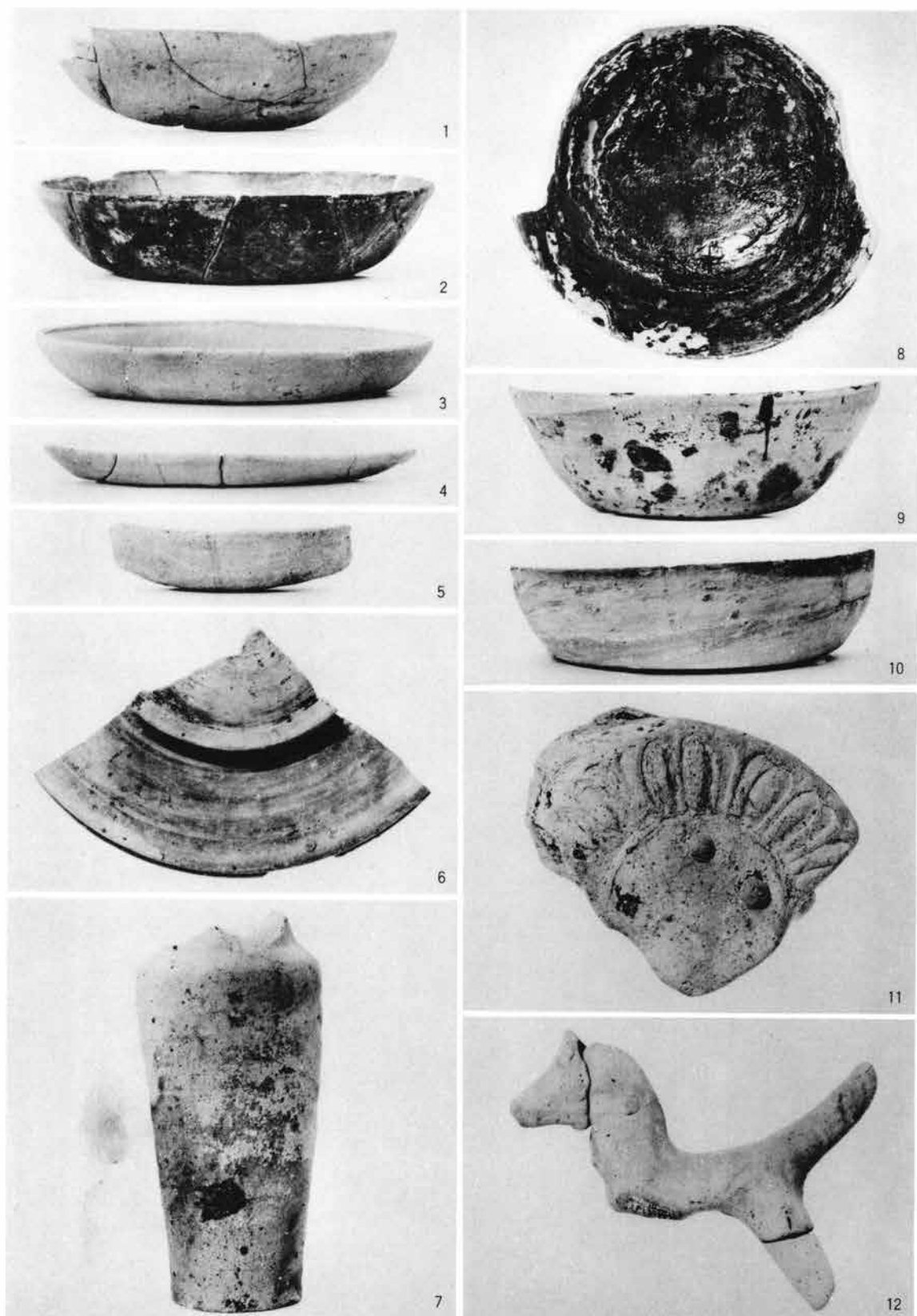
(2) トレンチ完掘状況 (南から)



(1) S D 22201遺物出土状況



(2) S A 22204のPit内遺物出土状況



出土遺物 SD22201(1~5・10・11), SD22202(7・10), SA22203(6・8)



図版第22 内里八丁遺跡



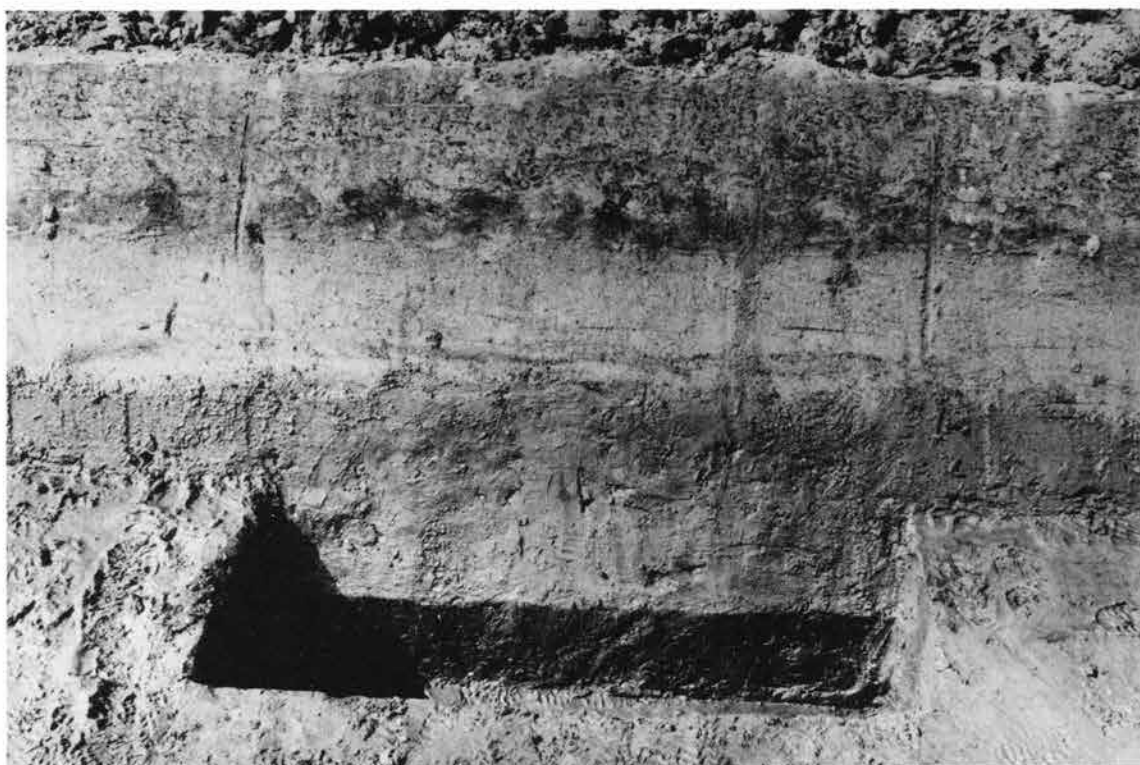
(1) 昭和63年度調査前全景（北西から）



(2) 1トレンチ全景（南から）



(1) 6トレンチ作業風景（東から）



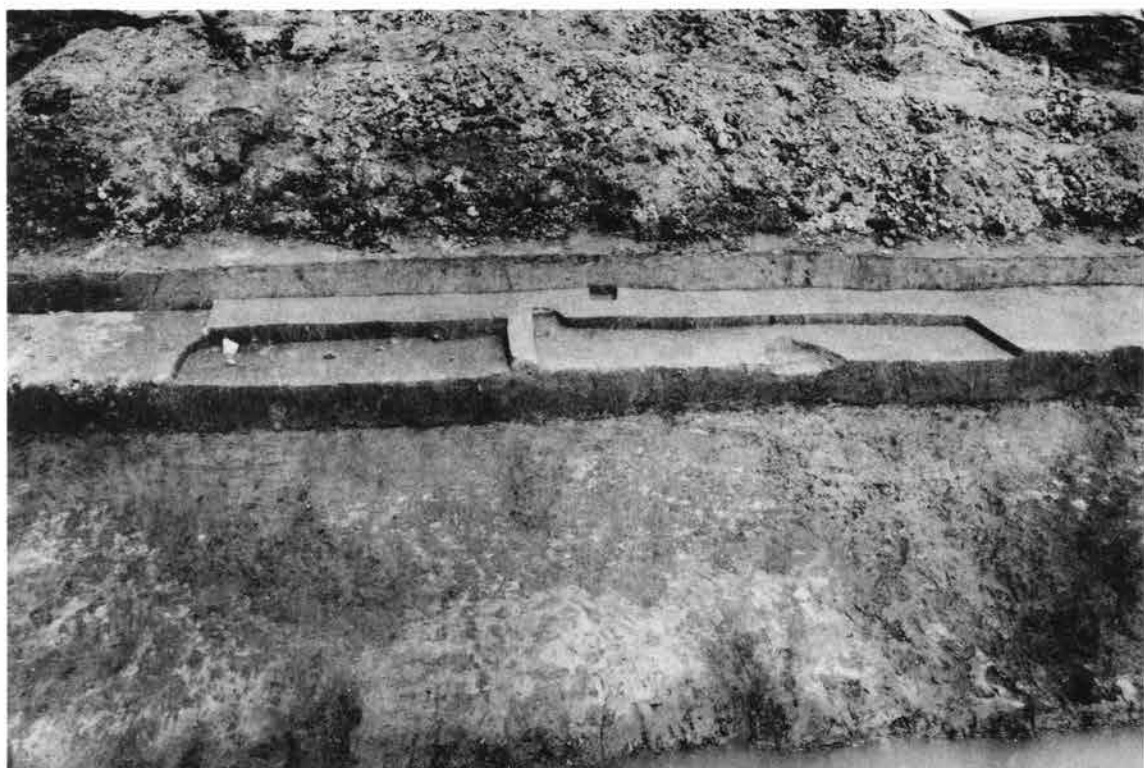
(2) 8トレンチ断面（東から）



(1) 平成元年度 調査前全景 (南から)



(2) 4トレンチ全景 (南から)

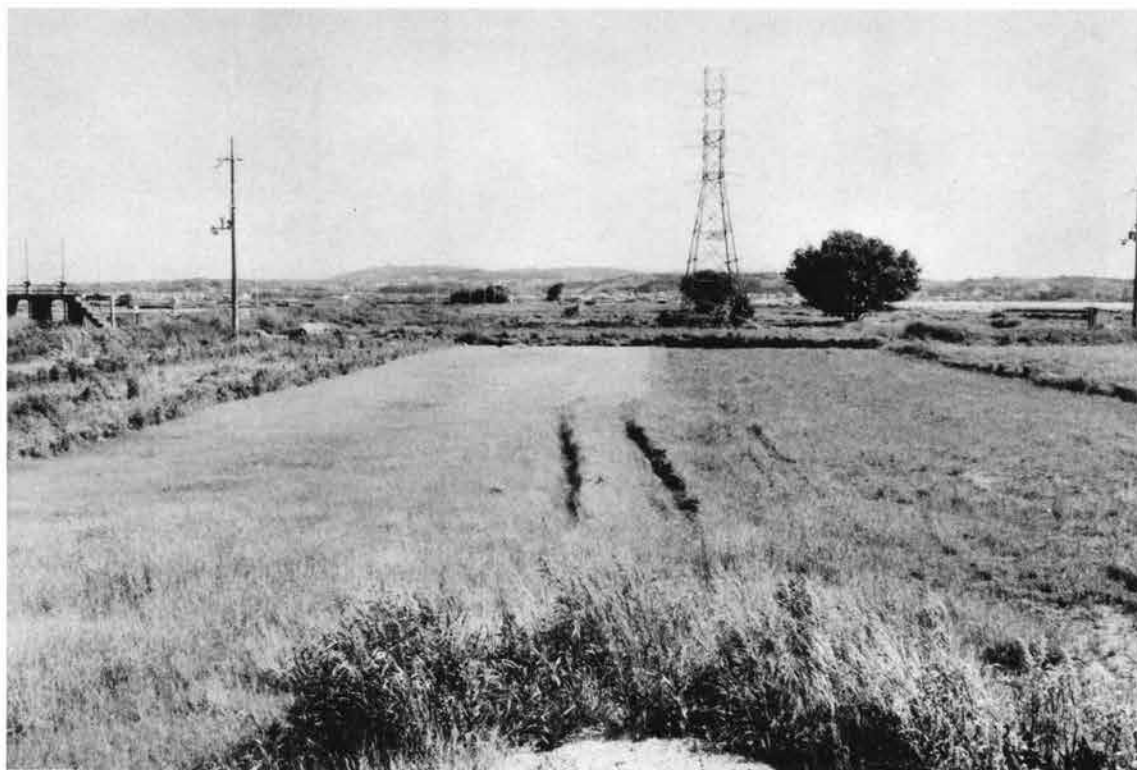


(1) S H1101全景 (西から)

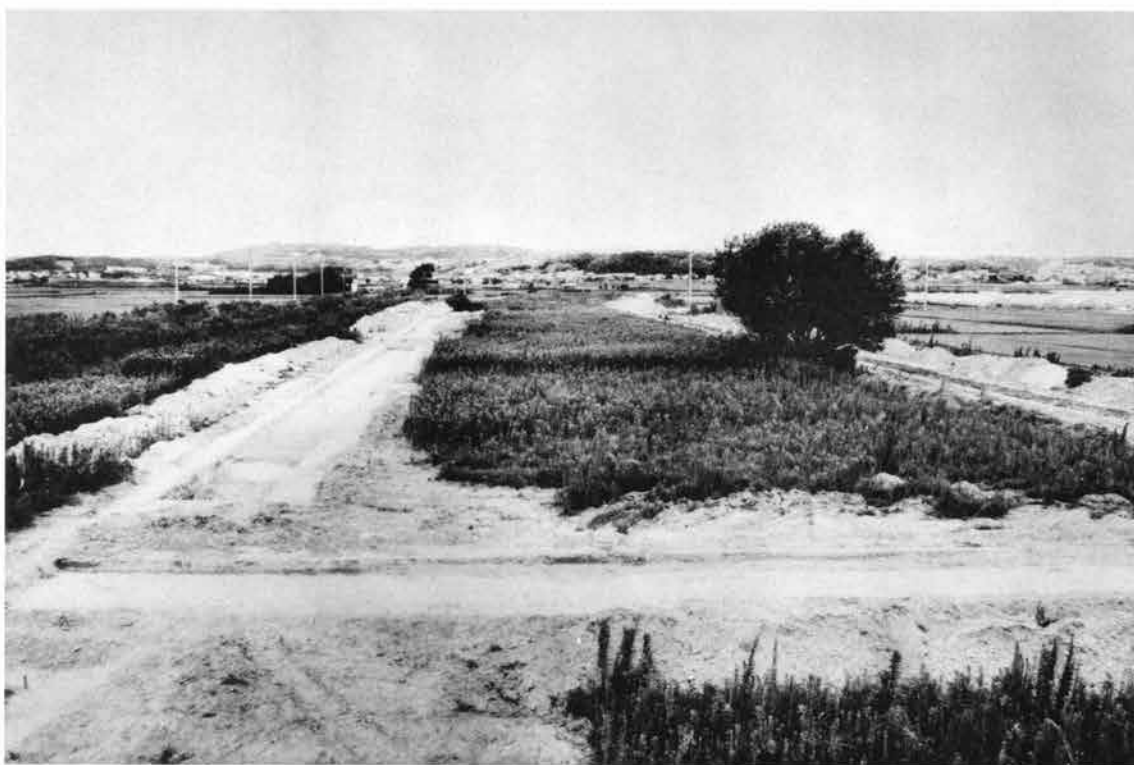


(2) S H1101遺物出土状態 (南西から)





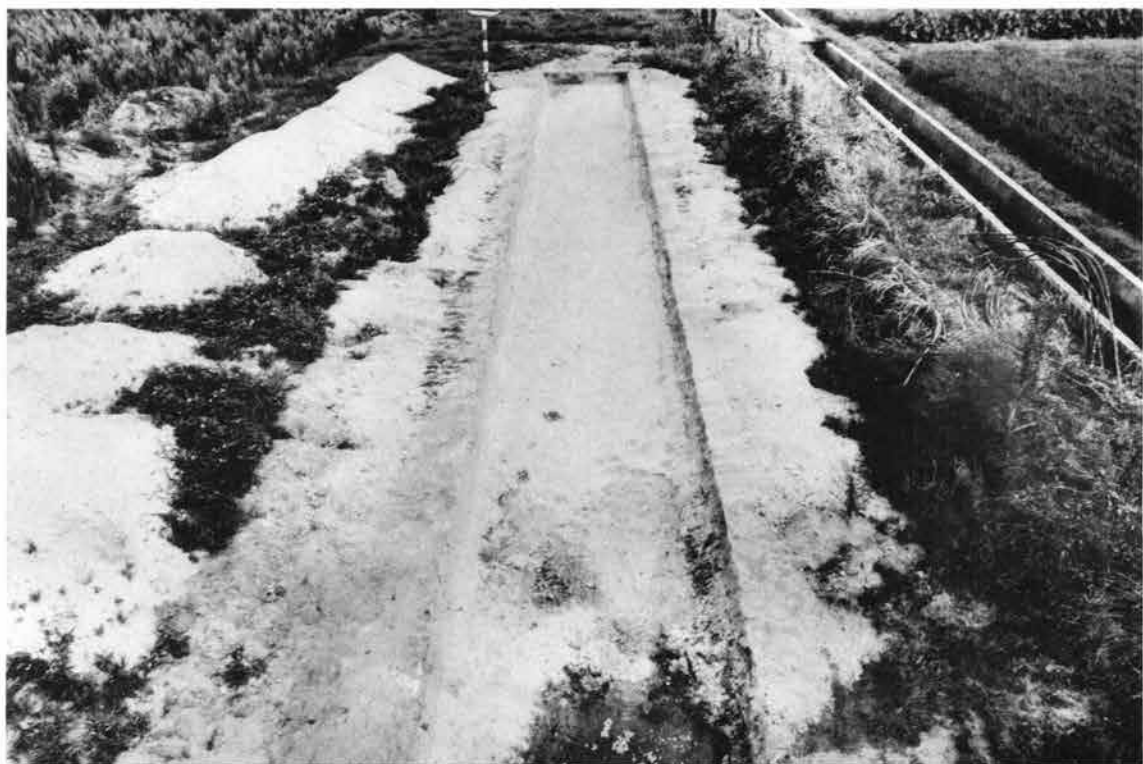
(1) 調査前全景（北から）



(2) 7トレンチ全景（西から）



(1) 5トレンチ全景 (南から)



(2) 調査後全景 (北から)



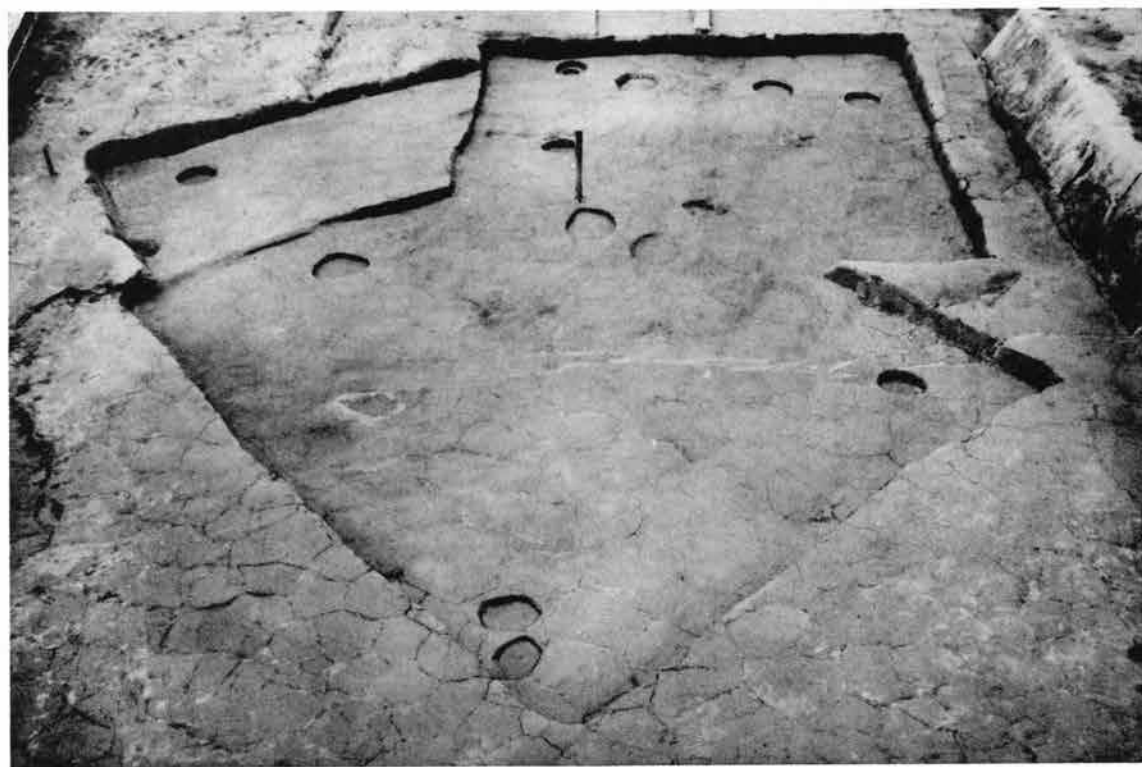
(1) トレンチ全景



(2) 竪穴式住居跡1・2・3

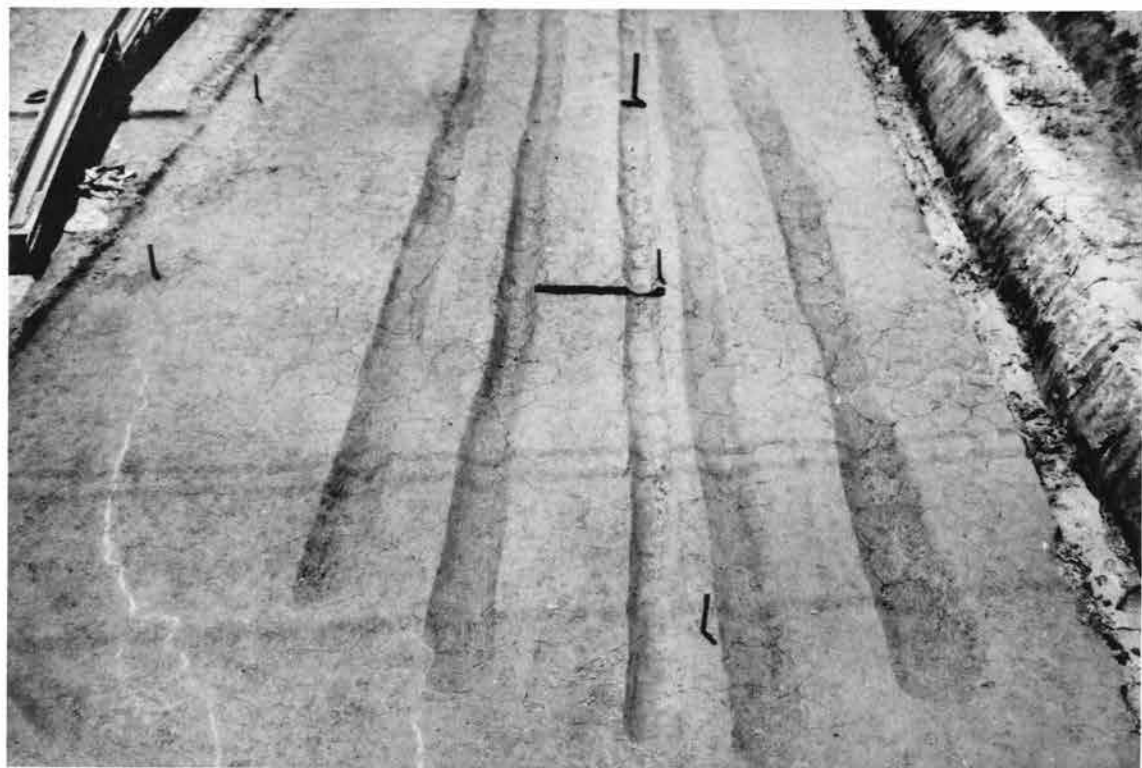


(1) 竪穴式住居跡4・5



(2) 竪穴式住居跡6・7・8





(1) 素掘り溝群



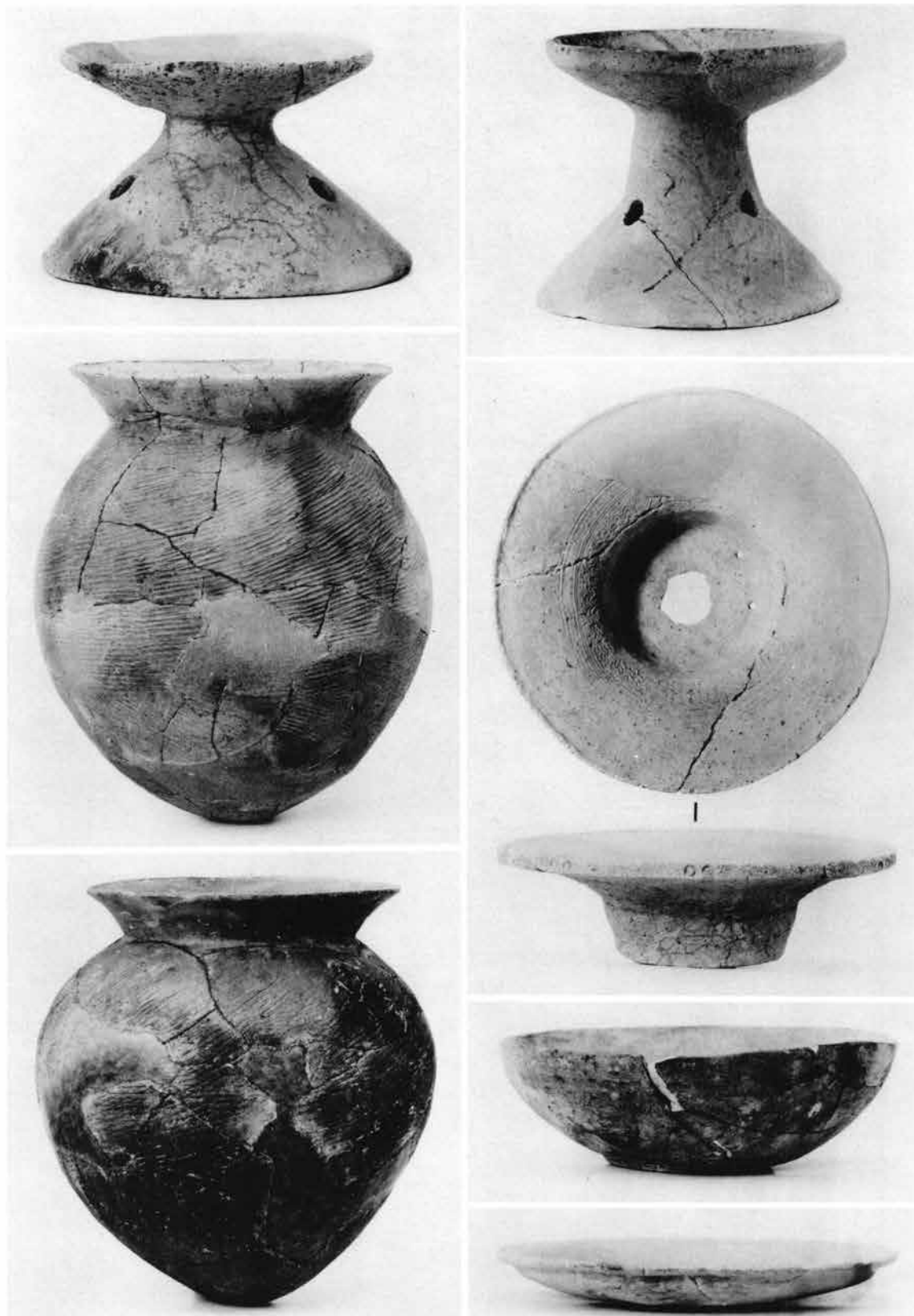
(2) 土坑群



(1) 柱 穴 群



(2) 噴 砂 (断面)



出土遺物

## 京都府遺跡調査概報 第38冊

平成2年3月23日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
TEL (075)441-3155 (代)